

營利の手段として労働者を備ふ企業家とである。家庭に於ける婢僕の労働、醫師や按摩の勤勞は仲介者を假ることなしに直接に消費者に依て購入され、消費者は差當りその所得を以て之に支拂ふ。反之、工場鑛山の労働、銀行會社の被備者の勤務は、その結局の結果は消費者の享樂に役立つにもせよ、直接に之を購入するものは營利を目的とする企業家であつて、彼れは差し當り其資本を以て之に支拂ふ。兩者何れにしても労働の價格は廣義に於ける賃銀である。即ち所得の一種類は賃銀である。

次に所有物其者を賣却することは反覆出来ない。併し所有財の「體」其者を保存しつゝたゞ其「用」を賣ることは持續的に行へる。土地を賃貸し、家屋を賃貸し、ビヤノを賃貸し、貸衣裳貸ボット其他其他を賃貸する場合がそれである。其價格は賃料といふ。但し労働力の場合と同じく、耐久財も使用に依て消磨するから、一財の「用」を永續的に賣却し得んが爲めには其補充修繕を行はなければならぬ。故に賃料の一部分は之を保留して此補修の用に充てなければならぬ。土地其者は天與物であつて、其こそリカードの所謂本原的且つ不可滅的の力を有するが、併し人工に依て土地に加へられた力、即ち圍墻排水灌溉其他に依て造られたる地力は消磨する。これは一定の地力を維持する爲めに補充しなければならぬ。故に土地の賃貸料も其の全部が永續的元本から湧出するのではな

い。

賃貸し得るものを大別して二とする。一は天與にして人力に依て再生産すべからざるもの、即ち重に土地、第二は再生産し得るもの、例へば家屋、車輛、機械其他である。賃貸料を英語で *rent* といふが、*rent* の語は普通多く土地の地代に就いて用ゐられ、従つてレント論といへば地代論の如く思はれてゐるが、實は其よりも廣い意味を有する言葉で、家賃もビヤノや貸ボットなどの借料もレントと稱して差支ないのである。たゞ同じく賃料の中にあつて地代が特殊の性質を有するといふのは、右にも言ふ通り土地は再生産することが出来ないからである。再生産し得るものであれば、賃料其者の高下が其物の再生産を刺戟する。賃料が或程度以上に高ければ、例へば家屋なら家屋の生産、従つて供給が増加して賃料を引下げ、賃料が廉ければ、家屋を破壊するといふことこそ行はれぬけれども、其補充が阻止されるからやがて其供給量の減少を來たす。土地に就いては此作用が行はれぬから、地代其者は土地の價格に對して常に主動の位置に立つて、決して家屋其他に於けるが如く地價が主となつて地代を動かすといふ作用が起らない。此點に就いて再生産し得べきものと得べからざるものとの賃料理法に相違があるのである。

さて右に再生産し得べきもの、例へば家屋の賃料が一定の程度以上に上ると其生産が刺戟されると言つたが、その一定の程度といふのは何の程度であるか。それを主として定めるものは抽象的購買力の形に於ける資本の「賃貸」料即ち利息率或は利率である。元來元本を保有して其「用」づけを持続的反覆的に賣るといふことは、特定の用途ある具體的物財に就てのみ行はれる譯ではなくて何れの具體的物財とも換へ得る貨幣其者に就いても之を爲し得る。即ち利息を徴して人に貨幣を貸すのがそれである。此場合の利息は貨幣の形に於ける所有財の一定期間に互る「用」の價格に外ならぬが、元本其者が貨幣額として現れてゐるから、價格を何圓何錢と稱へずして、年何割何分で言ひ現す。然るに今日は何物でも貨幣で購ふことが出来るのであるから、賃料と利率との間には必然的に或關係が成り立つ。即ち我々は若しも差し當り欲望充足の爲めに使用するを要せぬ貨幣額を有するならば、貨幣の形で貸與して利息を徴しても好し、それで家屋か土地か或は其他の何かを買つて其を賃貸して賃料を收めても好い。假りに私が一萬圓といふものを持つてゐるとする。市場の利率を五分とすれば、一萬圓を其儘貸附ければ年に五百圓入る。然るに其の一萬圓で借家を建てるか買ふかして之を人に貸せば、年に七百圓入るものとする。さうすれば私は一萬圓を其儘で貸すよりも、之で家屋を建て、貸した方が有

利な譯である。勿論たゞ五百圓と七百圓と比較してそれだけで損得は定められない。第一貨幣を家屋なり土地なりに換へれば、それだけ用途を限定される危険がある。貨幣の形で置けば何で入用のものに換へられる。家屋とか土地とかになれば處分し惜い。貨幣の儘ならば何時でも借手がある。土地とか家屋とかになれば借手は見當らないかも知れぬ。これを斟酌しなければならぬ。又家屋ならば修繕費を考へなければならぬ。監理の手數も考へなければならぬ。これ等の危険や煩勞を總括して假りに家賃の一割としよう。さうすると五百圓と六百三十圓である。これなら無論家屋を建てるか買ふかして貸した方が好い。さうすると利率と家賃と建築費との間に此程大きい開きがあれば、貸しても好いと思ふ金を持つてゐる者は、其れで家屋を買ふなり建てるなりする筈である。家屋其他の再生産し得るものに就いていへば、其價格は生産費と相一致せんとする。家屋に對する需要が増せば家屋の價格が騰貴する。併し家屋が騰貴して建築費以上に上れば建築が増す。そこで家屋を貸さうといふ者が増加する。家賃が下がる。下落は家賃と建築費との割合が利率に一致する所迄行つて止む譯である。その時に始めて安定が得られる。

これは再生産し得るものゝ場合である。土地となると土地を造り出して賃貸するといふ譯に行かな

いから、地代の騰貴者が地代引下の作用をなすといふことがない。其代り地價が騰貴する。即ち或土地が一定額の地代を生ずるものとする。而して土地其者も賣買されるとする。若し地代と地價との割合が利率よりも高ければ、一定額の貨幣を有する者は、其を其儘貸附けるよりも其で土地を買つて貸する方が利益である。又土地を賃借する者の方から言つても、此の如き場合には直ちに土地を賃借するよりも寧ろ利息を拂つて貨幣を借りて其で土地を購入した方が有利である。何れにしても土地に對する需要を増すから地價は騰貴せざるを得ぬ。而して其の騰貴は地價と地代との割合を略ぼ利率に一致せしむる點に至つて止むであらう。さうすると土地なり家屋なりに對する賃料は此等の具體物に對しては賃料があるが、その具體物購入に投せられた資本に對しては利子たるものである。之を借る者の方から見ても、貨幣の形で借るのは物の代りに其を買ふべき貨幣を買ふに外ならぬ。例へば利息を拂つて一萬圓借りて住宅を建てる。或はたゞ家賃を拂つて借家をする。これは畢竟借家する代りに一萬圓借り、一萬圓借りる代りに借家するといふに歸着する。故に所有物の「用」を賣るといふことは、結局資本の用に對して利子を取るものだと見て好い。

貸す方は此通りとして、借る者は誰れか。これも勞働の場合と同じく二ある。消費者と企業家とである。住宅を借り、貸ポットに乗り、ピアノを賃借し、或は將來の収入を當てにして生活又は享樂の資金を借るのは前者の場合である。工場の建物敷地等其者を賃借し或は此等の物や更に原料や機械を購入すべき資本を借るのが後の場合である。消費者が借金する場合には現在の享樂と將來の享樂放棄との比較に依て借否を決する。五分の利息で一萬圓借用するのは、現在一萬圓を以て購入し得る享樂を一年後一萬五百圓を以て購入し得る享樂（享樂は廣い意味、即ち欲望満足の意味に解する）よりも重しとするからである。企業家が借る場合には一萬圓を借入れることに依て、得らるべき収益（又は収益の増加）が利息たる五百圓以上に上ると豫想するからである。

以上述べた所に由て、兎に角財産所得は大別して二にすることが出来る。貨幣といふ浮動の形態にある資本に對する利子、特定の具體財に對する賃料、更にこれを別つて二にする。再生産し得べきもの（家屋の如き）に對するものと得べからざるもの（土地の如き）に對するものと即ち是れである。最後に生産物を賣却する場合である。前述の如く、所有物を賣却すれば其物は失はれて仕舞ふ。従つて之を繰り返すことが出来ぬ。従つて繰り返し賣却し得るものといへば、其は新に湧出、又は増加したものでなくてはならぬ。物を生産しても、其生産物の價格全部を任意欲望充足の用に充て得る譯

ではない。其をすれば其の次の期に於て同じ程度の生産を反覆することが出来ぬ。これをするには生産に費した丈けのものを償はなければならぬ。然らば其の生産費は何を以て成るか。生産を営むには労働を備はなければならぬ。建物や機械を設備し、原料を購入しなければならぬ。即ち此等のものゝ價格を支拂はなければならぬ。支拂ふには資本がなくてはならぬ。其資本を他から借り入れるとすれば利子を支拂はなければならぬ（自己所有の資本を用ゐるとしても同じく利息を計算しなければならぬ）。即ち生産費とは企業家が生産に必要な諸般のものに對して支拂はれる價格である。生産物の價格から此諸價格を控除した殘額丈けが彼れの任意に處分し得るものであつて、これが利潤である。即ち利潤は二つの價格の差額である。一は生産手段の價格、一は生産物の價格である。此の兩價格の間に果して正數の差額があるか否かは、懸つて企業家が果して市場の需要を正しく觀測するか否か、又生産要素の結合を適當に行ふか否かに由て定まる。故に生産物價格から生産手段の價格を控除した差額は即ち企業家任務の價格であると謂つて好い。企業家にして需要の觀測を謬り、一定の生産手段を糾合して生産手段の價格合計よりも低い價格の生産物を供給したならば、彼れは市場に對して負數の價値ある任務を提供したのである。即ち彼れは此場合負數の利潤即ち損失を以て報ひられる。形容的に

いへば、社會は企業家を其生産手段の謬用に對して損失を以て處罰するのである。

交換經濟の下に於ける所得、及び如何にして所得が收得されるかは右述の通りである。所得は何れも皆な生産手段の價格として收得される。従つて所得の收得されるといふ事實其者は、反面に於て其に相當する生産手段が供給されてゐるといふことを示す。而して所得の收得される事實其者は其の供給せられた生産手段が所得に示された丈けの需要を満たしてゐることを示す。所得は労働の給付、資本「用」の給付、企業家勤務の給付に對する價格として收得せらるゝこと上述の如くであるが、たゞ労働が給付せられ、資本の「用」が給付されたといふ丈けでは其に對して所得は得られない。その給付が需要に適應するものでなければならぬことは言ふ迄もないのである。

然るに貨幣の形で收得された所得は再び支出されなければならぬ。支出するのは無論物を買ふ爲めである。此の貨幣所得の支出に依て購はれたものを實物所得と謂つて好い。然らば如何なるものが買はれるか。今日の交換經濟に於ては、原則として何を買ふかは各人の自由に委せられる。國家が特定物の消費を好ましからずとして之に禁止的高税を課することもないではないが、例外に屬する。所得は通常一部分は「消費」せられ、一部分は「貯蓄」される。但し「消費」といつても、所得として流入

した貨幣其者を欲望充足の用に供して消耗して仕舞ふ譯ではない。其を支出して直接欲望充足の用に充て得べき享樂財を購入する丈の事である。同様に「貯蓄」といふのもたゞ其貨幣を死蔵することではない。結局「貯蓄」せられた所得も何物かを買ふ爲めに支出される。たゞその買はれるものが享樂財でないといふ相違がある。所得の一部分を貯蓄すれば將來の所得は増加する。所得の宛かも全部を「消費」すれば年々増減なく同額の所得が流入する。所得額以上の消費が行はれると財産の減損を來たして將來の所得は減少する。私は便宜上先づ各經濟單位が年々同額の所得収入を繰返す場合、即ち所得の全額が享樂財購入の爲めに支出せらるゝ状態を假想して叙述を進める。

第五章 交換經濟的循環 (二)

一定額の所得が如何に各種の享樂財に分ち支出せらるゝかはゴッセン第二法則、即ち限界効用均等の法則に由て定められる。各人は其所得の支出を出来る限り有効に行はんとする。即ち一定額の貨幣を支出するのに常により小なる効用を棄てゝ出来る限り大なる効用を得んと努める。然るに欲望は満たすに従つて其強度が減退する。従つて始めに最も強烈に感じられた欲望が必しも終始欲望の第一位を占める譯ではない。そこで所得の支出は各種の財に配當される。若しも此の欲望遞減法則といふものがなかつたならば、人は唯一種の欲望の充足に其の一切の力を捧げなくてはならぬ筈であること既に前に述べた通りである。然らば支出が如何に各種の財に配當されるかといへば、それは當然各用途から收められた限界満足に大小の差がないやうに配當されるのである。若し其差があれば支出は必ず満足の小なる用途から其のより大なる用途へ移されるからである。従つて此配當が合理的に行はれた状態に於ては、貨幣所得の一單位、例へば金一圓といふものは、何れの用途に用ゐても等しき効用を齎さ

なければならぬ。而して又此の配當の行はれることに依て吾々は始めて貨幣の限界効用を云々することが出来る。貨幣一單位の吾々に取つての重要な程度は、無論其を以て購ひ得る具體財の限界効用に依定まるのであるが、若しも貨幣の齎す限界効用がその用途（例へば、食料品の購入衣服の購入娛樂物の購入等々々々）に由て一々相違するならば、吾々は貨幣一單位の得喪が吾々に齎す満足の得喪を一々の用途に就いて考へなければならぬ。例へば新に金一圓の齎す満足如何といふ時に、それを食物の購入に附加すれば幾許、衣服の購入ならば幾許、娛樂物の購入ならば幾許といふ如くである。然るにさうでなくて、私なら私に取つての單一なる貨幣の限界効用といふことを考へ得るのは、全く此のゴッセン第二法則の作用によるものである。而して此の法則の作用に依て人は其所得の何れの部分をA、何れの部分をB、何れの部分をC等々々と、各種の購買に支出さるべき貨幣額を定めることが出来る。而して一人に就いてした事を凡ての人に就いて合計すれば、其處にAならA、BならBといふ生産物に對して支出せらるゝ總金額が分かる。即ち國民經濟全體に於てそれだけの金額がAの購買の爲めに支出されるのである。BC以下に就いても同斷である。（勿論此の購買總額といふものは購買者の欲望と所得額とのみに依て一方的に定まるのではなくて、必ず購買さるべきものゝ價格を條件として定ま

る。即ち普通の場合には價格が騰貴すれば購買量は減少し、下落すれば其反對となるのが常であるが、併し價格が何れなるにもせよ、一定の價格の時に一生産物が幾許量だけ購入されるかは、上記の如く購買者の所得がゴッセン第二法則に基づいて諸々の用途に配當せらるゝことに依て定まる）。

そこで支出せられた所得は生産物の價格として其生産者に支拂はれる。即ち生産企業家の總収益を形成するのである。而して前記の如く所得は凡て享樂財購入の爲めに支出せらるゝものとするれば、一國の所得總額は享樂財の價格總額、即ち享樂財生産者の總収益と一致しなければならぬ。併し此の總収益は無論直ちに彼れの利潤を形成するものではない。此中から原料及び消耗勞働用具の價格を控除しなければならぬ。無論賃銀と資本に對する利子を控除しなければならぬ。其跡の殘額が利潤である。さうすると一切享樂財の價格總額は、原料及び消耗勞働用具の價格と、賃銀、利子及び利潤、即ち其生産に参加した生産手段の價格とを以て構成される。然るに原料及び勞働用具は享樂財と同じく夫々企業家に依て供給せらるゝ生産物であるから、其の夫々の價格も亦た同様に夫々の原料及び消耗勞働用具と賃銀、其他生産手段の價格とを以て構成されるのである。斯くして遡源すれば、結局原料を要せずして原料其者を自然から獲得する生産、即ち原生産に到達しなければならぬ。假りに前章に述べた

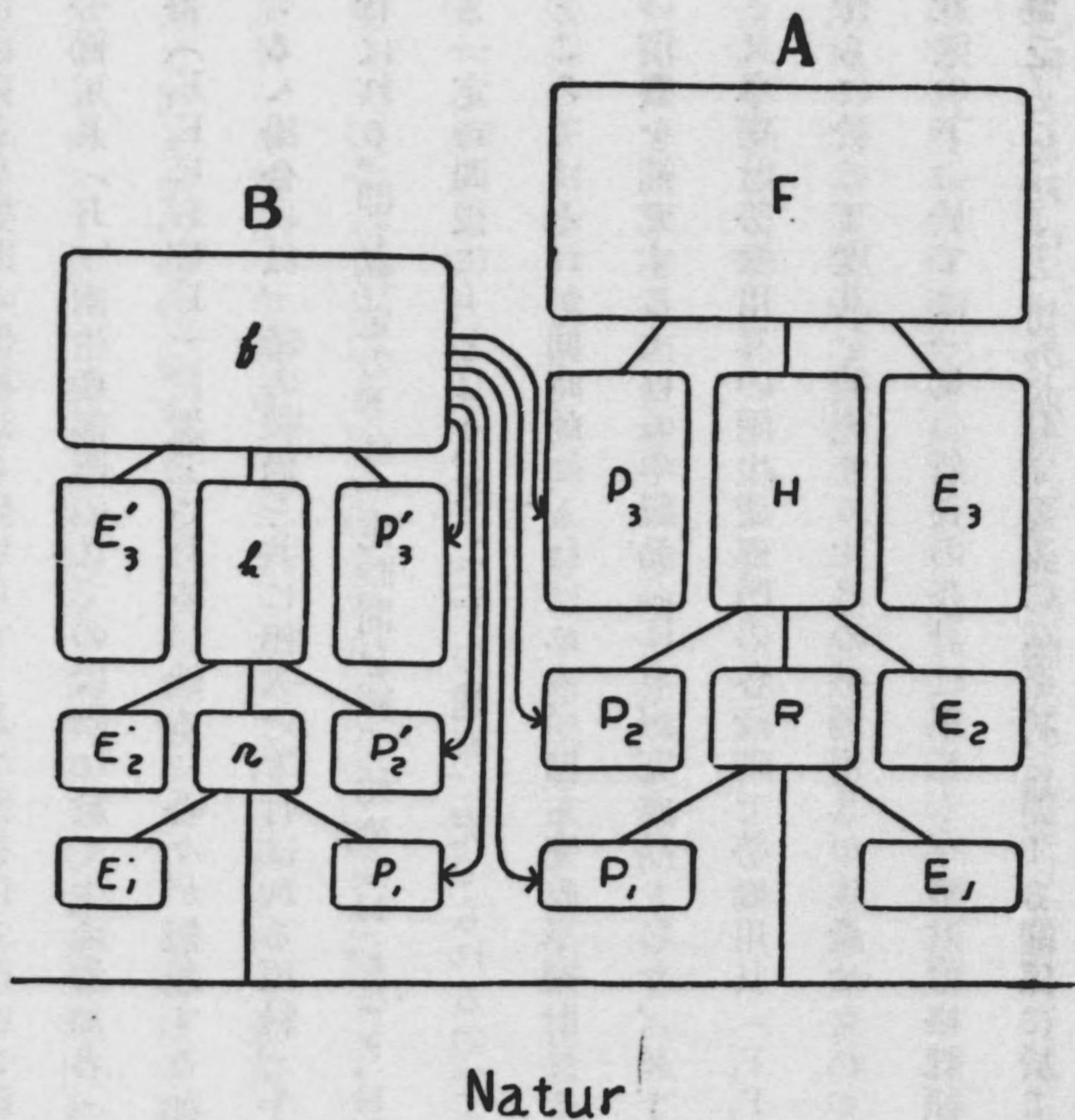
る如く享樂財が完成する迄には原料——半製品——完成享樂財（或は、原生産——半製造——製造）の段階を經過し、是等各階段の生産に参加する勞働用具も亦た同じく原料——半製品——完成勞働用具の順序を経て完成するものとするれば、完成享樂財の價格總額は、半製品の價格と消耗勞働用具の價格と加工勞働の賃銀と放下資本に對する利子（資本放下額の幾許たるべきかは後に説く）及び利潤とを以て構成せられ、更に半製品の價格も同様に原料品の價格と消耗勞働用具と及び賃銀、利子、利潤とを以て構成せられ、さて原料の價格はといふと、原料には又其の原料といふものはないから、これは消耗勞働用具と賃銀、利子、利潤とのみを以て構成されるのである。

然るに茲に勞働用具といふものがある。前述の通り勞働用具も原料、半製品を経て完成するのであるが、その完成した勞働用具は一方では享樂財生産の三段階に使用されて消耗すると同時に他方勞働用具其自身の生産の三段階にも使用されて消耗する。而して吾々が今假想してゐる、年々同一の所得収入が反覆せられ、所得の全額が享樂財の購入に支出せらるゝ場合には、年々完成する勞働用具の價格總額は、享樂財と勞働用具との兩生産部門各三段階に於て消耗する勞働用具の價格總額に等しい。即ち年々の消耗を補充する爲め生産の各段階に於て企業家に依て支拂はれるものが即ち年々完成する

勞働用具の價格に等しいのである。然らば此の勞働用具の價格總額は何を以て構成されるかといふに、これも同じく半製品と勞働用具其者を造る爲めに消耗した勞働用具の價格と及び賃銀利子利潤を以て構成せられ、更に半製品の價格、原料品の價格、皆な何れも上記の享樂財の場合と同様にして結局賃銀利子利潤と消耗勞働用具の價格とを以て構成される。して見ると、勞働用具の價格總額は其原料獲得から其完成に至る迄の各段階に於ける消耗勞働用具の價格と生産参加者の所得との合計に等しいのであるが、同じく一定期間内に完成せる勞働用具の價格總額は、同じ期間内に勞働用具生産と享樂財生産との兩部門に於て消耗せる勞働用具の價格合計に等しい。従つて同じもの（勞働用具生産總額）から相等しきもの（勞働用具部門に於ける消耗勞働用具）を差引いた残りは相等しいから、享樂財生産部門の各段階で消耗した勞働用具の價格合計と、勞働用具部門の各段階に於ける生産参加者の所得合計とは相等しいといふことになる。即ち生産せられたる一切享樂財の價格を分解すれば、結局享樂財生産並に勞働用具生産の一切段階（原生産、半製造、製造）に於ける生産参加者の所得に歸着する。而して此所得は齎つて享樂財に對する購買力として現れる。即ち享樂財の價格總額は之を分解すれば結局生産参加者の所得となるが、その享樂財の價格は誰に依て支拂はれるかといへば所得に依

て支拂はれる。然るに所得は前述の如く生産手段の價格として收受されるものであるから、結局其處に行はれるものは生産手段と完成生産物との不斷の交換である。之を稱して交換經濟的循環といふ。此交換が行はれなければ生産を営むことが出来ぬ。而して又此交換が即ち生産物の分配を定める。交換の割合を定めるものは、交換さるべきもの、相對的不足性である。特定の生産要素例へば労働が、生産物に對して相對的に缺乏すれば、労働の提供者が收める報償は高い。反對に生産物が労働に對して缺乏すれば賃銀は低下せざるを得ない。労働のみならず、他の生産手段に於ても同様である。但し一切の生産物と一切の生産要素とを取つていへば、兩者の供給に過不及といふものはあり得ない。何となれば一切の生産要素（労働も資本も企業家も皆な）が豊富であるといふことは即ち生産物の豊富であるといふことに外ならず、生産物は生産要素の價格たる所得を以て購はれるのであるから、生産物が豊富低廉で、生産要素（の全部）のみ缺乏不廉といふことはあり得ないし、又其反對の事もあり得ない。何となれば所得の總額は生産物價格の總額と一致しなければならぬからである。故に生産要素の豊富缺乏といふことは常に特定要素の生産物に對する關係に於てのみ、即ち他の生産要素との關係に於てのみ言はれることである。

生産物の價格分解を簡略ながら圖にして示せば左の如きものである。



備考。Fは完成享樂財、Hは半製品、Rは原料の何れも價格、fは完成労働用具、hは其半製品、rは其原料の何れも價格を示す。E及びE'は生産参加者の所得、P及びP'は消耗労働用具の價格を示すものとする。

上には完成享樂財の價格から發足して、其が何を以て構成されるかを述べた。其は結局享樂財(A)及び勞働用具(B)兩生産部門の凡ての段階に於て生産參加者(勞働者、資本家、企業家)が收得する所得($E_1, E_2, E_3, E'_1, E'_2, E'_3$)に還元される。然るに吾々が假想する如く、生産が増減なく同一の規模で反覆せらるゝ場合には、時の経過と共に相次いで行はれる原料、半製品、完成品の進轉が又同時に相並んで行はれる。即ち特定のRは一定時間を経て始めてHとなり、Hも一定時間を経てFとなり、r、hは何れも一定時間後にfとなり、次いでPの補充に充てられるのであるが、併し同一規模の生産が反覆されるところではそれが同時的にも行はれる。即ち完成享樂財たるFが消費されつゝあると同時に、丁度その消費を補充する丈けの半製品(H)が完成品となり、又丁度其缺を補ふ丈けの原料が半製品となり、又享樂財勞働用具の兩生産部門の各段階で勞働用具($P_1, P_2, P_3, P'_1, P'_2, P'_3$)が消耗しつゝあると同時に其傍らに於て丁度其を補充する丈けの勞働用具が生産せられつゝあるのである。

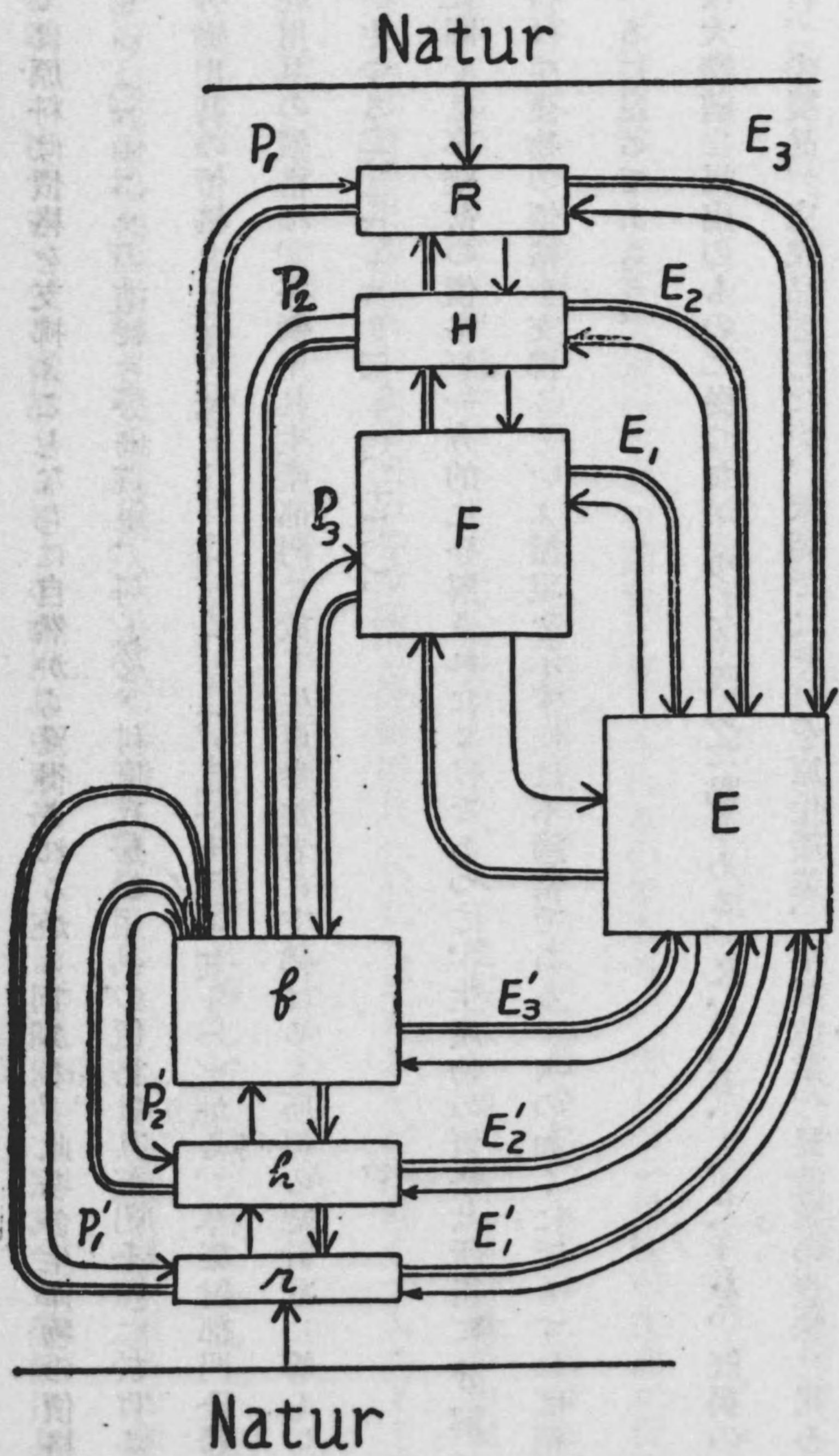
此状態の下に於ては一切の所得の合計は正しく享樂財價格總額に等しい。 $(E_1 + E_2 + E_3 + E'_1 + E'_2 + E'_3 + F)$ 何となれば一切の所得は享樂財購入の爲めに支拂はれるのであるから、享樂財の價格總額は所得の合計以下には下らず、無論以上には上り得ぬからである。又此状態の下では一定期間内に於て生

産の一切部門一切段階に於て消耗せらるゝ勞働用具の價格は、宛も同期間内に完成せる勞働用具の價格に等し s ($P_1 + P_2 + P_3 + P'_1 + P'_2 + P'_3 = f$)。然るに完成勞働用具の價格は其部門全體に於ける所得と消耗勞働用具の價格との和に等し s ($P_1 + P_2 + P_3 + E_1 + E_2 + E_3 + E'_1 + E'_2 + E'_3 = f$)から、享樂財部門全體に於ける消耗用具の價格は、勞働用具生産部門に於て生産參加者に支拂はるゝ所得の總計額に等しいといふ結論が生ずる($P_1 + P_2 + P_3 = E_1 + E_2 + E_3 + E'_1 + E'_2 + E'_3$)。

併し此圖では享樂財の價格が一方的に分解されたわけであつて、生産物の價格は所得に分解せられ、所得は生産物の價格を支拂ふといふ循環を示すには不適當である。次の如くにでもすれば稍々此趣を傳へるに足るであらう。

符號は大體前に掲出のものに従つたが、少しく改めた點もある。R、H、F、r、h、fを、既掲のものには原料、半製品、完成品としたが、本圖ではそれを原生産業、半製造業、製造業の意味に用ゐた。又單線は經濟財の實物(物財及び勤務)の移動を示し、複線はそれに對する價格の支拂、即ち貨幣の移動を示すものとする、Eが所得總額を、 E_1, E_2 等々が各産業部門各段階に於て收得せらるゝ所得を示すことは讀者の恐らく既に推知する通りである。此圖に就いて經濟的循環の大體を叙述しよう。

吾人の欲望を満たす財は、先づ原料として自然から獲得される。それが即ち r 及び R である。たゞ他の場所に於ては單線は必ず反對方向に進む複線と逆に並行してゐるのに、自然から R 又は r に至るものは單線のみで示されてゐる。是は他の取得は皆な對人的のもので有償的に行はれるに反し、獨り此場



合に於ては原料は價格を支拂ふことなしに自然から獲得されるからである。此場合生産物の價格を構成するものは労働用具の消耗と労働賃銀、利子及び利潤である。そこで生産物は原料として半製造業 (H, h) に移る。無論賣却されるのである。即ち複線を以て價格の支拂が示されてゐる。半製品が更に製造業 (F, f) に賣却されるのも同様にして行はれる。此間に一方に於ては使用せらるゝ労働用具が消耗する。従つて次期の生産を同様の準備を以て繰り返すには消耗用具を補充しなければならぬ。補充するとは労働用具生産業から其を購入することである。購入するには無論其價格を支拂はねばならぬ。 f から F, H, R 及び h, r に向つて單線が走り、其と行き交ひに複線が走るのは此事を示すものである。然るに斯く原料の獲得せられ、半製品となり、完成品となるのは労働者が労働し、資本家が資本を提供し、企業家が必要な生産要素を糾合することに依て行はれる。従つて此等の生産的用途に對して其價格が支拂はれなければならぬ。それが夫々此等の生産参加者の所得を形成し、其の所得の總和は E に依て示される。 E から r, h, f 及び R, H, F に向つて單線が走り複線が迎へられるのは、即ち是等生産各段階に生産的用途が供給せられ、其代りに其に對する價格が支拂はれることを示してゐる。而して斯くして形成せられたる E が完成享樂財 (F) を購入せんが然めに支出せ

られることは複線に依て示され、是に對してFからFに向つて單線が走る。而して前述の通り所得の總額が享樂財購入の爲めに支出せらるゝ處では當然EとFとの大さは相等しくなければならぬ。

茲に吾々は實物財と貨幣とが到る處行き交ひに複流するのを見る。消費者と享樂財生産者との間(E—F)、享樂財生産者と半製品生産者との間(F—H)、半製品生産者と原料生産者との間(H—R)、是等凡ての生産者と労働用具製造者との間(F—f, H—f, R—f)、労働用具製造者と其材料たる半製品生産者との間(H—U)、半製品生産者と原料生産者との間(U—U)、此等凡ての生産者と労働用具製造者との間(f—r, f—h, f—U)、而して此等一切の生産者と生産要素所有者との間(F—E, H—E, R—E, f—E, h—E, r—E)に交換が行はれる。

抑も人間が其労働を投じて以て其欲望を充たすべきものを自然から獲得すること、而して其獲得をするに通常其自身過去の労働と待忍との所産たる労働用具の援をかりてすること、而して欲望を充たすべき財は、原料、半製品、完成財の段階を経て享樂に適する状態に到達し、而して享樂の用に供せらるゝと共に經濟生活の域外に脱出するが併し欲望充足に依て維持若しくは増大せられた労働力は更に反覆して享樂財と労働用具との獲得に分ち投せられて、それが各々原料、半製品、完成品の階梯を

經て欲望充足に充てられること、此循環は苟も經濟生活の營まるゝ限り何處に於ても變りなく行はるゝものであるが、交換經濟に於ては此循環が一々交換過程として行はれる爲め、更に複雑なる特殊の姿を取つて現れるのである。是に由て見ると生産手段は人間から發してR、H、D、r、h、fに注がれ、結局享樂財となつて人間に還り、生産手段の價格として收められた所得は貨幣の形で支出せられて反對の方向に進み、行く々々原料の價格を支辨しつつR、H、Fを逆に遡つてRに達する間に一部は各段階に於ける生産的用途の價格を支拂つてE₃E₂E₁となつて還流し、一部は消耗せる労働用具の價格を支拂つてfに來り、同じく原料の價格を支辨しつつrに到達する其間に各段階に於て購入せられた生産的用途の價格を支拂つてE₁E₂E₃となつて還流する。

第六章 資本の交換經濟的職分

然るに茲に問題がある。それは資本の機能に關する問題である。右に消費者の所得が享樂財の價格を支拂ひ、斯くて其企業家の生産出費を支辨すると書いた。成程結局に於ては左様である。併し企業家が生産をなしつゝある時には其生産物の價格はまだ受取つてゐない。而かも生産に要する労働の賃銀、原料代金、或は消耗労働用具の價格の如きは之に先だつて支拂はなければならぬ。半製品の生産に於ても原料の生産に於ても同様である、半製品生産業の企業家が原料を購入する其時に於ては、無論その原料に加工して始めて造らるゝ半製品の代金といふものは受取つてはゐない。否な半製品も未だ生産されてゐないかも知れぬ。原料に就いて言へることは労働給付に就いてもいへる。労働者の賃銀は生産物が賣却せられ、その代金が收得せられて始めて其中から支拂はれるものでない。其以前に支拂はれなければならぬのである。労働用具の購入も無論同様である。生産は労働用具を購入して然る後それを以て行ふのであるから、用具購入の其時に於ては無論生産物は賣却は疎か、まだ生産もされて

ゐない。従つて労働用具の價格は生産物代金の收受に先だつて支拂はれなければならぬ（支拂はれぬとすれば、労働用具の生産者が其受取を待たねばならぬ）。原料の生産には、更に又其の原料を購入するといふ問題はないが、賃銀の支拂、労働用具の購入に就いては同じ事が言はれる。

さうすると各段階の生産者は最終段階にある者（享樂財生産者）を除くの外、何れも皆な次の段階の生産者（企業家）に依て其生産物を買取られる。労働用具の生産者も其生産物を各段階の生産者に依て買取られる。労働者も、その直接に消費者に用務を提供する者にあらざる限り、生産企業者に依て其労働給付を購はれる。而して其の夫々の代金の支拂はれる時には、其を以て造られた生産物はまだ賣却されてゐないのであるから、企業家は生産物の價格收得以前に上記の支拂をなすべき購買力を持つてゐなければならぬ。それが即ち資本である。されば此部分の資本の用は生産物を賣却して其代金を受取るに先だつて原料の代金、労働の賃銀、又労働用具の價格を支拂ふことにある。若しも資本といふものがなければ、企業家は生産物賣却に先だつて労働用具を備付け、原料を仕入れ、又労働者を雇傭することが出来ないのである。さて製造業者は原料を仕入れ、労働用具を購入し、労働者を雇傭してから生産物を賣却する迄其資本を「寝か」さなければならぬ。半製品生産者は其生産物を製造業者に賣

却する迄、又原生産者は其生産を半製品生産者に賣却する迄、何れも資本を「寝かさなければならぬ。これは享樂財部門に就いて言つたのであるが、勞働用具部門に就いても同様である。資本を「寝かす」とは差し當り貨幣の形に於ける抽象的な購買力を特定の用途に拘束せらるゝ具體財に變形せしむることである。併し乍ら貨幣を以て特定財を買ふことを直ちに資本を「寝かす」とは言はぬ。例へば吾々が食物を買つて食ひ、衣服を買つて着用し、或は書籍を買つて讀むことを資本を寝かしたとは言はぬ。然るに貨幣を以て葡萄酒を購入し、之を味良くして賣る爲めに幾年か窖中に保藏する場合には當然資本が寝かされたといふ。又機械や原料を購入して其生産物が賣れぬと、その賣れる迄は資本が寝かされたといふ。さうすると資本が寝るといふのは、貨幣が特定財に變形する場合にいふ事であるが、併し其の特定財が直ちに欲望充足に供せらるゝ時にはさう言はぬことは、前記の食物其他を買ふ場合の例に徴して明である。之れが同じ食物の葡萄酒を買つても、之を高價にして賣る爲めに保藏すると資本が寝かされたといふ。彼れと此れとの違ひは畢竟欲望充足の用に充てるか否かといふ點に存する。一定額の貨幣を以て享樂財を買へば、以て欲望を充足することが出来る。然るに例へばこれで原料を買ふとか機械を買ふとかすれば、その生産物の代金で所望の物を購入する其時迄は、これ等のものに

投せられた購買力は欲望を満たすことを得ぬ状態に東縛せられなければならぬ。生産物が賣却せられて特定物に東縛せられた資本は始めて其東縛から釋放される。故に資本を「寝かす」ことの本質は欲望充足を待つことにある。

此意味に於て資本は、原生産が開始されてから、其所産が半製品完成品となつて消費者の手に入るまでの間寝なければならぬ。換言すれば原料が最初購入せられてからは、最後に完成品が消費者の手に渡る迄、資本に依て持たれなければならぬ。若しも其資本がなければ、其迄持たれずに消費に充用されなければならぬ。例へば前述の例で、若し葡萄酒を五年なら五年保藏する丈の資本がなければ、醸造して直ぐ賣るか飲用するかしなければならぬのである。尤も原生産が開始されてから最終生産物が消費者に購入される迄資本がたゞ一人の企業家の手で寝かされる必要はない。原料が半製品生産者に賣却されれば半製品生産者の資本は釋放され、半製品が製造業家の手に買取られれば、半製品生産者の資本は釋放される。併し乍ら其代りに原料を仕入れた瞬間から半製品生産者の資本は寝かされ、又半製品を購入した瞬間から製造業者の資本は寝かされる。即ち原料が獲得せられてから最後に消費者の手に歸する迄、兎に角資本は何處かで、誰れかに依て固定されなければならぬ。たゞ資本東縛の負擔

は必しも前後始終たゞ一人が之に當る必要はない。上記の場合には一享樂財が完成する迄の資本固定の負擔が原生産業者、半製品生産者、製造業者に依て分擔される。例へば製鐵業者が自ら鑛山を經營する場合の如く、生産諸段階が一企業に兼ねらるゝ場合には一人がその全部か大部分に當る。併し何れの場合にも束縛せらるゝ資本の量(資本金額と固定時間との積)に變りはない。

英語佛蘭西語では屢々資本の advance 又は avance といふ。アドワンスは前拂ひの義である。生産の爲め原料を購入する企業家は皆なアドワンスをする。原料半製品の如き、未だ直接欲望充足の用に供すべからざるものは之を消費せんが爲めに買ふ者はない。之を買ふ者は何れも皆な加工して賣らんが爲めにする。而かも賣つて代金を受取るに先立つて其代金を支拂ふのであるから、前拂ひといふ言葉は資本の用を説いて其要を得たものである。そこで一生産物が自然から採取せられて消費者に到達する迄の時間が長ければ長い程アドワンスの行はれること、即ち資本の要せらるゝことも多い。例へば一製造業者に於て價格一萬磅の原料が購入せられ、加工せらるゝこと一年にして始めて完成品として消費者に賣却されるとすれば、原料丈に就いて言ふ限り、一萬磅が一年寝かされたことになる。即ち此場合には原料に一萬磅を要する。然るに別に同じく一萬磅の原料を要するけれども其完成賣却は

僅に四個月を要するに過ぎぬ製造業あるものと假定せよ。彼れは四個月にして生産物の代金を取得し、其を以て更に原料を購入し、年内に更に今一度同じ事を繰り返すことが出来る。すると彼れは一年に同じ一萬磅を投ずることに依て前の場合に比して三倍の原料に加工し得る譯である。換言すれば、一年間に總額一萬磅の原料に加工する丈けならば彼れは僅に三分の一萬磅を要するに過ぎないのである。

享樂財の原料に就いて言つた事は勞働用具の原料に就いても言へる。原料は誰れが買ふか。次の段階の生産者が買ふ。勞働用具の半製品は何うなるか。それも同じく次の段階の生産者、即ち勞働用具製造者が買ふ。斯くして勞働用具は勞働用具として完成する。併し勞働用具の場合には、完成財を買ふのは直接消費者の所得ではない。茲に完成享樂財の場合と違ふ所がある。完成勞働用具は各部門各段階の生産者(企業家)に依て購入される。無論其價格は彼等の資本を以て支拂はれるのである。勞働用具も亦た無論消耗する。そこで享樂財の年々の生産現狀を維持する爲め、延いて勞働用具の現狀を維持する爲めには年々消耗する丈けの勞働用具を補充して行かなければならぬ。即ち各生産部門の各生産段階に居る企業家は、勞働用具生産部門の最終段階から年々消耗する丈けの用具を購入しなければ

ばならぬ。さて之を購買する貨幣或は貨幣に現れた購買力は何處から來るものであるか。それは結局は勞働用具を用ゐて生産した生産物の價格から償はねばならぬ。それが享樂財の生産に用ゐられた場合には消費者の所得から支拂はれた完成享樂財の價格が、原料と共に消耗した勞働用具の價格を償はねばならぬ。それが原料や半製品の生産であつた場合には、各々生産物の價格が消耗勞働用具の價格を償はなければならぬ。ところで直接是等の價格を支拂ふものは何れも次の段の生産者(即ち半製品の場合には製造業者、原料の場合には半製品生産者)であるが、此等の生産者は其生産物を又夫々消費者か或は更に次の段の生産者に賣つて、結局其價格を以て出費を支辨する。けれども完成せる勞働用具を購入する企業家は其購入の時に於ては無論其を用ゐて生産した生産物の價格は收得してゐない。そこで其價格をadvanceしなければならぬ。茲に資本が必要となるのである。然るに結局生産物の價格から償はれるものは無論原料及び消耗勞働用具の價格のみではない。無論これに投せられた勞働の賃銀が償はねばならぬ。然るに賃銀は原料、勞働用具の購入を同じく、原則としては生産物價格の收得せらるゝ以前に支拂はねばならぬ。茲でも此の前拂に充つべき資本が必要である。其資本は企業家自身のものであつても、或は他から借入れたものであつても好いが、兎に角それがなければ、

生産を営むことが出來ないのである。そこで其の必要の資本を借入れるとすれば、資本は無際限に存するものでなくて、不足せるものであるから、其價格として利息を支拂はねばならぬ。借入れないで自分の資本を利用するとしても同じく其利息は出費として計算しなければならぬ。

前にも言ふ通り生産に資本を要するといふことは畢竟待忍を要するといふことである。右に資本の用はアドワンスをするにあると謂つた。アドワンスとは前拂ひであるが、前拂ひとは畢竟與へたる給付に對する反對給付の受取りを待つといふに外ならぬ。先づ原料の價格を支拂ひ、勞働用具の價格を支拂ひ、賃銀を支拂ひ、然る後幾許かの期間を経て生産物代金を收受するといふことは、即ち一の支拂といふ給付に對して代金收受といふ反對給付を待つことになる。此の「待つ」ことは生産に時間を要するといふことが之を必要ならしめる。必しも資本家の資本による必要はないが、誰れか此「待忍」を引受けなければ、時を要する生産は營むことが出來ないのである。若し例へば勞働者が勞働する。然し必しも直ちに賃銀の支拂を求めず、生産物賣却の曉に至つて之を受取ることに満足するとすれば、少くも賃銀に關する限り企業家は自ら資本を有するの要なく、又之を資本家に借ることも必要でない。併し其代り勞働者自身が企業家資本家に代つて待たなければならぬ。即ち彼れは勞働を給

付しながら反對給付たる賃銀の支拂を生産物完成の時迄待たなければならぬ。若し企業家も資本家も労働者も誰れも待つことを承知せぬとすれば、途に落ちたるを拾ふといふ程度のもは兎に角、其以上時間を要する生産は全く營まれない筈である。

斯く資本使用の價格たる利息といふものは畢竟待つことに對して支拂はるゝものであるから、それが通例一年といふ如き一定の時間に對して計算されることは當然である。併し或る一の財を生産するに抑も何程の「待忍」を要するかは、もう少し綿密に考へて見なければならぬ。

今迄のところでは、原料の價格労働の賃銀が生産物の價格に依て償はれ、又消耗労働用具が同じく生産物の價格に依て償はれることを説いた。而して此等の物の支拂ひに寝かされた資本は、生産物の賣却に依て再び釋放されるものとして説いた。賃銀や原料價格に就いては其丈けで好い。併し労働用具に就いては此程簡單ではない。労働用具は原料の如く一回の使用に依て原形を留めなくなるものではない。原料は生産物が出来ればそれで原料としては消滅して仕舞ふ。然るに労働用具は、成程結局は消耗するとしても、其迄に幾度かの使用に堪へる。それ故原料の價格は其全部が生産物の價格から償はれなければ、生産を反覆して續行することが不可能であるが、労働用具の場合にはたとゝ其の消耗部

分丈けが補充さへれば好いのである。然るに労働用具の消耗部分は當然其價格の一部分に過ぎぬ。殊に耐久的なる機械建物等にあつては其は極めて小なる一部分に過ぎぬであらう。さうすると労働用具購入に投せられた資本で、毎期の生産物賣却によつて再び釋放せらるゝものは其一部分（或は一小部分）に過ぎずして爾餘の部分は寝かされた儘でなければならぬ。其に投せられた資本は、正常状態の下では、労働用具が盡く消耗し了つて始めて完全に釋放されるのである。即ち機械や建物を購入する爲めには、年々生産物價格から償はれるよりも大なる價格を支拂はねばならなかつたのである。労働用具の爲めにアドヴァンスされる資本は、労働用具年々の消耗價格でなくて、其より大なる——若し耐久的な労働用具ならば其より遙に大なる——價格である。今利息はアドヴァンスされた資本に對して支拂はれるのであるから、労働用具が耐久的なものであればある程、年々の生産出費中に於て利息の占める割合は大きくなる。例へば十萬圓の機械を備付け、其機械は十年の使用に耐へるものとすれば、生産を現状の儘で繼續せんが爲めには、年々の生産物價格は機械の補充に要する一萬圓と十萬圓に對する利息とを償ふに足る丈けなくてはならぬ。然るに一萬圓を原料の購入に投じ、而して原料は一年内に全部消耗して生産物に轉化したとすれば、生産物の價格は此の一萬圓と一萬圓に對する利息と丈け

償ふことを要する。假りに利率を五歩とすれば、一方は一萬五千圓、他方は一萬五百圓である。其年の内に消耗する生産財は均しく一萬圓である。たゞ一方に於ては寝かされた資本が十萬圓他方に於ては僅に一萬圓たるの差違があるのである。但し茲にいふ寝かされた資本は、上記の循環圖には現れない。彼の圖に示される所は、右の例に就いていへば、年々十萬圓の機械の十分一が消耗して其丈けが補充され、又一萬圓の原料が消費されて、更に其丈けの原料が補充されるといふ其部分のみである。抑も循環とは經濟單位間に於ける財の規則的反覆的移動の謂であるが、此移動は今日では皆な賣買の形態を以て行はれる。併し賣買は貨幣の授受であるから、賣買が行はれば、其限りに於て特定の具體財に束縛された資本は釋放される。故に資本の固定といふことは、此の賣買過程からの脱出と解しても差支ないのである。即ち上記の十萬圓の機械中年々生産物の價格として貨幣形態で歸來するものは僅に其十分の一のみで、爾餘の十分九は保持された儘で賣買行程に現はれぬ。而かも十萬圓の機械其者は價格を拂つて設付けたのであるから買はる。唯それに對應する丈けの賣がない。故に資本の固定とは一方に買があつて一定期間内に其に對應する丈けの賣がない場合に起ると言つて好い。たゞ此の買と賣との不一致が損失と異なる所は買と賣とが究局的に一致しない譯ではなく、たゞ買若しくは賣

の一部分即ち價格の取得が、後日に延期されるのである。

前に資本の要は待つことを可能ならしむるに在り、而して此の「待つ」ことは時間を要する生産を行ふには必ず誰かに依て負擔されなければならぬと謂つた。併し「待つ」ことは必しも生産参加者に依て行はれなければならぬとは限らない。消費者が消費者としての資格に於て之に當ることもある。例へば人が住宅を買ふ。其場合に支拂はれる家屋の價格は、常に目前の便益のみならず、其住宅の使用に耐へる全期間中に其家屋に依て提供せらるゝ一切の便益に對して今豫め支拂はれる。反之若し此人が家屋を賃借すれば、彼れは一ヶ月に收める居住の便益に對して一ヶ月の家賃を支拂ふ。即ち彼れは幾ど受けると同時に與へるのである。家屋を購入する場合には常に現在の便益のみならず、將來收めらるべき便益に對しても今其對價を支拂ふ。即ち彼れは自ら「待忍」を擔當するのである。否な常に家屋のみではない。耐久的の經濟財を購入する場合には購入者は常に待忍に當る。例へば裁縫用のミシンを賃借せずに購入する場合も左様である。葡萄酒を購入して自ら幾年か地下室に貯藏して然る後に飲用するといふ如き場合も左様である。それは企業家が耐久的な機械や道具を設付け、或は農業家が土地改良に資金を投ずると其理法に於ては變らない。即ち將來の収益を豫期して機械を購入し其代

金を支拂ふ者がなければ機械の生産が行はれぬと同じ様に、其からの一切の便益を收めるに先だつて豫め家屋の價格を支拂ひ、ミシンの代金を支拂ふ者がなければ是等のものは生産されぬ。又葡萄酒を醸造或は購入しても直ちに飲用には供することなく、敢て其享受を延期する者がなければ、芳醇なる古銘酒を得る譯には行かぬのである。たゞ上述の如き場合、消費者が自ら耐久財の價格として支拂ふものを彼れの資本と稱し得べきや否や。是は便宜に従つて決して差支ないが、予は待忍が營利の爲め、貨幣獲得の爲めに行はれる場合にのみ資本ありとの見解を取る。故に家屋を購入して住居に宛てるといふことは待忍を要する行爲であつて、若しも人が其所得の全部を直接目前の享樂の爲めに支出しなければ承知せぬとすれば、家屋は賃借はされるだらうが購入されることはない筈である。此點に於て此行爲は所得を貯蓄して其を何かの企業に放資する場合と同じ犠牲を拂ふものだといふことは認めるが、此犠牲に對する報償が直接便益として流入し、一旦貨幣の形態を取得することなき點に於て彼と是とを區別することが適當である。故に同じく家屋を購入するにしても之を賃貸して貨幣所得を收めることを目的とする場合には、家屋の價格として支出されたものは當然此人の資本である。若し又ミシンの賃貸業を營む爲めに之を購入する者があれば當然資本はミシンに放下されたと謂つて好い。愛酒家が葡萄酒

酒を買入れて之を保藏する場合、彼れは將來の利益を期待して現在の犠牲に甘んずるのではあるが、その彼れが將來に期待するものは、貨幣收入ではなくて良酒を味ふ快樂であるから、此場合彼れが資本を葡萄酒に固定したといふことは不穩當であらう。併し商人が高く賣る爲めに酒の蓄藏をすれば、資本の固定となること勿論である。

待忍の成果が貨幣形態に於て流入するか否かの點に境界線を求めた一の重なる理由は、然かせぬと其類に堪へぬ程資本放下の範圍が擴大せられ、勤勞の給付及び純然たる消費物を買ふ場合の外、一切の購買は皆な放資だといふ事にしなければならぬからである。若し自己の住宅を買ふことを放資なりとし、住宅の價格として支拂はれたものを資本に數へるならば、消費者自ら衣服を買ふことも、食器を買ふことも、机や書籍を買ふことも皆な放資に數へなければなるまい。何となれば、衣服、食器、机、書籍の如きも皆な耐久財で、賃貸借し得るものだからである。衣服や書籍を賃借(衣裳屋や貸本屋から)せず之を買ふといふことは、嚴格にいへば唯現在の享樂のみならず、衣裳や書籍から將來得らるべき便益の價格を豫め現在一括して支拂ふといふに外ならず、其點に於て家屋を買ふのと理論上は異なる所がない。而かも消費者自ら是等のものを購入することを放資と解し、其が爲めに支出せられた金

額を資本と見ることは殆ど何人も躊躇なきを得ぬ所であらう。

第七章 交換經濟的發展

以上予は年々反覆して同一規模の生産が行はれ、年々等しき所得の支出に依て同一程度の消費が反覆せらるゝ状態を假想して經濟的循環を説明した。これが所謂靜止狀態である。然るに斯く靜止狀態を維持するといふことは、既に或待忍を必要とする。何となれば、前章の終りにも述べたやうに、靜止狀態を維持する爲めには、經濟期毎に前期と同じ生産財の準備を以て出發しなければならぬ。然るに生産財は遅かれ早かれ消耗する。そこで一經濟期内に消耗した生産財は凡て之を補充しなければならぬ。補充しなければ、次の期には前期よりも乏しい原料、乏しい勞働用具を以て生産を行はなければならぬ。其結果は當然所得及び消費の減少とならざるを得ぬ。然るに生産財の消耗を補充するといふことは、享樂財の生産に利用すれば爲し得る生産力をば努めて生産財の生産に充てることであつて、其限りに於て享樂財の生産を犠牲にするものである。若し一時的で好ければ享樂の生産を増すことが出来るけれども、斯る享樂の増加は僅に一時の事に止まつて、必然その將來に於ける減少を來たさね

ばならぬ。靜止狀態を維持するといふことは既に此意味に於て享樂の延期を行ふものである。

斯く一定の生産力を、生産の現状を維持し得るやうに生産財の生産と享樂財の生産とに配當するこ
とは、統制經濟に於ては無論中央機關に依て行はれるのであるが、交換經濟に於ては、各經濟單位の所
得の使ひ様に依て行はれる。即ち各人が過不及なく其所得の全額を以て享樂財を購入する場合には、
靜止狀態が維持せられ、享樂財の購入を所得の限度以内に止める時は、後述の如く經濟的發展が起
る。反之所得以上の消費を行へば茲に經濟的退歩が起る。所得以上の享樂的消費を行ふ方法は種々あ
る。個人の見地から見れば、借金は其普通の方法であるが、若しも借金が他人の所得の一部を借るの
であつたならば、其丈け他人の享樂的消費を削減することになるから、國民經濟全體の上から見れば
此場合には享樂の所得超過にはならぬ。然るに若し彼れが企業家で、その從來原料の購入、労働の雇
傭或は機械の補充購入に充てた資本を享樂財購入に充てたならば、茲に當然需要の方向轉換、従つて
生産の方向轉換が起る。即ち享樂財に對する需要が増加するから、當然其價格が騰貴して企業家の利
潤は増加する。反對に機械、原料を生産する企業家の利潤は需要減退の爲め減少する。従つて享樂
財生産者は其生産を擴張せんとし、延いて享樂財製造業に於ける労働其他の生産要素に對する需要

が増進し、反對に原料や労働用具の生産は縮小されんとして、労働其他に對する需要は其處で減退す
る。其處で労働は原料や機械の生産から享樂財其者の製造に吸引せられ、既成の原料や労働用具で轉
用の容されるものも亦た同様にするであらう。斯くして享樂財の生産は一時増加するけれども、併し
同時に労働用具や原料は缺乏するから、享樂財の生産増加は一時の事で之を持続することが出来ぬ。速
に生産の減少、所得の減少が来るであらう。勿論偶々一人や二人の企業家が其資本を享樂用に消費し
たからとて、直ちに此結果は現れないが、併し其の生む所の傾向は則ち此の如きものである。人が預
金を引出して消費したり、或は田畑又は工場敷地として利用し若しくは利用せしめつゝあつた土地を
庭園に改造する等の行爲も亦た同様の結果を齎す筈である。

所得以上の享樂的消費を行ふことに依て經濟的退歩が起ると反對に享樂的消費を所得の限度以内に
止めて其處に餘裕を剩すことは經濟的發展を來たさしむる所以、即ち益々より大なる規模に於て生産
を反覆することを可能ならしむる所以である。

靜止狀態に於ては原料と半製品、半製品と完成品、及び労働用具の生産と享樂財の生産とは常に一
定の關係に保たれる。即ち原料は一定時間の後に半製品に進み、半製品は更に一定時間の後に完成

品となるのであるが、同一規模の生産の反覆さるゝ處に於ては、完成の各段階上に在る此等の財の價格は常に正しく次の段階の生産をば増減なく維持するに足る丈けのものである。即ち一定の期間を取つて見れば、其時期に於て生産せらるゝ原料は、正しく同じ期間に生産されつゝある半製品の生産に必要な丈けのものであり、又此の半製品は宛も同時に生産せられつゝある完成品の生産に必要な丈けのものである。而して斯くて生産せられた完成享樂財が宛も生産各段階に於て生産手段の價格として收得せられた所得と交換されるのである。(二〇六頁の圖參照) 其は宛も貯水池から流出する水流に比すべきものである。斷えず唧筒を以て同一量の水を貯水池に注げば斷えず同一量の水が流出する。而して全く支流がないものとするれば、水道の一端を流過する水量は其他端を流過する水量に等しい。故に個々の水滴に就いていへば唧筒に依て注入せられた水は一定時間の後に始めて水道の他端に到達する譯であるが、水流其者は常に其處にあつて、一方で一定の水量が注がれると同時に必ず同一量の水が水道の他端から流出し、又水道の途中の各地點に於ける水深は常に同一の深さを保つのである。

然るに生産が益々より大なる規模に於て反覆せらるゝ場合は趣を異にする。再び水流の譬へを引けば、それは唧筒を以て注入される水量が益々増加する場合に比すべきものである。注入せらるゝ水量が増加すれば、溢流する水も増加する、次いでそれが水道の他端に流到する。併し溢流する水量が増加してそれが水道の他端に到達する迄には時を要する。即ち上流が先づ水高を増し、中流に到り次いで下流に及ぶといふ譯であるから、唧筒を以て注がれる水量が益々増加して行く場合には、引き続き同一量の水流ある場合に比して流水面の傾斜は急勾配にならなければならぬ。其と同様に生産物も先づ原料、次いで半製品、更に其次に完成財の順序を取つて享樂に適した状態に到達するものであるから、生産物の増加は先づ原料の増加、次いで、半製品、更に其次いで完成財の増加となるべきものであり、従つて生産が絶えず益々大なる規模に於て反覆せらるゝ場合には宛も水面が急勾配となる如く、一定期間内に生産せらるゝ原料は常に半製品よりも、又半製品は完成品よりも比較的多量に上らなければならぬ。

然るに斯の如き生産の不斷の増加が單に總額の増加のみならず、又一人當りの増加となる爲めには労働用具(重に機械)の増加がなければならぬ。然るに労働用具の増加といふことは、年々完成する労働用具が、生産の諸部門諸段階に於ける労働用具の消耗以上に上ることを意味する。即ち二〇六頁

の圖に就いて云へば、年々生産せらるる f は、其年に R 、 H 、 F 及び r 、 h 、 f の諸段階に於て消耗せらるる勞働用具を超過することを意味するのである。然るに勞働用具も亦た原料半製品の段階を経て勞働用具として完成するものであるから、勞働用具生産額の絶えず増進しつゝあるところでは、用具の原料はその半製品よりも、半製品はまた完成品よりも常に比較的少量に生産されなくてはならぬ。

然るに勞働用具の生産額を増すといふことは、現存の生産要素を其方に振り向けることに依て行はれるのであるが、一定の時に於ける生産要素には限りあるものとするれば、之をより多く勞働用具の生産に振り向けるといふことは、畢竟其丈け之を享樂財生産部門から割くといふことになる。具體的にいへば、享樂財の生産に従事せる企業家勞働者を勞働用具の生産に移し、享樂財の半製品(H)又は原料(R)にして勞働用具の生産に轉用し得べきものを轉用し、同じく勞働用具にして轉用し得べきものを轉用し、更に勞働用具の生産(f)に於て、享樂財生産の代りに勞働用具の生産に用ゐらるべき勞働用具の生産を多くすることは是れである。併し乍ら斯の如き生産要素の轉向は何人が發意し、何人が指揮して之を行ふのであるか。固より交換經濟には之を統制して生産要素の配布を定める單一の責任者はない。各生産要素の所有者は各々自己の判斷に従つて比較的不利なる方面から比較的有利と

認める方面へそれを投入する丈けの事である。さうすると生産要素が享樂財部門から勞働用具部門へ轉向するといふことは、享樂財(及び其半製品並に原料)の生産が比較的不利となり、勞働用具(及び其半製品並に原料)の生産が比較的有利となることに依てのみ行はれる。然るに或生産が有利となり不利となるといふことは、交換經濟の下では生産物に對する需要が増すか減するかに依て定まる。今享樂財は所得に依て購買される。そこで特定の享樂財例へば A に對する需要が減少して B に對する夫が増加したといふのでなく、享樂財全體に對する需要が減少するといふことは、即ち所得の一部が享樂財の購入から其以外の用途に向けられることを意味する。斯くして享樂財に對する需要が減退すれば、當然享樂財の價格が下落する。延いて利潤が減少する。次いで從業勞働者の賃銀が下落し、資本金子の支拂も困難になるであらう。そこで若し他により高き利潤を齎す見込みの生産業があれば、企業家は當然其方面へ吸引されるであらう。勞働者も資本家も之に次いで其方面に誘引される。然らば享樂財に投せられない所得は如何に使用せらるるか。所得總體に就いていへば、其用途は二つしかない。之を庫中に藏して其儘死藏するか、或は享樂財以外のもの、購買に充てるか何れかである。所得の一部を通貨の形で死藏すれば其丈け通貨の縮小となる。併し今日に於ては死藏は所得の極めて小な

る一部分に就いて例外的に行はれるに過ぎぬ。既に所得にして享樂財に費されず、又死藏もされぬとすれば、それは直接間接に生産財の購入に充てらるゝより外に用途はない。それは必しも所得取得者自身が生産財を購入するとは限らない。享樂用に充當せぬ所得の部分を銀行に預入れ、銀行が其を企業家に貸付け、企業家が其を以て必要の生産財を買ふのであつても同じである。普通に享樂財又は直接享樂に充つべき勤勞の購買に支出せられた場合に所得は「消費」せられたといひ、「消費」されない部分は節約又は貯蓄せられたといふが、所謂節約せられた場合とても矢張り、結局購買の爲めに支出される。たゞ違ふところは購買の對象が享樂財でなくて生産財であるといふことである。

益々擴大する規模に於て生産を反覆するには労働用具の増加がなくてはならぬが、併し労働用具も商品であるから、之を需要するものがなければ生産はされぬ。然らば其を誰が需要するか。無論労働用具の使用者たる企業家（享樂財、労働用具兩生産部門の）である。企業家が労働用具を購入するのは、無論生産物に對する需要を豫期しての事である。併し乍ら生産物に對する需要が豫期せられても差當り購買力を持たなければ労働用具を設備する譯には行かぬ。労働用具を購入する其の時には、生産物の價格は未だ受け取れないからである。併し乍ら生産物の賣却に先だつて購入の代金を支拂はな

ればならぬといふ點に於ては、労働用具の購入も、原料の購入も労働者の雇入れも擇ぶ所はない、原料を購入する時、労働者を雇入れる時、その原料にその労働が加工して造つた生産物は未だ賣却せられてゐないのである。たゞ労働用具の購入は原料や労働給付の購入と一の點に於て相違する。それは労働用具は一回の使用に依て消耗し盡されず、従つて原料や労働給付にあつては、生産販賣が普通に進行すれば、其價格は全部生産物の價格に依て償はれるけれども、労働用具にあつては僅に其價格の一部分のみが償はれ、爾餘の部分は「寝かされ」た儘でゐなければならぬことである。されば原料や労働給付を購入して然る後其生産物の代金を受取り、労働用具を備へ付けて然る後生産せられた物の價格を受取る、その何れの場合に於ても一方の支拂から他方の受取り迄を待たなければならぬことに變りはないが、労働用具の場合には殊に待つことが重要な意味を有する。而して労働用具が耐久のものであればある程愈々久しく待たなければならぬ。而かも此の「待つ」といふ犠牲があるに拘らず、猶且つ生産に労働用具が使用せられ、否な經濟生活の發展と共に愈々耐久的なる労働用具の使用せらるゝのは何故かといへば、言ふ迄もなく耐久的なる労働用具の使用がより多くの或はより良き生産物を賣すからである。採用せらるべき生産方法に效果の大小があれば、何人もより有效の方法を撰擇せん

とするは當然である。たゞより有效なる生産方法は、より久しく待つことを要する方法なるを常とする。其處で生産當事者は一方に於ては待つことの不利益、他方に於ては耐久的勞働用具を使用するの利益、此兩者を比較計量して勞働用具の使用を何の程度まで進め、何の程度に止めるべきかを決定しなければならぬ。抑も人間の勞働と勞働用具とは、一方に於ては相補ふと共に他方に於ては相互競争代用の關係に立つてゐる。即ち生産を營む爲めには勞働と共に勞働用具を必要とすること勿論であるが、併し企業家は機械を以て勞働に代らしめ、又勞働を以て機械に代らしめることが出来る。兩者何れを撰擇すべきかを考量する場合に、企業家が比較するのは、一方に於ては勞働雇傭の爲めに支拂ふ賃銀の高低、他方に於ては機械を使用することに伴ふ、収益を待たねばならぬ不利益である。企業家にして若し待つ能力が大ならば、彼れは愈々耐久的にして愈々有效なる機械を使用するであらう。反對に待つ能力に乏しければ、効果の小なることを顧みずして、勞働用具の購入に支拂はれた價格の速かに償はれる方法を擇ばなければならぬ。即ち消耗の速かな勞働用具を使用するか、或は勞働用具に代へるに人間の勞働を以てしなければならぬのである。然らば此の「待つ」能力の有無大小は何に由て定まるか。それは人が其所得を直接の享樂に充用せずして剩まし得る所の有無大小、即ち節約の有無大小に由て定

まる。生産者自身が節約すれば、此の剩まし得た購買力を以て勞働用具を購入して、時間是要するが併しより豊富なる収益の生ずるを待つことが出来るであらう。併し節約は必しも生産者自身が之に當らなければならぬとは限らない。他人の節約し得たものを借りても其結果は同じである。若し或人が節約し、節約し得たものを直接又は間接に企業家に融通し、而して後者が其を以て耐久的なる機械を購入して備付けたとすれば、此場合には節約者が生産者其人に代つて待つのである。併し若し何處にも待つことを肯んずる者がなければ、耐久的な勞働用具は需要されない譯である。

これを今少し具體的にいへば、耐久的なる機械に對する需要は資本利率に由て左右せられ、資本利率は姑らく資本の用途に變化なきものとすれば、資本の供給に由て左右せられ、資本の供給は節約の有無大小に由て左右されると謂つて好い。耐久的な勞働用具を備へ付けることの技術上の利益は何人にも明である。然るに勞働用具を使用すれば多額の資本を寝かさなければならぬ。此の寝かされた資本に對しては利子を支拂はねばならぬ。此利子支拂の顧慮が當事者を抑制して機械の使用を或程度に止めしめる。若しも利率が騰貴すれば機械の使用は一層抑止せられ、反對に利率が下落すれば、必ず機械使用の範圍は擴大せられ、又從來よりも耐久的なる機械の使用が行はれる。而して利率の高下は、

他の事情にして同一ならば節約の多少と反對に動くべき筈である。即ち茲に節約が耐久的勞働用具に對する需要を喚起する順序を見ることが出來やう。

上述の如き次第に由て節約は必ず享樂財に對する需要を低減せしめる一方に、一切産業に於ける勞働用具に對する需要を相對的に増大せしめる。従つて勞働用具生産業の利潤は増加し、比較的不利となつた享樂財生産部門から先づ企業家が、次いで勞働者資本家も勞働用具生産業へ吸引されるであらう。然るに勞働用具を生産するには先づ其半製品の増加がなくてはならぬ。半製品の生産を増加せしむる爲めには先づ原料の増加がなくてはならぬ。而して節約は獨り享樂財の生産に機械應用の程度を進めしむるのみならず、勞働用具其者の生産に於ける機械の使用をも盛んならしめる。即ち既掲第二〇六頁の圖に就いて云へば、所得(E)の全部を享樂財(F)の購入に支出せず、其一部を節約することによつて、企業家勞働者資本家は、享樂財生産部門たるF、H、Rから勞働用具部門たるf、h、rに移動し、一定期間に於ける勞働用具製造業たるfの生産額は増大して、同期間内に於ける勞働用具消費額以上に上る。斯くして勞働用具の生産が増加し、而して生産せられた勞働用具の一部分は勞働用具又は其原料、半製品の生産其者に用ゐられ、他の部分は享樂財又は其原料半製品生産に投せられる。能

く此等の勞働用具が購入せられ、且つ比較的長時間に亘つて保持せられるのは、何人かに依て節約が行はれることに因るのである。

所得の消費又は節約の意味は前に説明した。節約とは享樂財を購買せぬことであるから、往々節約は需要の縮小を來たすものと速断されてゐるが、その然らざることは是れも上述する所に由て明かであらう。所謂「節約」せられた所得は、決して購買力として市場に出現、作用しないのではない。唯々享樂財の購買に用ゐられないといふだけで、矢張り同じく購買の爲めに用ゐられる。たゞ其の購買の對象が享樂財又は直接享樂に用ゐらるゝ勤勞でなくて生産財及び生産に従事する勞働であるといふだけの相違があるのである。即ち「節約」は需要を減縮するものではない。たゞ其方向を轉せしむるに過ぎぬ。而して今日の交換經濟に於ては、直接の必要なものは生産されぬ。生産財本來の任務は洵に享樂財の生産に用ゐらるゝことにありと謂へるかも知れぬ。併し乍ら所得を支出して享樂財を買ふ者はたゞ享樂財の需要者であつて、直ちに以て其の享樂財を生産すべき生産財の需要者ではない。生産財の需要者は企業家である。無論企業家は享樂財に對する需要を豫想して之を生産すべき生産財を購入するのであるから、或享樂財に對して需要のないことが明であれば、其の享樂財を造るべき生産財

を購入せぬことも當然であるが、併し乍らよし假りに享樂財に對する需要があつても、其は直ちに生産財に對する需要にはならぬ。それが生産財に對する有効需要となる爲めには享樂財の生産に當る者が必要なる生産財を購入するだけの購買力を持たなくてはならぬ。享樂財購買者が其爲めに支出した所得は、其生産者が生産財購入の爲めに先づ支出した其出費を償ふであらう。併し乍ら償ふのは後日の事——耐久的勞働用具の場合には遙に後日の事——であつて、生産財購入の其時には別に其爲め即時に對價を求めない購買力を持つてゐなければ、生産財其者は賣れず、又従つて生産せられない。此の生産財の生産を可能ならしめる需要力、又は購買力は所詮「節約」せられた所得部分に仰がなければならぬ。所謂「消費」せられた所得が食物や衣服や娛樂物其他を買ふと同様に、「節約」せられた所得は、工場や機械や船舶や鐵道や原料の購入に用ゐられる。節約者自身は直接に是等のものを買はぬかも知れぬ。併し間接に迂廻して結局此用途に供せられる（或個人が節約したものを直接又は間接に他人が借りて之を享樂的消費に充當する場合には、結局全體に於ては節約は行はれてないのである）。或は貯蓄を銀行に預金し、銀行が或企業にそれを融通するかも知れぬ。或は保險會社を通じて其が行はれるかも知れぬ。又或は株式會社の株式募集、又は社債募集に應募するといふ方法で其が行はれるか

も知れぬ。何れにしても究局の結果は同一である。

之を要するに所得の全額が享樂財購入に支出せられ、又其代り所得全額に限つて享樂財の購入に充用せられて其以上に及ばぬところでは、生産は年々同一の規模に於て反覆される。然るに所得の一部分が節約されると茲に需要の方向轉換即ち生産財に對する需要の増加が起る。そこでより多くの企業家と勞働者が勞働用具の生産に吸引せられ、より多くの勞働用具が勞働用具の生産に充用される。即ち交換經濟全體の生産力が先づ享樂財の生産から勞働用具の生産に割かれ、而して其に由て究局に於て享樂財の生産が豊富となる。即ち交換經濟全體として迂廻的進路を進み、先づ享樂財の生産から離れることに依て結局に於て享樂財生産を増加せしむる結果を齎らすのである。而かも此結果は必しも各經濟單位の意圖に存せず、各人はたゞ自己の利害の見地から、或は將來必要となるべき失費に備へる爲め、或は將來の生活状態をより良くする爲め、又或は利殖の目的を以て、享樂的消費を差し控へて其所得の一部を剰ますのである。此「節約」が生産力配置の上に如何なる變化を齎すであらうかは唯々經濟學者のみが理解してゐる。節約を行ふ其當人はたゞ己が利害の見地から、近接の享樂の代りに比較的遠き將來の利益の爲めに其所得を支出し、而して此所得を斯く支出することが生産力をば享

樂財の生産から勞働用具の生産に移すといふ結果を齎すのである。斯くて生産力配布の移動の結果、勞働用具の生産に参加して所得を得るものが増加して、直接享樂財の生産に依て所得を收めるものは減少する。而かも直接享樂財の生産に従事するもの、相對的に減少するに拘らず、勞働用具の増加の爲めに結局享樂財の生産は豊富を加へるから、生産參加者の所得を以て購買さるべき實質的所得は増加する。そこで若しも所得贏得者が其貨幣所得の全部を擧げて之を享樂財の購入に充用するならば、茲に再び前よりも一段高い水準に於て靜止經濟が營まれる。又若しも然らずして所得贏得者が其所得の全部を消費せず、引續き其一部を節約して行けば、茲に不斷の發展が起り、生産は斷へず益々擴大する規模に於て反覆されるであらう。

第三篇 價值及び價格

第一章 價值論上に於ける効用說と費用說

——殊に勞働價值說批判——

第一節 序 說

既述の如く、交換經濟組織の下に於ては、各人はその自ら必要とするもの、生産に努力せず、却て他人の欲望するものを生産し提供し、是に對して他人が提供する所のものを取得することに依て自己の欲望を充足する。従つて此經濟組織の下に於ては、各人の提供する生産物若しくは勤務、即ち各人の提供する廣義の經濟財が、同じく他人の提供する經濟財と幾許の割合を以て交換されるか、交換當事者にとつても經濟組織其者にとつても、俱に最も重要な問題である。

併し前にも述べたやうに、持續的常則的に交換が行はれることは、何等かの貨幣なくしては想像す

ることが出来ぬ。従つて、或經濟財と他の經濟財とが一定の割合に於て交換されるといふことは、畢竟或經濟財が其時の市場に於て、一定額の貨幣に對して賣買せられ、更に其額の貨幣は別の經濟財の一定量を買ふといふことを意味するものに外ならぬ。然るに或經濟財が其に對して賣買せらるゝ貨幣額を稱して其財の價格といふ。従つて例へば二十エルレの亞麻布は上衣一着とも交換せられ、茶十封度とも、珈琲四十封度とも、小麥一クオタアとも鐵半噸とも、其他A財のx量ともB財のy量等々とも交換される云々といふのは、此等の諸物夫々の數量は皆な其價格を同じくすると謂ふに外ならぬのである。そこで一經濟財は何故に或る他の經濟財と一定の割合で交換されるかといふ問題は、一經濟財は何故に一定の價格を以て賣買されるかといふ問題と同じである。

近時一部の學者の間に唱へらるゝ價值論無用説にはまた傾聽すべきものがあり、又價值論に比して價格論の漸く重要視せらるゝことは近年の傾向であると言ふ學者がある。併し今此問題を姑らく措いて從來多數學者の所見に従へば、價值理論の本務は、上記の如き價格現象に根本的の説明を與へることに在る。其價值といふものが果して何であるかの説は固より多岐に互るけれども、少くも一時的變動的の狀況を度外すれば、經濟財に價格があるのは價值がある爲めであり、價值大なるものは價格が

高く、價值少なきものは價格が低いとすることに異論がない。故に或條件の下で一物の價值大なるに拘らず其價格廉なり、といふことは言ひ得ても、價值大なるが故に價格廉なり、若しくは反對に價值小なるが故に價格不廉なりといふことは意味を成さぬ言葉であつた。又實際、十八世紀以前の經濟文書に於ては、價值 (value 又は worth) と價格 (price) とは屢々隨意に併用混用せられたやうに見えることは例へば「一物の價值を正しく評價せんとするものは、其數量を、其販路に對する比例に於て考察しなければならぬ。蓋し價格を左右するものは此事のみであるから」とか、「一物の價值若しくは價格 (value or price) は單にその或る他の物に對する關係的のものに過ぎぬから云々」等の言 (何れも John Locke) に徴しても窺ふことが出来る。兎に角從來多數學者の價值論と價格論とを見ることは概ね斯の如きものであつた。

從來多數學者の價值を解することは上述の如くであるが、現今少くも我邦に於て最も人の興味を惹きつゝあるものは勞働價值説、而かもカアル・マルクスに依て唱へられた勞働價值説である。マルクスの價值説が喧しく論議されるのは、著者の見る所では、一には其の學問上の眞價の爲めであるが、又一には政治上の必要、即ちプロレタリア運動に對する其宣傳上の價值に由るものである。今其宣傳上

の價值は無論問題でない。茲にはたゞ其の學問上の眞價のみを論ずる。上記の價格現象をば、勞働價值説は果して統一的に首尾一貫して説明し得るや否や。これを嚴密に吟味し、又旁ら交換現象の説明は當さに如何なる途を取つて進むべきものかを言ふことが本編の任務である。

マルクスの勞働價值説とは抑も何を教へるものであるかといへば、それは結局諸商品相互間の交換比例はたゞ勞働費用、即ち諸商品の生産に要せらるゝ勞働に依てのみ決定されるといふに歸着する。而して此點に就いてのマルクスの主張は、或場合には簡單に、或場合には稍々複雑に説かれてゐる。簡單に説かれてゐる部分に就いて見れば、彼れの説は、相交換される商品は互に其價值を等しうしなければならぬ、而して此價值なるものは獨り勞働に依てのみ形成されるといふに歸着する。稍々複雑に言ひ現された場合に於ては、彼れは相交換せらるゝ商品間に必しも等しき勞働量の含まれて居らぬこと、即ち相交換せらるゝものが必しも其價值を等しくするとは限らぬことを認めてゐる。たゞ相交換せらるゝ(規則正しく交換せらるゝ)商品は必ず其生産價格を等しうする。生産價格は生産出費と放下資本に對する平均又は普通利潤との和を以て成るものであるが、其の平均利潤といふものは、社會

全體の勞働に依て造り出された價值總額から、賃銀として勞働者に支拂はれた價值總額を控除した殘額を各企業の資本に對して按分したものに外ならぬから、商品の交換比率を決定するものは依然として勞働以外にはないと謂ふのである。此説が果して正しいか否か。或は何處までが正しく、何處から先きが謬つてゐるか。それが吾々の問題である。

たゞ本題に入る前に特に豫め斷つて置かなければならないのは、茲に吾々が批評を試みる對象は、諸商品の交換比率が直接にせよ間接にせよ、たゞ勞働費用のみに依て決定されんとする學説であつて、商品交換の決定に勞働も亦た其一要素として關係を持つといふ見解ではないこと是れである。此の後の學説ならば、特にそれを取り立て、批評する丈けの興味がない。商品の交換比率に勞働費用が或關係を持つといふ丈けの事ならば、今日の處殆ど著名なる何の學者に依ても否定せられてゐないからである。例へばジェアンスの如きは、勞働價值説に對して最も力強く反對した一人で、殆ど一の革命的抱負を以て効用説を唱導した者であるが、彼れにして猶ほ勞働費用が間接の方法に於て交換比率を左右することは充分に承認してゐた。勞働は屢々價值を決定するものと見られるが、それはたゞ間接の方法に於て、即ち供給の増加又は制限を通じて貨物の効用の度を動かすことに依て然るものに過ぎぬ。併

し乍ら労働は決して價值の原因たることなしとは雖も、それは多くの場合に於て價值を決定する事情である。而して其は左の如くにしてである。曰く、價值は一に最終効用度によつて定まる。吾人は如何にして此効用度を動かし得るか。——消費すべき貨物のより多く又はより少なくを持つことに依て。然らば吾々は如何にして其のより多く又はより少なくを持つべきか。——供給の取得に労働を費すことにより多く又はより少なきことに依て。されば此見解に由れば、労働と價值との間には二歩の階段がある。労働は供給を動かす、供給は價值若しくは交換比率を支配する効用度を動かすのである」といふ文言は明に其を證する (S. Jevons, 'Theory of Political Economy, 4th. ed. pp. 21, 65)。他は概ね推して知るべきである。

併しマルクスの學說とても學說史上、全く孤立偶發の產物ではない。如何なる特色を持つにしても其は他人の思索に出發し、其肩に乗つて更に築いたもので、其前人同時人の學說と或聯絡の下に立つことは勿論である。乃ち茲に先づマルクスの此理論は學說史上如何なる位置を占め居るものであるかの大體を説かねばならぬ。それには費用説と効用説との發展隆替の大要を窺はなければならぬ。而して著者從來の經驗に由れば、此準備を以て出發することはマルクス説の内容と其眞價とを理解せし

むる上に尠少なからざる便利がある。

第二節 リカアドオ以前

抑も物には何故に價值があるかとの問を設くれば、如何なる素朴の考察者も大概は一應の解答をする。而して其解答が不思議にも大概の場合二様ある。一物が價值を有するのは「役に立つから」といふ答へと、「手間をかけなければ造れぬから」といふ答へとが其である。言ふ迄もなく前者は素朴なる効用説、後者は同じく素朴なる費用説である。固より精粗の差は甚しいが、専門學者の説も大體は此二類か、或は兩者の綜合以外には出てゐないのである。而して一八七〇年代に入つて英吉利のジェヂンス、埃太利のメンガー、瑞西のワルラスが相並んで出現して、爾後一時効用説全盛の勢を示したが、其以前に於ては久しく費用説が價值論の主流をなし、又其の費用價值説は大體リカアドオの理論を根基とするものであつたことは既に多數の人の承知する通りである。

リカアドオは貨物の價值を分つて使用價值及び交換價值とし、其定義に於てアダム・スミスを踏襲

した。即ち所謂使用價值は効用 (utility) 交換價值は一貨物の他の貨物と交換せらるゝ力の謂である。スミスと同様にリカードオに取つても、問題はたゞ此の交換價值のみであつた。無論全く効用のない物が他の貨物と交換される筈はないが、併し極めて効用大なるに拘らず、價值(交換價值)の絶無又は僅少なるものがあるのを以て見れば、使用價值は交換價值の尺度にはならぬ。たゞ其の絶對的に缺く可からざる前提であるに過ぎぬ。さて此の前提が備はるものとして、リカードオに由れば價值の源泉は二ある。稀少性と勞働費用とが是である。然るに貨物の大多數は、勞働さへ投入すれば自由に之を生産し得るものであつて、是等のものゝ價值は勞働費用に由て律せられる。但し其勞働費用といふのは、單に直接一貨物の生産に投入せらるゝ(又は投入せらるべき)勞働量のみでなく、間接に其貨物を造るべき材料や道具や機械等の生産手段の生産に投入せらるゝことに由て費さるべき勞働量をも含むのである。後にロオドベルツスが公式化する所に由れば、 x 貨物の價值を定める勞働費用は $\Sigma + \rho$ である。(此場合 m は直接該貨物の生産に費さるゝ勞働量、 n は間接に生産手段の生産に費さるゝ勞働量、而して ρ は生産手段が消耗する迄に生産する x 財の數量である。) 而して此場合生産に従事する勞働者が幾許の賃銀を以て酬ひらるゝか、其高下は、これは等しく凡ての貨物に影響する筈であるから、貨物

間の交換比率を動かすものではないといふ。これがリカードオの學說の勞働價值説と稱し得べき部分である。

併し乍らリカードオの此説は、果して如何なる根據に基づくものであるか。相等しき勞働費用を以て生産せられた貨物は何故に相互に交換せらるゝか。同一の勞働量を費して生産せられた A 、 B なる貨物の價格が、何故に $A=B-B'$ 若しくは $A=B+B'$ となることなきを保證し得るか。先づ之を考へなければならぬ。

元來貨物相互の交換比率は勞働費用に由て定まるといふ説の由來は一朝夕でないが、此問題に就いては實證的交換比率と理想的交換比率とも謂ふべきものが往々論者の頭腦中に混同せらるゝ爲め無用の紛雜を來たしてゐるやうに見受けられる。即ち現實の社會に於て同一量勞働の所産は必ず相交換されるといふが、少なくとも本則としては必ず相交換されるといふ命題と、勞働費用の相等しきもの互に交換せらるゝことが至當である、理想として望ましい、といふ命題とが往々混同されるのである。例へば有名な藝術家が一定時間を費した製作品と普通の不熟練職工が其數十倍、或は數百倍の時間をかけた製作物とが交換されるといふ現實の事實は、少なくとも一應何人にも其正否に就いての疑問を抱

かしめる。吾々の素朴なる正義感は之を不問に附することを許さぬのである。そこで縦令現實社會の交換比率は何うであらうとも、若しもAとBとが等しき労働費用の所産であるならば、それが互に一對一の割合で交換されることが至當であるといふ風に考へたくなる。所謂「公正なる價格」(Justum pretium) 説の根柢には此思想が横はつてゐたと見られる。然るに、正當であるといふことゝ自然であるといふこと、不當であるといふことゝ不自然であるといふことは、殊に十七八世紀の思想に於ては極めて相密接したものである。そこで互に労働費用を等しくするものが相交換されるのは自然であるといふ命題が、それは外部から人為的干渉を加ふることなく、各人をして其の欲するが儘に行動せしむれば結局に於て實現せらるゝ状態だといふ意味と、それが至當な正義に適つた状態だといふのと兩様の意味で言はれた形跡が窺はれる。

屢々引用されるキリヤム・ペチイの労働價值説と稱せらるゝものに、同一時間内に生産したものから各々其生産費及び生産者の生活費を控除した残額は相互に其價值を同じうするといふ説がある。若し兩生産物の一方が銀、他方が穀物なりとすれば、「一方の者の銀と他方の者の穀物とは價值等しきものと評定しなければならぬ」といふのである。又彼れは「人若し一ブツシエルの穀物を作ると同一時

間内に銀一オンスを秘露國の地中から倫敦に齎らし得る時は、一方は他方の自然價格 (natural price) である」とも言つて居る(何れも W. Petty, A Treatise of Taxes and Contributions, 1662 にあり)。此にいふ自然價格とは自然に相互に交換されるといふのであるか、或は相交換されるのが至當といふ意味で當然だといふのであるか。茲にも兩様の意味の混交があるやうに感せられる。

アダム・スミスも原始社會に於ては労働費用が諸物交換の規則たり得べき唯一の事情であるやうだと謂ひ、例へば狩獵民族の間に於て一頭の海狸を殺すには一頭の鹿を殺す労働の二倍を要することを常とすれば、海狸一頭は自然に (naturally) 鹿二頭と交換せらるべきもの、即ち鹿二頭の價值あるべきものである。二日又は二時間の労働の所産たることを常とするものは一日又は一時間の労働の所産たることを常とするものゝ二倍の價值あるべきが自然 (natural) であると謂つた。然るにアダム・スミスには「彼の偉大なる仁愛全智の實在」に對する信頼があるから、所謂「自然的」なるものは一方に於ては本源的なるもの、神の意に適へる、創造計劃中に存するものゝ謂であり、他面に於ては人類及び世界の爲めに唯一の正當、有用、善良なるものゝ謂であることを一考すれば、上記「自然」の語の意味にも多少の疑問なきを得ないのである。

第三節 リカアドオ

其處でリカアドオであるが、彼れの頭腦は極めて非哲學的で、其經濟學は全然スミスに於ける如き形而上學とは絶縁してゐる。彼れの價值論は、たゞ現實世界に於て貨物の交換比率が如何にして定まるかを根本的に説明せんとするものに外ならぬ。問題は、AとBとが其勞働費用を等しうする場合、 ΔV B又は $\Delta \wedge B$ の割合で交換されるといふことは何故に起り得ないか、である。今リカアドオの説の根據は、一貨物の價格が勞働費用相當以上に騰れば、必ず該貨物の生産が増加して其價格を引下げ、反對に價格が其以下に降れば、必ず供給が減少して再び之を引上げるに相違ないといふ處に在る。彼れが自由に生産し得る貨物と然らざるものとを區別したのは、則ち此理由に基づいてゐる。後者の價值が何故勞働費用に依て定まらぬかといへば、假りに購買者の欲望と其購買力との關係上非常に高い價格が成立しても、此場合には之を引下げる作用が行はれない。彼自身の言に由れば「如何なる勞働も此種の財の數量を増すこと能はず、又従つて其價值は供給の増加に由て之を低落せしむることを得ない」

からである。(拙譯リカアドオ、「經濟及租稅原論」經濟學古 典叢書版 一一頁)

此事は彼れの原論中、市場價格と自然價格とを論じた第四章に稍々委しく説かれてゐる。其に由ると勞働價值説の根據は自由競争による利潤率の平均に求められてゐる。一物の市場價格とは時の市場に於ける需要供給に由て定まる價格である。其は需要が増せば騰貴し、供給が増せば下落する。然るに斯く需給に由て定まるとはいふものゝ、市場價格は勝手氣儘に騰落するものではなくて、其變動には或中心がある。これが自然價格であり、而して此自然價格を定めるものが即ち勞働費用である。勞働費用以上に上る市場價格は必ず下降し、勞働費用以下に下る價格は必ず上昇するといふ。然らば何故市場價格は自然價格に歸著せんとするかといふに、此兩者が一致しなければ利潤率は不平均となり、必ず資本の移動、貨物供給の増減を惹き起こして兩者を一致せしめねば已まないといふのである。即ち例へば勞働費用を等しうするAB二貨物に就いて、Aの市場價格がBの其よりも高かつたならば、(即ち供給との關係に於てAに對する需要がより強大であつたならば)、Aの生産者はより高き利潤を取得し、Bの生産者は其反對であるから、資本はB産業からA産業へ流動し、従つてAB貨物の供給増減を惹き起こし、價格の騰落を來たし、利潤率の平均するを俟つて始めて已むといふ次第である。其手續は

大凡そ次の如くであらう。A貨物の市場價格が自然價格以上に騰貴する。其生産者は生産を擴張せんとする。其の爲めの資本を借入れる。(或は新なる生産者が資本を以て参加する)。其資本を以て労働者を雇備する。必要な労働者が得られなければ、A産業の賃銀が騰貴する。其に誘引されて労働者が他産業から此に集まる。生産額が増して價格が下落し、労働の供給も増して賃銀も亦た下降するといふ順序であらう。利潤率に異同ある限りは資本は必ず移動し、賃銀率に異同ある限り労働は必ず移動する。利潤率及び賃銀率の平均する時は、即ち資本及び労働の移動の已む時である。

斯く自由競争の作用に依て社會全體の資本は諸種の産業部門に、夫々其處で普通利潤を生ずるやうに配分せられ、資本の配分に随つて、此資本に依て雇備せらるゝ労働も亦た諸産業に於ける賃銀率に高低がないやうに配分される。今諸産業の生産が放恣無檢束に陥ることなく、相互に或比例を保つて行はれるのは、資本及び労働が上記の如くに配分せらるゝことに依るものである。然るに、上述の如く利潤率が平均を得たる時は即ち一貨物の市場價格が其自然價格と一致した時であるといふ。是は何を意味するかといふと、利潤率が平均するやうに資本が各産業に配分せられ、資本の配分に應じて労働も亦た賃銀率に高低のないやうに配分せられた状態に於ては、その何れの産業に投入せらるゝを問はず

一定量の労働、例へば十時間の労働の生産物は、何れも同一の價格で賣買される。即ち同一の價格で賣買されるやうな需要供給關係が労働配分に依て造り出されるといふに外ならぬ。リカードの説明には不充分的個所もあるが、其意の存する所を敷衍すれば結局斯ういふ事に歸着するであらう。

反之、利潤率の平均せぬ状態は、労働費用を同じうするものゝ相互に交換せられぬ状態である。任意に生産せられぬ稀少財の場合はその最も著しきものであるが、稀少財といはぬ迄も、自由に生産を増加し得られぬ貨物の場合は此に屬する。例へば或一貨物が、需給の關係上非常な高價格で賣買されるとする。其販賣者又は生産者は破格の利潤を收得する。大概の場合ならば、斯く有利の産業には競争者が殺到して該貨物の價格を引下げなければ已まぬ筈である。然るに其競争が遮斷又は妨害されてゐると、如何に高價であつても之を引下げることが出来ぬ。そこで利潤率が不平均であつても其不平均は其儘維持せられて動かない。斯る場合には一産業に於ける一定量労働の生産物は、他の産業に於ける同量の労働の所産とは相互に交換せられず、當然其間に高低の差があるべき筈である。

價值は労働費用に依て定まるといふリカードの理論は上記の如くにして説明される。即ち其は何處迄も自由競争による利潤率の平均、又延いては賃銀率の平均を前提として成立するものであつて、此

前提が具備しなければ、需給に由て定まる一物の市場價格と其生産上に費さるゝ労働量との間に何等の關係をも確かめることが出来ないのである。

此一事を吾々常に念頭に置かなければならぬ。

然るにリカードは上記の自説を提げて頻りに當時マルサス、セエ、ビユカナン、ロオダアデエル卿等に依て主張された需要供給説を攻撃し、諸貨物の價格は需要供給に由て定まるといふ見解は殆ど經濟學上の公理となつて居るが、「斯學上多大の誤謬は茲に發する」と謂つて居る。其理由は何處にあるかといふに、畢竟貨物の供給は直ちに其に對する需要に追隨するから、需要供給の比例に由て價格が決定されるのはたゞ一時の事だといふ點に在る。而して此の供給の需要追隨が資本家のより、高き利潤の追求、労働者のより、高き賃銀の追求に依て行はれ、其結果が利潤率の平均、賃銀率の平均であることは上述の如くであるが、供給が果して踵を接して需要に追隨すると言ひ得べきや否やは始らく措いても、價值は労働費用に依て定められるといふことは、決して其は需要供給に依て定まるといふことゝ相容れないものではない。價值が労働費用に依て定められるといふことは、労働が貨物の供給を左右して諸貨物の價格を宛も夫々の労働費用に合致又は比例せしむるやうな需要供給を造り出すといふに外な

らぬ。労働費用と比例せぬ價格を成立せしめるやうな需要供給關係は、よし一旦成立しても永續せぬといふに過ぎない。故に一質物の價格を決するものは常に需要供給間の比例であると言つて好い。たゞ其供給が任意に人力を以て増減し得る場合には、それは價格と労働費用とが比例する迄或は増加し或は減少すると言ひ得るに過ぎない。單に需給が價值を決するといふ以上に、更に進んで其供給を支配するものは何かを言ふのである。需要供給説を攻撃するリカード自身と雖も、充分這間の消息は理解してゐたに相違ないことは、彼れのマルサス批評中の文言にも窺はれる。曰く、「予は一貨物の價格が附加的供給を待たずに常に其自然價格に一致するであらうとは言はぬ。併し予はいふ、生産費（小泉註、リカードに於ける生産費と労働費用との關係は後に説明する）は供給を左右し、従つて價格を左右する。」マルサス氏は供給と比較しての需要が價格を左右し、貨物生産の費用は供給を左右するといふ。是は言語に就いての争である。苟も供給を支配するものは皆な價格を支配する」と(D. Ricardo, Notes on Malthus, 1928. pp. 21, 118)°。リカードの立場に於ても當然需要供給説が誤謬だとは言はれないのである。リカードの労働價值説と稱し得べきは上述の如きものである。

第四節 リカアドオ價值論に對する疑問(一)——地代と價值

此説は果して承認し得るか否かといふに是に對して若干の疑問が起る。其疑問は分けて四個條とすることが出来る。(一)地主に對する地代の納付は價值法則を傷げぬか。(二)種類品質の異なる労働を如何にして數量的に比較するか。(三)利潤の高下は此價值法則を妨げぬか。(四)任意に生産を増減し得るも而かも相互間利潤率平均作用を受けざる生産物の相互交換比率は此法則に由て律せらるゝや否や。此の四個條である。

第一條の疑問に對しては、リカアドオは明に地代の存在が労働價值法則を妨げぬことを説明してゐる。それは彼れの地代法則に従へば、地代は生産物價格の原因でなくして其結果だからである。元來此問題はアダム・スミスに發するもので、スミスは或場處では地代の高低が生産物價格高低の原因なるが如く、他の場處では其結果なるが如くに説明し、其所説に一貫を缺く所があつた。其曖昧がリカアドオに依て一掃されたのである。生産物の價值は其労働費用に由て定まるといふ。併し乍ら同一物の生

産に要せらるゝ労働量は生産者の條件に由て同一でない。就中、耕作する土地に肥瘠がある場合には、其差は著しく現れる。價值を定めるといふ労働費用は此等様々の労働費用中の何れであるか。リカアドオは其時の需要を満たす爲めに生産に従ふ者の中最も不利な條件の下で生産する者の最高費用がそれであるといふ。そこで最高費用が生産物の價值を定めるとすると、當然より、低き費用と生産物の價值との間には開きが生ずる。農産物の場合に就いていへば、これが地代を構成するのである。故に地代は當然生産物の價值高低の原因となるものではなくて、必ず其結果である。假りに優良なる土地の地主が地代取得の権利を放棄しても、穀物の價格は毫も其が爲めに低落するものでない。反對に又穀物の價格は地主が地代を取得するから騰貴するのではない。穀物の價格は穀物に對する需要が増進し、而かも此の増進せる需要を満たす爲めには逐次より、多くの費用をかけて地味の劣れる土地を耕作しなければならぬ爲めに騰貴するので、地主の地代取得は其結果である。故に地主の地代取得は毫も彼れの價值法則を傷げるものでない。此事はリカアドオの最も力を用ひて説明せんとした所であつて、地代は價格に入らずの句に依て人々の記憶する所となつてゐる。

以上は地味の肥瘠に由て地代の生ずる場合に就いて説明したが、地代が農業其他の用途に供せらる

る土地の位置の便否の爲めに生ずる場合の道理も是と異なる所がない。地味の肥瘠に由て生産費に差違を生ずると同じく、位置の便否も亦た生産物賣却其他に要せらるゝ費用に差等を生じ、これが地代を發生せしめるのである。更に又同一の土地から更に多くの生産物を得んが爲め累ねて費用を投下しても作物の増収が費用の増加に比例せぬ場合、即ち收穫遞減の法則が作用する場合にも亦た同様の事が起る。即ち最後に土地に投下せらるる費用が生産物の價格を超過すれば、無論其投資は收支償はぬし、又若し價格が費用を超過すれば、耕作者は更に多くの投資を促される。既に最後に投入せられた費用が生産物の價格と一致するとすれば、其以前に投入せらるゝより、少なき費用と價格との間には當然開きの生ずること、猶ほ地味の最も劣れる土地の産穀も優良なる土地の産穀も等しく同一の價格を以て賣買される爲めに費用と價格との間に開きの生ずる場合と異なる所がない。

以上地代がリカアドオの價值理論を妨げぬことは、大體明に説明されてゐると言つて好い。價值が最高生産費に由て定まるといふとは、主に土地産物に就て論せられてゐるが、製造品に就いても礦産物に就いても同様なることは彼れの特に明言する所である。然りとすれば、工業生産品に就いても價格と生産費との間に當然地代と同性質の差額が生ずべき筈であるが、リカアドオは其迄は論及しなかつた。

地代は果して生産物の價格に入らぬか否かの問題に就いては、猶ほ最劣等地若しくは最後に土地に投入せられた費用と雖も必ず利潤以上の餘利即ち地代を生ずといふ絶對地代論（リカアドオの如き差額地代論に對して）を主張するものがあり、リカアドオには絶對地代論がないか否かは一個の問題であるが、茲には其に立ち入らずたゞリカアドオの理論の結構によれば絶對地代論は成り立ち難いといふ結論のみを下して置く。（絶對地代論に就いては拙著「リカアドオ研究」三一七頁以下參看）。

第五節 リカアドオ價值論に對する疑問(二) ——異質勞働の比較

第二に異なる品質の勞働を如何にして量的に相互に比較するか。此比較の標準が立たなければ嚴密な勞働價值説は成立しないのである。リカアドオは無論茲に一個の難問が横はることを承知してゐる。併し彼れは此問題を理論的に解決せんとはせず、たゞ其表面を擦過する丈で回避した。

貨物の價值は勞働費用に由て定まるといふ。併し乍ら例へば同じく十時間の勞働に依て造り出した生産物ならば、寶石工の作品でも、土工の生産物でも皆な等しき價值を持つといふことは無論云へな

い。斯く種類品質の異なる労働を互に比較する場合、たゞ其時間を標準として行ふといふことは無論不合理である。何人が考へても、寶石工一日の労働は、普通の場合土工一日の労働よりも多くの價值ある物を生産するに極まつてゐる。さうすると、寶石工一時間の労働は土工何時間かの労働と同等なるものとしなければならぬが、それを何時間とするか、又何を標準として之を算出するか。

此場合に寶石工は長年の技術修業を必要とし、土工は殆どそれを要せぬといふことは若干の標準を供することが出来る。併し一定の修業をすれば何れの土工も皆な寶石工となることが出来るか。又同じ年限の修業を終へたものは、皆な同じ價值ある寶石細工をすることが出来るか、何人も之を斷定するに憚るであらう。獨り寶石工と土工のみではない。特に體力を要する労働、特に知識を必要とする労働、特に審美的批評力を要する労働、特に手先の器用を必要とする労働、これ等の労働の品質がたゞ修業年限の相違に由て説明されるといふことは、若しさう言ふ者があれば、たゞ窮餘の放言として聽き取るより外はない。特別に體力を要する労働は無論練習を必要とするであらう。併し其練習をするには先づ練習に堪へ得る體力を持たねばならぬ。特に學識を必要とする労働は無論學習をしなければならぬ。併し學習をするには先づ學習に堪へ得る頭腦力を持たねばならぬ。アダム・スミスは哲學者

と擔荷夫との差違は分業の原因でなくて其結果だと謂つた。これは過去現在に於て教育の機會の偏して惠まるゝ弊害を矯める爲めには有益の言であらうけれども、普通の不熟練労働者にたゞ教育の機會をさへ與へたならば優に哲學者となり得たであらうといふことは同等の機會と環境とに惠まれたものの中で或者は學者となり得、或者はなり得ず、或者は藝術家として秀いで、或者は秀でず、或者は政治家の技量に卓越し、或者は然らざる等々無數の事例を數へ來れば、勿論甚しい誇張の言として聽かなければならぬ。故に労働の種類品質の差異をたゞ修業時間の長短に換算するといふことは、唯だ極めて限られた用を爲すに過ぎない。

リカードは殆ど此困難の解決を試みたとは謂ひ難い。たゞ極めて曖昧ながら彼れの所説を解釋すれば、労働の種類品質の等級付け、即ち労働質差の量差化は、市場の競り合に由て大體の用を辨する程度には充分正確に定められるといふのが一つ、今一つは、貨物相對價値の變動を測定するには異種類の労働を相互に比較する必要はない、たゞ或時に於ける或種の労働と別の時に於ける同じ種類の労働とを比較すれば、それで價值變動の原因を確めることが出来るといふものゝ如くである。

先づ第二の點に就いていふと、リカードは茲では異種労働の比較を斷念してゐる。即ち例へば毛

織物職工一日の労働は麻織職工の労働幾許と相當するか。彼れは此比較は試みないで、たゞ一定量の麻織物に費さるゝ労働量は變らずにゐて、毛織物一定量を作る爲めの労働が減少すれば、麻織物に對する毛織物の價值は減少し、反對の事が行はれば麻織物の價值が減少するといふことを以て満足する。此場合は異種の労働は相比較せず、たゞ或時と別の時に於ける麻織労働と麻織労働、毛織労働と毛織労働とを比較するを以て足るのであるから、格別の困難はないと謂ふものゝ如くである。

リカードが眞實是丈の事に満足するといふならば、其迄である。併し彼れの價值論の教へる所がただ上述のみに止まるならば、其は或貨物と他の貨物とが一定の割合で交換されるのは何故かといふ、價值論に取つての最も重要な問題には答へない。x量の鐵がy量の小麦と交換せられ、m量、量の小麦と交換されないのは何故であるか。砂糖幾斤と靴幾足とが交換されるのは何故であるか。或は金一オンスは銀幾十オンスと價值を等しうすると謂はれるのは何故であるか。労働價值説の立場から此問に答へるには、是非とも製鐵工の労働と耕作の労働と、製糖工場労働者の労働と製靴工の労働と、金鑛夫の労働と銀鑛夫の労働とを量的に比較しなければならぬこと勿論である。又實際にリカード自身も他の場處では幾度も異種貨物の價值の高低を其費用労働に由て説明せんとしてゐることは、例へば、一

百人の労働を二年に亙つて使用した結果たる毛織物及び毛織機械の價值は一百人一年間の労働に依て生産せられた穀物の二倍の價值を有すべきものであるが云々と言つたり(拙譯四一—三頁)或は百人の労働の所産が八十人の労働の所産と交換されるといふことは同一國內では行はれ得ないが、國際間にはそれが行はれる(同上八一—二頁)と説いてゐること等に由て明である。此種の例證は猶ほ幾らでも其數を増すことが出来る。故に異種労働は比較する必要なしといふリカードの説は、たゞ一時此問題の困難に會つて、回避すべからざる問題を回避せんとしたものと云つて好からう。

其處で還つて第一の點に就いていふと、リカードは労働の質的差異を量的差異に換算することは市場に於ける需要供給に由て定められると謂ふものである。併し説明が不充分であるから、所謂市場の競り合に由て定めらるゝものは労働其者の價值のやうにも、労働の生産物の價值のやうにも解釋できる。(リカードが此機會に援引するスミスの言には、「……様々の労働の様々な生産物を相互交換するに方つては、多大の斟酌は兩者〔労働の辛勞及び工夫〕に對して加へられてゐるのが常であるが、併しその調節は……大體の衡平に準じて市場の競り合駈引に依て行はれる……」とある。)併し後の意味に解釋すれば、リカードの價值説は根本から出發し直さなければならぬ。これは結局、生産物

の價值が勞働の等級を定めるといふに歸着し、従つて勞働費用が生産物の價值を定めるといふ理論と正反對の結論を得ることになるからである。問題は勞働費用が生産物の價值を定めるといふことを説明するに在る。然るに今、同じ價格を以て賣買される幾多の貨物に投入せられた勞働量が時間で測つて異なる場合、勞働價值説の立場から見て、一方の比較的少ない勞働時間には他方のより長時間の勞働と同量の價值を含まれてゐる、若しくは同量の價值を造り出すべき力が含まれてゐると説明するのは當然だが、何故に同じ丈の價值が含まれてゐるかといふに對して若し、生産物が同じ價格で賣れるから同じ價值を含んでゐるに相違ない、といふならば、それは循環論を繰り返すに終るであらう。

然らば右にいふ市場の「競り合」に依て定めらるるものは生産物の價值でなくて勞働の價值であると解釋する。此の議論は、結局市場に於ける勞働の報酬が勞働の等級を定めるといふに歸着する。A B二種の勞働があり、A B各十時間に對しBはAの三倍の報酬即ち賃銀を受けるとすれば、Bの單位量にはAの三倍の價值又は價值創造力が含まれてゐると見るのである。さうすると是は結局賃銀の高下が生産物の價值を定めるといふに歸着する。併し直ぐ次の問題が起る。時間で測つて同一の勞働に對する賃銀に何故高低があるか。是に對しては需要に對して供給の缺乏する勞働が高く、反對なるも

のが安いといふより答へ様はあるまい。けれども斯くして定まつた賃銀額が如何にして勞働費用に相當すると言ふことが出来るか。一日壹圓の勞働には一日十圓の勞働に比して僅か十分一の勞働量しか含まれてないといふことが如何にして言はれ得るか。有名な音楽家が一晚演技すれば、數百或は數千圓の報酬を受ける。此金額は普通不熟練勞働者が恐らく幾百日勞働して贏ち得る金額である。併し何うして此演技者が幾百倍の勞働を投じたといふことが出来るか。勞働量の點から見れば茲に何等の標準がない。たゞ賃銀が高いから勞働費用が多いのだらうと言ふより外はない。即ち勞働費用の多寡が賃銀に現れるといふ原則を豫め承認して置かなければならないのである。

然るに注意を要するのは、勞働者を雇ふ資本家に取ては、費用としては、一定の生産物に投入せられた勞働量其者でなくてこれに支拂はれた賃銀額のみが問題たることである。前記の如く資本家は利潤率の高下に由て不利から有利の産業の方へ移轉する。然し此等の場合に計算の基礎となるものは資本家が生産の爲めに支出した出費であつて、勞働量其者ではない。而かも出費額は、勞働費用に關する限りは、賃銀に由て定まる。さうして前述の通り此賃銀額が勞働費用を代表してゐるといふ保障はないのである。例へば或勞働が練習に依ては修得し得られぬ或る特殊の技能を要するとか、或は勞働者が

團結を組織して新來者の参加を拒むとか、或は或種の勞働が社會的に尊重若しくは輕蔑せらるゝとかの爲めに賃銀率に高下を生ずれば、此等の高下は毫も生産物に投入せられた勞働量を表明するものではないことは明である。

然らば資本家が支出する賃銀額と生産上の投入勞働量とは全く無關係であるか。無論さうではない。假りに賃銀率を一定せるものとすれば、勞働費用の増減は當然賃銀支出額の増減となつて現れる。故に支出賃銀額の一半は勞働費用に由て定まる。たゞ勞働の一定單位量が幾許の賃銀に依て代表されるかと定まらないと、賃銀額を見て勞働費用を測定する譯には行かぬといふのである。然らば賃銀と勞働費用とは正確に比例する場合があり得るか、又如何にすれば比例し得るか。答へて曰く、若しも勞働者の間に完全なる自由競争が行はれ、ば勞働費用は賃銀に比例するといへるであらう。蓋し若しも勞働と勞働に對する報酬の割合が均等ならず、勞多くして報乏しく、或は勞少なくて報豊かなるの差があれば、勞働者は必ず報酬の廉い方から高い方へ移動する。然かすれば、勞働供給減少の爲め一方の報酬が上り、他方の報酬が下つて、其率が均一になるといふ次第である。併し此場合には、此移動に對して全く何等の障害がないことを必要とする。其は單に法制的社會的の障害のみではない、人間能

力の長短得失から來る障害も其中に含めていふのである。多少とも障害があれば賃銀と勞働費用とは隔離する。それには法規が特殊の勞働者に就業の特權を與へ、或は勞働者自身組合を組織する等の事がないのは勿論であるが、實に其のみならず、特殊の職業に對して天賦の適性不適性もないことを必要とするのである、前記技藝家の例に於て、彼れは其勞働に對して普通勞働の幾百倍の報酬を受ける。然るに若し何人も彼れと同様に美しく演奏し得るならば競つて音樂會に出演するであらうから、其報酬も下落せざるを得ない。然るに實際には誰れも承知する通りの報酬の差違があるのは、人に適性不適性があつて、如何に練習しても誰れもがカルウソオの如くに歌ふ譯には行かないからである。

又反對に、或人が他の職業よりも或特定の職業に特に適した能力を有する場合、該職業の賃銀率が不利益であつても、彼れは直ちに其爲めには轉職せねであらう。即ち此等の場合、高き賃銀は必しも高き勞働費用を意味せず、低い賃銀が必しも少なき勞働費用を反映しない。賃銀を勞働費用の尺度とするには上記の如き意味に於ける完全なる自由競争を待たなければならぬ。而して法制上社會上の障害は姑らく措くとしても、各種の職業に對する性能適否の絶無といふことは、事實問題としては不可能の條件である。

此等の點リカアドオの所説は不充分で、其勞働價值説の爲めに必要な基礎工事を怠つてゐると謂はなければならぬ。(此點に關しては高田保馬、「勞働價值説の吟味」七一—二七頁參照)

第六節 リカアドオ價值論に對する疑問(三)——價值と利潤

其次に第三の疑問がある。

前述の如く、リカアドオに由れば利潤率平均の作用に由て資本が、従つて勞働が全社會の各産業に配分せられ、而して斯く勞働の配分が均衡を得た状態に於ては、或産業に於ける十時間の勞働の生産物は苟も同じく十時間の所産なる、他の何れの生産物とも交換されるといふのである。

然れども是は暗黙の間、一定額の資本は必ず一定量の勞働を代表するものと前提しての事である。即ち例へば織物業に投せられた百萬圓の資本も、製鐵業に投せられたのも、農業に投せられたものも、鑛山業に投せられたものも、百萬圓は百萬圓として必ず同一量の勞働を雇傭するものとした上での立論である。

然らば此く前提することの當否如何。此問題の一半は前條に論じた賃銀と勞働との比例性如何に由て定まる。即ち資本家に依て支出せられた一定額の賃銀は必ず一定量の勞働を動かすものとしなければ到底始めから問題にならないのである。資本家が其生産を伸縮する場合、彼れはたゞ生産物の價格と生産出費とを比較して進退する。生産上に費さるる勞働量は勞働其者としては介意されない。たゞ勞働費用が賃銀として支出さるる金額を左右する限りに於てのみ資本家の顧慮の對象となる。假りに實際に費さるる勞働量が多くても、何等かの事情に由て賃銀が安いか、或は其正反對の事があれば、無論一定額の資本が一定量の勞働を代表するとは謂はれない。併し乍ら、假りに支出せらるる賃銀額は勞働費用に比例するとしても、全放下資本額中に於て賃銀として支出せらるる部分の割合如何に由て、或は資本額と勞働費用とが比例を失することになる。資本中賃銀として支出せられぬ部分とは、道具機械建物及び原料等の物的生産手段の購入設備に充てらるるものに外ならぬ。此中原料の消費量は生産力増減の原因でなくて其結果として定まるものであるから、問題は全體に於て道具や機械に多くの割合を投するか、或は反對に直接人間勞働の雇傭を多くするかといふことに由て定まる。無論此割合は、産業の種類に由て同一でない。紡績業、造船業、機械製作業、鑛業、漁業、農業等々に由て資本總額は

同一であつても、其中の賃銀として支出せらるゝ部分には甚しい差等があり、概していへば、勞働生産力の發達と共に賃銀が資本中に占める割合は減少するものと言つて差支ないのである。(後にマルクスは、資本中の賃銀として支出せらるゝ部分と其以外のものを可變部分不變部分と名稱した。リカアドオの流動資本固定資本は是と稍々似て稍々違つてゐる。主なる相違の點は、マルクスが不變資本とする原料をリカアドオが流動資本に編入してゐることである。併し今吾々が論せんとする問題に就いていふ場合、リカアドオが流動資本といふのは大概賃銀の意味で、原料は比較的閑却されてゐるから、マルクス、リカアドオの差違は外見上程甚しいものではない)。

然るに斯く一定額の資本は必しも一定量の勞働を代表(即ち雇傭)しないといふ事になると、前記の如く利潤率の平均を得た時が市場價格と自然價格との一致した時だとは謂はれなくなるのである。一例を按じていへば、甲乙二人の企業家があつて各々百萬圓の資本を投じて夫々A Bの貨物を生産するものとする。甲の方は其資本の大部分を機械(固定資本)に投じ乙の方は其大部分を勞働者雇傭の爲めに賃銀(流動資本)として支出するものとする。此場合乙の方が多量の勞働を動かしてゐるから、若しも生産物が各々其勞働費用に投じて賣買されるとすれば、同じ百萬圓の資本に對して乙の方が多

額の収益を擧げなければならぬ筈である。即ちB生産業の方が利潤率が高くなければならぬ筈である。さうすれば自由競争の行はるゝ限りAからBの方へ資本の流動が起らなければならぬ。そこで此資本の流動に従つて勞働も移動するとすれば、やがてAの生産額が減少し、Bの其が増加し、供給減少の爲め、Aの價格が騰貴し、反對の原因に依てBの價格が下落する筈である。此の價格の騰落によつてやがて利潤率は平均するであらう。(平均しなければ平均するまで資本の流動は已まぬ筈である)。然るに、斯くして利潤率が平均した其時の二貨物の價格は、最早其勞働費用に比例するものでないことは、當初の約束に由て明白である。(二者の價格が其勞働費用に比例するものならば利潤率の不平均を免れないといふのであるから)。故に同額の資本が必しも同量の勞働を代表するものでないことを承認すると、利潤率の平均を勞働價值説の根據とする、最初の立場を保持することが出来なくなるのである。リカアドオは結局此論理の命する所に従つて、其の單純なる勞働價值説を放棄又は修正して、單に勞働費用は價值を定める重要の一原因だといふことに甘んずるの已むなきに至つた。

右に二人の企業家の例を引いて、一人は其資本の大部分を機械に投じ、他の一人は之を直接に勞働雇傭に支出したとすれば、資本は同額でもその代表する勞働量は同一でないと言つたが、此點に就いて一

の問題がある。それは機械（或は道具、或は原料）其者が素と労働の生産物であるから、労働者を雇
傭しても、労働の所産たる機械其他を購入しても、畢竟何れも労働を購ふことに外ならぬ。従つて同
額の資本の代表する労働量には異同があり得ないではないかといふ議論である。茲に過去に於ける一
定量労働の所産たる貨物（即ち機械其他）と現在の同量の労働とを經濟當事者が果して同等に評價す
るか否かといふ、極めて重要な問題が横はつてゐるのであるが、リカードは當然此兩者は同等に
評價せらるべきものではないとしてゐる。機械や道具は過去の労働の所産である。といふ事は、始め
機械の生産に労働が投せられてから、機械で造つた生産物が完成して賣却される迄には時間を要する。
此時間の経過に對して或賠償が與へられなくてはならぬ。直接労働者を雇傭する場合には、此の時間
の経過がないか、或は短い。其處で同じ百萬圓の資本を投じて、之を賃銀に支出して雇傭し得る勞
働量と、價格百萬圓の機械を製作する爲め過去に於て投入せられた労働量とは等しくない。機械に費
された労働量の方が少ないのである。即ちリカードは、資本中に於ける流動資本と固定資本との比例
の異同を、最初に労働が費されてから其成果が生産物となつて市場に出される迄の時間の遅速として
考へ、而して此の時間の遅速が貨物の交換價値に影響を及ぼすことを承認するのである。けれども是

を承認すれば、無論彼れの價值論は二元論となり、單純な労働價値説とは言はれない筈である。乃ち
彼れは明白に繰り返して、貨物の交換價値を決するものは、（一）労働費用と（二）生産着手から其
完了（生産物賣却）までに経過する時間と此の二原因であると言ふに至つた。従つて假りに二貨物の
互に労働費用を等しくするものがあつても、上記の経過時間の點に就いて差等があれば、其原因の爲
めに價値に差等を生ずる譯である。而して経過時間に異同があるといふことは、生産上に使用せらる
る流動資本と固定資本との割合の異なること、固定資本の耐久性の異なること、流動資本の回轉速度
異なることの爲めに起るとされてゐる。

彼自身の文言に由ても、假りに二貨物に含有せらるる労働費用は一對二の割合であつても、経過時
間の點で相違があれば、其交換比率は二對一ではない。「……其資本の耐久力の程度を異にする爲め、
或は——一種の貨物が市場に齎さるる迄に経過しなければならぬ時間の爲めに、此等のものゝ價値は
精確に其に投せられた労働量には比例せぬであらう。其は一に對する二でなくて、價値多き方のもの
が市場に齎さるる迄に経過しなければならぬより、長き時間を償ふ爲め多少は以上に上る」(前掲拙譯書
第四三頁)のである。然るに、此の時間を償ふ爲めに支拂はるるものは利潤である。故に利潤率が高

ければ兩貨物の價值の差は大きく、反對に利潤率が低ければ其差は小さく、其が零に下ること假りに之ありとすれば、兩者の價值は同一となるべき筈である。然るにリカアドオに由れば利潤の高低は賃銀と逆行し、賃銀が騰貴すれば利潤が下落し、反對ならば又反對の結果を生ずる。さうすると茲に前段の主張に反して、賃銀率の高下が生産物の價值に影響することを認めなければならぬ。即ちリカアドオも其生産に多くの固定資本或は耐久力多き固定資本が使用せられ、又は流動資本の回轉の緩慢なる貨物に於ては、一般賃銀率の騰貴は却て固定資本を使用すること少なき等々の生産物に對する其比較的價值を下落せしめること（反面からいへば多くの流動資本、又は耐久力少なる固定資本、若しくは回轉速かなる流動資本を使用する生産物の比較的價值は賃銀率騰貴の爲めに騰貴すること）を言明せざるを得なくなつた。

此處で注意しなければならないのは、本條で取扱ふ勞働價值法則に對する妨害が、前條に於けるものと其趣きを異にすること、或は其正反對に出ると言つても好いことである。前條に於て論じたのは、勞働者間に於ける自由競争の完全なることを條件として始めて勞働價值説が成立することであつた。自由競争が不完全で、勞働費用と賃銀率との間に嚴密な比例が保たれなければ、此價值法則はその立脚

すべき根據を失はなければならぬ。然るに今右段では自由競争に由る利潤率平均が却て勞働價值説を妨害することが説明された。勞働と賃銀とはよく比例し、生産に投下せられた資本はみな元本に對する一定率の利潤を収めるものとし、而してたゞ一定額の資本が必しも一定量の勞働を代表しないといふ一事を認めると、生産物の交換比率は其勞働費用とは一致しないといふ結論に到達しなければならぬのである。其が爲めにリカアドオは、已むなく勞働、時間の二元論に歸着した。若し彼れを勞働價值論者と稱するとすれば、其は彼れが價值決定の上で、時間よりも遙に勞働の要素に重きを措いたといふ一點に理由を求めより外はない。

右の説明では、勞働費用と價格との一致が利潤率平均の爲めに妨げられてゐる。此處で用心しなければならぬのは、利潤率の平均に由て勞働費用と價格との一致が妨げられるのだから、たゞ利潤率平均といふ事さへなければ、勞働價值説の一元論に復歸し得るものと速断してはならぬことである。眞相は反對である。成程利潤率平均は勞働費用と價格との一致を妨げる。併し利潤率平均の作用があるので、兎に角貨物の價格と勞働費用との間に或關係が保たれ、市場價格は生産に費された勞働の賃銀と、生産に投下された資本の利潤との合計たる生産費を中心として旋廻するのである。若し此平均

作用を度外すれば、勞働費用を重要な項目とする生産費と市場價格との間には何等の必然的關係をも求めることが出来なくなつてしまふ。これはリカードオが擧げた稀少財の價值法則を一考すれば直ぐ分ることである。此種の任意に生産し難い貨物の價格は購買者の欲望と購買力の程度如何に由ては何處までも騰貴し得る。假りに其が非常の高價に上つたとする。其生産者又は販賣者は破格の利潤を収めるに違ひない。若し茲で自由競争が行はれれば、他の方面から資本及び勞働が此有利の産業に殺到し、此の高價物の生産額を増して其價格を引下げ、此生産業の利潤が普通一般の利潤率と一致するに至つて始めて已む筈であるが、利潤率平均の作用が行はれぬとすれば、何かの原因で需要が減退することある時迄、騰貴した價格は何時までも騰貴した儘で居るであらう。又反對に、需要減退又は供給過大の爲め價格が下落して、其生産者は普通の利潤をも收得せず、而かも何等かの理由に由て其物の生産量を縮小することが出来ぬとすれば、洵に利潤率は平均せぬ。併し利潤率が平均しないといふことは、毫も勞働費用に一致した價格が成立するといふ保障にはならないのである。既に繰り返し説明したる如く、若し價值は勞働費用に由て定まるといふことを證明し得るとすれば、其は必ず市場價格が此費用を超過した場合には供給増加が起り、反對に價格が費用に及ばぬ場合には供給減少が起るといふ處に論

據を求めるより外はない。然るに此作用は、リカードオが前提する如く、生産の擔當者は資本家であるとすれば、資本家が、より高き利潤を求めて移動し、次いで資本を追ふて勞働が移動することに依て始めて行はれる。而して資本家又は資本の斯る移動は、利潤率の平均を來たさしめなければ已まぬ。利潤率平均を度外すれば、一般に價值費用説は成立せぬ。従つて費用説の一たる勞働價值説も成立しないといふことを承知しなければならぬ。

此の第三條の困難がリカードオを勞働價值論者でなくて、生産費論者たらしめた。彼れの眞意は當然斯く解釋すべきものであるといふ點に就いては、幾多リカードオ研究者の評言があるけれども一々引用する迄もあるまい。リカードオの眞意を示す彼自身の文言には「マルサス氏は一物の費用と價值とを同一物なりとするのが予の學說の一部分たるものと考へてゐるやうである。若し氏の謂ふ所の費用が利潤を含む『生産費』であるならば其通りである」云々。「若しマルサス氏が費用の語に由て生産費を意味するならば、彼れは勞働と共に利潤を含ませねばならぬ」云々其他、引用すべきものが幾らでもある（既掲拙譯本第六三頁、Notes on Malthus, p. 14）

第七節 リカアオド價值論に對する疑問(四)
——利潤率の平均なき場合の價值

次は上記第四條の困難である。リカアオドは勞働投入に由て自由に生産し得る貨物と然らざるものを區別して、前者に就いて生産費説(或は一種の制限せられた勞働價值説)を唱へた。然るに自由に生産し得る、といふことは、上記の説明によれば、結局其結果として利潤率平均、賃銀率平均を來たさしむべき、産業間に於ける資本勞働の流動の自由があるといふことに外ならぬ。然るに茲に猶ほ一の場合の考察すべきものがある。それは貨物其自身は稀少財でも獨占財でもなく、正に勞働の投入に由て自由に其供給を増加し得るものであり、又其と交換せらるべき相手の貨物も、同じく自由に生産し得るものではあるが、彼此生産部門の間には資本勞働の移動が遮斷、或は妨害されてゐる場合には、當該貨物間の交換比率は如何なる法則に由て律せらるるものであるか、といふ問題である。リカアオド自身果して斯る場合の理論を述べてゐるかといふに、述べてゐる。彼れの外國貿易理論、後人の所謂比較的生産費説が即ち其である。

國際間に於ては資本の流動は自由でない(リカアオドは觀察した。而して彼れは、此の資本の流動不自由なるを慶賀すべきこととしてゐる。)一國と他國との間に利潤率の異同があつても、資本は同國內に於ける場合と異つて、より高き利潤率を追ふて流動し、隨つて之を平均せしむる作用が行はれない。そこで貨物の國內交換と國際交換とは趣を異にする。故に曰く、「一國內に於て諸貨物の相對價值を支配する同じ規則は、二國若しくは其以上の國々の間に交換せらるる諸貨物の相對價值を支配するものではない」と。

然らば國際交換は如何に行はるかといふに、リカアオドは一例を按じて之を説明する。英吉利、葡萄牙間の貿易に於て、英吉利では羅紗を製造するに一年間百人、葡萄酒を醸造するには百二十人の勞働を要し、葡萄牙の方では、羅紗の製造には九十人、葡萄酒の醸造には八十人の勞働を要するものとする。此場合、英吉利に於ける百人の勞働の所産たる羅紗が、葡萄牙に於ける八十人の勞働の所産たる葡萄酒と交易されば、英吉利は此貿易の行はれなかつた場合に百二十人の勞働を費して始めて獲得せらるべき葡萄酒を僅に百人の勞働の生産物を以て購ひ、又葡萄牙の方は、九十人の勞働を要すべき羅紗をば僅に八十人の勞働の所産たる葡萄酒を以て購へば双方共に利益がある譯である。併し斯く八

十人の勞働の生産物と百人の勞働の生産物とが相交換されるといふことは、これは彼れの價值論に抵觸する、一國內では行はれない筈の事である。(彼れの價值論は嚴格にいへば生産費説だが、勞働費用に最も重きを置いてゐるから、斯う言つて差支ないのである)。一國內で斯ういふ交換が行はれば、百人の勞働を費す方が比較的不利益であるから、直ぐに資本も勞働も他方の生産業に向つて流動を起し、やがて例へば九十人の勞働所産と九十人の勞働所産とが相交換されて利潤率を均一ならしめる如き需給状態を造り出さねば已まないのである。此點に於ける國內と國際との相違は、「資本が一層有利なる用途を求めて一國から他國へ移動するの困難なると、其の同一國內に於て常に一地方から他地方へ移動することの敏速なるを考察することに依て容易に説明される」とリカアドオは言つてゐる。

國際交易が斯く生産費の法則に依て律せられないとすれば、ミルの言ふ如く、「其より以前の一法則即ち供給需要の法則に據らなければならぬ。固より國內市場に於ける交換も供給需要法則の適用を免れるものではないが、たと國內交換にあつては、生産費と一致せぬ交換比率を成立せしめるやうな需給關係といふものは、より有利なる生産への資本及び勞働の流動の爲め、縱令一旦成立しても永續しないといふ相違があるのである。今リカアドオは、國內に於ては一産業部門又は一地方と他の部門又は

他地方との間に於ける資本、又勞働の移動は自由に行はるゝものと想定してゐるが、事實は果して如何。若し此等の移動に妨害があれば、其處に國際貿易の場合と類似の條件が成立し、従つて生産費法則の適用範圍は其丈け制限せられなければならぬ筈である。故にシユムベエタアの如きも、此の外國貿易論の思想を進めて行けば、結局リカアドオ價值論の不満足なるものを指摘せざるを得ないと謂つてゐる。

以上の所論に由て價值論上の費用説は如何なる條件の下に成立するか、又費用説の一たる勞働價值説は更に如何なる條件の備はる處で成立するかを一應説明した積りである。

ジエムス、ミル、マカロツクを除くの外リカアドオの後繼者の重なるものはリカアドオの先蹤に隨つて價值理論を一層明瞭に生産費説の方へ近づけた。

其中でシイニオアは制欲 (abstinence) なる術語を鑄造して上記第三條に關する點を少しく修正した。リカアドオに言はしむれば、勞働費用と價值は經過時間とに由て定まるといふことであつたが、シイニオアに依て一定時間に互つて制欲することが勞働と相並んで價值を動かす一の原因とされた。制欲とは、人がその支配し得るものゝ不生産的使用を節し、若しくは故らに直接の生産を棄て、遠き將來

の結果の生産を擇ぶ行爲であるといふ。而して賃銀が労働に對する報酬なるが如く、利潤は此行爲に對する報酬であるとされた。此術語及び此思想は、多數經濟學者に採用されて、正統學派の一の世襲財産項目となつた。

スチユアアト・ミルはリカアドオを奉ずる者ではあるが、彼れの説を、明に企業家生産出費説として説明した。そこで貨物の價格旋廻の中心を定める（他の要素と相俟つて）ものは、労働費用其者でなく、賃銀であることが明瞭に説かれた。そこで労働費用に變りがなくても生産上賃銀の高い労働を要するものか、或は生産者に高率の利潤を與へる必要のあるものは高價、其の反對のものは比較的廉價であるべきことが明にされた。ミル自身の約説する所は左の通りである。二物の中平均して一方が他方よりも價值高しとすれば、其原因は

- (イ) 其生産により多くの労働量を要するか、
- (ロ) 永續的により高率の報償を受ける種類の労働を要するか、
- (ハ) 資本をより長期に亙つて前拂することを要するか、
- (ニ) 何かの事情に由て其生産業が特に高率の利潤を以て酬ひる必要があるか、

に存せねばならぬ。但し右の中(イ)に屬するものが最も重要であるといふ。ミルに就いて注意すべきは、リカアドオが大體労働賃銀は一率に上下するものと想定したやうに見えるに對し、ミルは特定労働賃銀率の高下の場合を考へ、「貨物生産に必要な労働の相對賃銀が其價值を動かすことは正に労働の相對量に同じ」であることを認めた。賃銀率の高下が直ちに労働費用の大小を意味するものではないことは勿論である。

其處へ更にケルンズが出て、所謂不競争團(non-competing)の説を以て更に此點を詳論した。即ち若しも労働者相互間に完全な競争が行はれば、労働といふ犠牲と賃銀といふ報酬との關係は均一に歸すべき筈であるが、ケルンズに由ると労働者の間には幾多の階層があつて、各階層は相互に不競争團を成してゐるから、或階層の賃銀が騰貴しても他の階層所屬員の競争に依て之を引下げることが不可能ならぬ迄も困難である。従つて例へば不熟練労働者の賃銀と工匠、鍛工、石工等の賃銀とは必しも夫の給付労働に比例せず、又後者と時計師や眼鏡師の報酬、又或は學者藝術家辯護師の報酬との差額も必しも労働費用の多少に比例するものではないのである。

ケルンズもシイニオアやミルと同様、労働と制欲とを生産上に忍ばるゝ犠牲となし、賃銀と利潤と

を夫々之に對する報酬としてゐる。若し勞働者間資本相互間に夫々完全な競争が行はれるならば、賃銀と利潤とは各々勞働及び制欲といふ犠牲に比例し、從つて賃銀及び利潤の源泉たる生産物の價值は又其生産費に比例する譯である。然るに勞働者間には前記階層に妨げられて自由競争が行はれないから、生産費と價值との一致も妨げられざるを得ない。從つて同一階層に屬する勞働生産物相互は其生産費に應じて相交換されるが、異層間の交換は勞働及び制欲といふ生産費の拘制を受けぬ。生産費の拘制を受けなければ何うなるかといふに、畢竟國際間の貿易の場合と同様の事態が現出するものと見なければならぬ。事實ケルンズも之を國際貿易理論と同様に取り扱つた。

此處で本編の始めから稍々詳しく述べて來たことを綜合して結論を下すと斯ういふ事になる。

生産當事者間の自由競争を前提すれば、何うしても利潤率の平均を認めなければならぬ。然るに利潤率の平均を認めると、生産物間の正常的交換比率と勞働費用との不一致を來たすを免れない。左りとて自由競争を前提しなければ、費用説一般、從つて勞働價值説も成立の根據を失はねばならぬ。然るに其の自由競争を前提するといふ事は何うであるか。無論名畫珍本古錢其他骨董品の如き、其存在量の絶對的に限定されてある物、及び其生産又は販賣の獨占せらるるものに就いては、無論此前提は具備した

い。其他にリカード自身も承認したものに外國貿易に於ける交換比率がある。後の學者の附け加へたものに不競争團の説がある。任意に生産すべからざる財といふ概念を廣く解釋すれば、此等の場合は皆な其中に編入しても好いのである。斯うして考へて見ると費用説の適用範圍は存外狹隘であると謂はなければならぬ。

第八節 効用説と費用説

費用説が適用出來ぬといふ事になれば、自然の順序として効用説を顧みなければならぬ。上記の如き發展をして價值説は或意味では完成し、(スチュアート・ミルが價值論は既に完成し、最早論せらるべき問題は残されてゐないと謂つたことは有名である) 或意味では行き詰まりに到達した。一八七〇年代に入つてジェチンス、メンガー、ワルラスの効用價值論が一時に輩出したのは、必しも偶然とのみ言ふべきではない。

併し効用説に復歸するといふ。其事必しも簡易ではない。効用説を取る者は、必ずスミス、リカード

ドオ等を惱ました難問に逢着しなければならぬからである。曰く、例へば水の如く、効用大なるに拘らず其價值僅少又は皆無のものがあるのは何故かといふ問題がそれである。若し此難關を通過することが出来なければ、効用説採用も畢竟無用に歸するであらう。

新興價值論は茲に限界効用の概念を以て此難關を通過した。言ふ迄もなく、限界効用の概念は、欲望飽和法則を其基礎とする。さて前記の水の例に就いて言へば、其なくば人間の生存も不可能だといふ意味に於ては水の効用は絶大である。併し普通事情の下に於ては、水は自由に飲用使用せらるゝから、此に由て充たさるべき欲望は事實既に飽和又は飽和に近い點に到達して居るか、或は到達することが確實である。故に水其者、或は水全部の得喪は、人間に取つての一大事であるが、其中の一定單位の有無は殆ど意に介するに足らぬ事項である。何となれば、其場合の損失は、水の現有量中最も弱き欲望を満たす一單位の喪失に過ぎないからである。此の最も弱き欲望を満たす單位の効用を限界効用又は最終効用といふ。前例に就いていへば、水の存在量全部の効用は絶大であるが、其限界効用は皆無又は皆無に近いのである。普通の場合水に對して高價を支拂ふ者がないことは是に由て説明される。水は効用大なるに拘らず價值がないのではない。水は効用(限界効用)を持たぬから價值を持たない(或

は効用が少ないから價值が少ない)のである。

限界効用の理論に由て需要供給説は始めて精密に説明された。一物に對する需要が増進すれば其價格が騰貴し、其供給が増進すれば價格が下落するといふのは久しく經濟學上の常識であつたが、此常識の根據が説明を得たのである。何故供給が増せば價格が下落するか。限界効用が下降するからである。而かも此限界効用説で行けば、一切の貨物の價值が統一的に説明される。稀少財の價值も獨占財の價值も任意生産財の價值も皆な一律に是に由て説明される。故に限界効用説に如何なる缺點あるにもせよ、又其眞價は必しも其主張者自身等の吹聴の如く偉大ならざるにもせよ、兎も角經濟財の價值を人間の之に對する評價に由て説明し、而して從來の學者が此一面より問題を考察せんとする場合に常に之を蹉跌せしめたる、効用ありて價值なき物あるは奈何といふ問題に説明を下し得たることは、確に限界効用論者の一の功績としなければならぬ。

然らば此の新しい効用説と從來通用の費用説とは全く相容れ難きものであるか。ジェブンスや塊太利學派の人々は無論さう解せらるゝやうに説いてゐる。ジェブンスの如きは自己の學説を「新奇なる意見」として唱へ、假令謬つた説を唱へることもリカアドオ派の陳套を反覆してゐるよりは優しだ

と迄言つた。併し限界効用論者の抱負も去る事乍ら、彼等の其説の唱へ方にも性急に失する處がある。此の新舊二説は、吾々の解する所に由れば、決して相容れ難きものではないのである。

第一に、随意に生産すべからざる財に就いては、是れは無論問題がない。これは限界効用に據る外其價値の説明しようがない。但し此場合、リカード等には限界効用の概念がないから、例へば非常な高價物で、而かも水や空氣に比較して其効用が低いといふものゝ價値に就いては説明の仕様を知らぬ。これを精確に説明し得るものとしたのは、明に限界効用論者の功勞に屬する。第二に、随意に生産を増し得る財であるが、此種の財と不可任意増加財との差違は畢竟前者の價格は久しく其費用以上に上り得ず、又費用以下に下らないといふのである。無論此種の財にしても、需要供給の關係で随分高くもなれば廉くもなる。けれども其が一定の基準を外れて騰落すれば直ぐに反動が起つて、供給が或は増加し、或は減少して以て價格を其基準の點まで下げ又は上げる。而して其基準となるものが生産に要せらるゝ勞働費用或は勞働費用と制欲とであると謂ふ。然らば供給の増減に由て如何にして價格が上つたり下がつたりするか。言ふ迄もない。買手に取つての限界効用が上り又は下るからである。故に問題が限界効用に由て定まるといふことに差支はないが、限界効用は財量の缺乏の程度即ち稀少

性に由て定まり、稀少性其者が費用に由て左右されるといふに過ぎないのである。

往年限界効用説が勃興した時、是に對して敢然リカードを辯護したハインリヒ・ヂイツェルの所論は決して限界効用説を誤謬だといふのでなくて、特に言ふ迄もない當然至極の事だといふのであつた。稀少財に就いては、リカードは無論限界効用性を拒否しない。たゞ任意に再生産し得る貨物に就いて、彼れは効用論者以上に更に一步を進めて、勞働費用がより、明確なる尺度を供すると言つたに過ぎぬと謂ふ。彼れはボエム・バゼルクが引いたロビンソン・クルウソオの經濟生活に就いて言ふのに、クルウソオが一物を尊重する程度即ち其物の評價は、其物の喪失に由て彼れが喪失しなければならぬ丈の効用、即ち限界効用に由て定まると言ふことは固より間違でないが、併し若し問題の諸財が勞働に依て生産せらるゝものであれば、其は夫々の生産に要せらるゝ勞働時間に由てより精確に評價される。例へば其生産に二時間を要するものならば、他の何れの財の同じく二時間を以て生産し得るものとも同じ程度に尊重されるといふのである。併し斯く勞働時間に由て評價するといふことは、少しも限界効用に由て評價するといふことを否定することにはならぬ。費用とは畢竟効用喪失に外ならぬからである。詢に多くの財は勞働を投じて再生産することが出来る。併しその投入すべき勞働其者の量に

限りがある。故に勞働に依て生産し得べき或財を失へば、其が當然勞働に依て生産せられ得べき諸財の中クルウツオに取つて最も重要なものでない限りは、彼れは必ず生産に依て之を補充するであらう。併し乍ら補充するには勞働を其生産に振り向けねばならぬ。然るに勞働の總量に限りがあるから振り向ける丈の勞働は、他の何物かの生産に投入せらるべかりしものを引上げるのでなくてはならぬ。即ち一物の喪失に依て彼れが蒙る損失は、此場合には、此喪失物を補充する爲めの勞働振り替に依て其生産の放棄されなければならぬ財の効用の喪失である。ドイツエルは此の如き推究に由てリカアドオを辯護すると共に、費用説と効用説の兩立し得べきことを説いた。

ドイツエルの議論には今日の目を以てすれば猶ほ議すべきものがある。殊に彼れが同一時間を以て生産し得る諸財の限界効用に差等あるものとして立論してゐるのは異様である。(此點はボエム・バズルクが、收穫された穀物幾袋が第一は食用第二は播種用第三は造酒用等々に供せらるゝものとし、袋毎に効用に差等あるものゝ如くに説て居るのも同様である。)一定の同じ勞働時間に依て生産さるゝ諸財の限界効用に高低の差があれば、その差のある限り、當事者は必ずそのより高き方の生産を増加する筈であるから、同量の勞働に依て造られるものは當然其限界効用を同じうする傾向がある。故にドイツ

エルの如き迂折した説明を下す迄もなく、勞働費用相等しき生産は、均衡の状態に於ては、既に相等しき限界効用を持つて居る筈である。若しそれが離れてゐれば——生産の増減の自由なる限り——必ず限界効用高きものゝ生産増加が起るであらう。併し彼れが、リカアドオが稀少性と勞働といふ異つた二つの原因から價值が発生すると説くものであるかの如くに解せらるゝのは其説明の不充分なるに由ると謂ひ、或種の財は、「勞働之を増加すること能はざるを以て稀少である。……大多數の財は成程増加することは出来るけれども、たゞ勞働に依て始めて増加し得べきが故に稀少である。……勞働を費すことを要する財は皆な稀少である」と言つたのは正しい。

而して効用説と費用説とが相拒否すべきものでないことは、結局効用論者も之を承認する。即ちジェヂンスも「生産費は供給を定む。供給は最終効用を定む。最終効用は價值を定む。」と謂ふのである。併し是は少し熟考すれば、リカアドオの立場から見ても容認し難いことではない。それは從來の價值論に於て既に與へられたものとして承認されてゐた、貨物供給量の増減と需要強弱との關係をより精密に考察したといふ丈の事であつて、決して既存の價值論と相對立する關係に置かるべきものではない。ただ貨物の價值を決するものは何處迄も需要と供給或は効用と稀少性とであり、勞働費用又は

生産費は此の供給又は稀少性を左右するものとして始めて價值に影響するのであるから、効用學説は生産費説に對して特殊に對する一般の地位にあり、たゞ其場合に生産費は効用よりも一層明確に價值を測定せしむることがあるといふに過ぎぬ。

以上論究した所に由て左の如く言ふ事が出来る。

一切貨物の兩極端に位するものは、一方では、例へば古名工の作品の如く、其存在量の絶對的に限定されてゐるもの、他方では需要の増減と共に即刻同一の割合を以て供給の増減し得るものである。前者の價值は効用學説に依て始めて説明出来る。後者の價值も、同様に効用學説に依て説明されるが、吾々は同時に更に進んで、貨物間の交換比率は常に其生産に比例すると言ふことが出来る。而して此の兩極端の中間に無數の段階があつて、一物の價值はそれが後者に近い程多く生産費の影響を受け、前者に近い程生産費の支配から獨立する。併し需要の増減と共に即時供給が増減するといふものは實際上殆ど絶無であつて、生産費の價值に對する支配が現れるのは、多くの場合時間を要する。故に費用説と効用説との兩立を認め、その何れの一方が正しいかを問ふは、鉄の双刃の何れの一方が物を截るかと同ふの不合理に等しいといふマアシャルが、「通則として吾人が考察しつゝある期間が短ければ

短き程、吾々は大なる注意を價值に及ぼす需要の影響に分たなければならぬ。又期間が長ければ長き程、價值に對する生産の影響は益々重要となるであらう」と謂つたのは極めて正當の見解である。

但し以上簡略の爲め、需要供給が價格を定めるかの如くに説いたが、これは素より簡便に出でたのであつて、嚴格に言へば此言ひ方は無論粗雑である。需要供給は價格を左右する。併し乍ら、固より一貨物の價格を度外しては其需要量又は供給量が幾許であるかを言ふことは出来ぬ。吾々が物の購買者たる場合に其幾許量を買ふかといふことは、其價格を知らずには言ふことが出来ぬ。物の生産者たる場合も同様であつて、其價格の如何に由て吾々は或は生産を斷念し、或は生産し、又或は生産を擴張するのである。市場に於ける需要の總體、又供給の總體は斯の如き「吾々」の多數に依て構成されるのであるから、一物の價格が上れば通常其需要量は減少し、反對に下れば需要量は増加する。生産の方では、生産規模の擴大に由て或はより低廉に生産し得るか、或は費用と収益との關係が依然同一であるか、又或は漸く生産條件が悪くなつてより不廉の生産を行はねばならぬか、即ち収益遞増、不變、遞減の法則が作用するから、供給と價格との關係は一層複雑であるが、併し差し當り先づ價格の騰貴は生産増加の刺激となり、價格の下落は其反對の効果を齎すものと解して好い。故に需給は無論價

格を左右するが、右述の意味に於て價格も亦た需給を左右すると言ふべきである。一物の價格の騰貴に由て其需要量が減退し、反對に其下落に由て需要量が増大すれば、此物の需要は伸縮性を持つといふ。反對に價格の騰貴に由て生産が刺戟せられ、其下落に由て生産の削減せらるゝことを供給の伸縮性といふ。需要の伸縮性の大小は固より物に由て同じでない。例へば恰好なる代用品のある物に對する需要の如きは伸縮性大きく、反對に生活必需品の如き、又其價格の極めて少額なる物の如きは伸縮性に乏しいとされてゐるが、併し需要伸縮性の絶無といふものはない。一物を欲することが如何に痛切であつても、其價格を支拂ふ能力を持たざる者は之を購ふことが出来ないからである。反之、供給の方面に於ては、供給伸縮力の絶無といふものがある。古名工の作品の如き、或は至奇至珍なる産物、例へばコヒヌア・ダイヤモンドの如きは、如何に價格が騰貴しても其供給を増すことは絶對的に(後例の如き場合は殆ど絶對的に)不可能である。併し爾餘の多數の物に就いて言へば、必ず其價格の騰貴は生産の増加を促すと謂つて好い。たゞ其生産増加に難易がある。即ち供給伸縮性に差等があるのである。何にもせよ、需要供給が單獨に先づ定まり、而して此需要供給に由て次に價格が定まるかの如くに説き、或は需要供給が一致すれば價格は云々、需要が供給を超過すれば(又供給が需要に超過すれば)

價格は云々と、需給が原因で價格が結果であるかの如く説くのは、嚴格にいへば無論當を得てゐない。正しくは價格は需要と供給とを相適合せしむるやうに成立するといふか、需要と供給とは價格に由て均衡するといふか、或は此三者が一定の點に於て均衡點或は安定點を見出すと言ふかすべきものであらう。

既に需要とは或價格に於て需要せらるゝ物の數量を謂ひ、供給とは同じく或價格に於て供給せらるる數量を謂ふとすれば、一方的に需要供給が價格を決定するものと説くのが失當であることは、既にリカアドオの正系たるスチュアート・ミルが指摘してゐる。曰はく、需要は一部分價值に由て定まるものである。併し價值は需要に由て定まるといふ。二の物が互に相定めるといふバラドックスは如何にして解くべきか。答へは平衡(equation)の觀念に由て與へられる。假りに一定時に於ける需要、即ち其時の市場價值を以て敢て購ひせんとする者の數が販賣に提供せられた數量を超過するものとする。買手の例に於ける競争が價格を騰貴せしめる。然らば此騰貴は何處まで行つて止まるか。高低如何を問はず、需要と供給とを相等しからしむる點に於て。餘分の第三者を需要から遮斷し、或は之を供給するに足る丈の追加的販賣者を喚び出す價格に於て、或る價格に於ける供給が需要を超過する場合には

反對に價格が下落する。さうして「需要と供給とが低廉の結果たる需要の増加に依て相等しくされるか、或は供給の一部を撤回することに依て相等しくされるか、兎に角何れの場合に於ても兩者は相等しくされる。」斯くして需要供給間の比の觀念は當らず、又問題に何等の關係を持たぬ。適當なる數學的比論は方程式 (equation) の其である。需要と供給と、需要せられたる數量と供給せられたる數量とは、相等しくされるであらう。若し何れかの瞬間に相等しくなければ、競争は之を相等しからしめる。而してその之を行ふ方法は價值の調節に依る。需要が増進すれば價值は騰貴する。需要が減退すれば價值は下落する。又供給が減れば價值は騰貴し、供給が増加すれば下落する。騰落は需要と供給とが再び相等しくなる迄繼續する。一貨物が或市場に於て賣れる價值は、其市場に於て宛も現存若しく豫想されたる供給を運び去るに足る丈の需要を生ずる所の價值である。」(J. S. Mill, Principles etc. Bk iii ch ii § 3,4)

ミルの系統を履み、他面限界効用論に學んだマアシャルに至つては、需給と價格とは決して一方的因果の關係でなくて、相互依存の關係に立つものと見なければならぬことを一層明確に説いた。彼れが一の比喻を設けて、鉢の中に置かれたA、B及びCなる三個の球が相互に支へ合つて一定の位置を保

つ時には、當さに三個の球は引力の作用の下に互に其位置を定め合ふと言ふべきで、決してAがBの位置を、BがCの位置を定めると言ふべきものでないといつて、需要供給及び價格の關係を之に譬へたことは、既に世人の承知する所であらう。

然るに既に此まで説き來れば、斯る相互依存の理論或は均衡の理論は、たゞ獨り特定物の價格と其需給との關係にのみ求むべきものではない。例へば、一物の價格が騰貴すれば、其購買量の減少するものが常であるといふ。併し影響を蒙るのは該財其者の購買量のみでないことは明である。先づ各消費者の所得額を一定せるものと想定すれば、一物の價格騰貴に依て該物に對する支出金額が増加すれば當然他の諸物に支出せらるべき金額は削減されなければならぬ。果して該物に對する支出金額が増すか否か、或は何の程度まで増すかは、需要伸縮性の如何に由て左右されなければならぬ。故に一物に對する需要は、其物自身の價格上下に由て左右されると共に、他の諸財の價格變動に依ても左右されるのである。然るに右には各消費者の所得額を既定のものとして出發したが、此所得は有價的に收得されるのを本則とする。有價的に收得されるといふことは、例へば勞働給附の價格たる賃銀、資本使用の代償たる利子といふ如く、夫々提供せられた手段に對する價格として收得される。然るに、生産

手段所有者に引續き一定の所得を收得せしむる爲めには、其に依て生産せられた財の價格が生産手段の價格を償はねばならぬ。然らば此等生産手段の價格は如何にして定まるか。茲でも再び需要供給と諸々の價格との多様な相互依存關係を認めなければならぬ。生産手段を直接購買する者は企業家である。企業家は他の企業家又は消費者に賣る爲めに生産する。さうして其の消費者の需要は前記の如く生産手段の價格として收得せられた所得に由て制約される。是は未だ以て需給と價格との多様な相互關係を尋求し盡したのではない。たゞ併し是に依て、既に需給と價格との關係が單純なる一方的關係でないことが會得されたならば、其相互依存關係は單に特定物の價格と其物に限つた需給との間にのみ求めらるべきものでなくて、當然市場に現るゝ一切の經濟的數量相互に及ぼすべきものであることが理解される筈である。而して此等のものが互に相決定し合ふ關係、或は同時決定の關係にあることを認めれば、此に一般的均衡の理論體系が成立しなければならぬ。

一般的均衡の理論は前にワルラス之に手を染め、次いでバレット・ギイザ、シユムペテア其他の研究皆な學者の尊重する所であるが、此理論を一般に普及せしめ、又簡明なる數學式に綜括して其理解を容易からしめることに於ては、近時カッセルの功勞は其の多きに居る。而して彼れが結局到達した

結論に由れば、價格決定要因は大別して主觀的及び客觀的要素の二とされる。其の主觀的要素たるものは享樂財の價格に依て需要量の左右せらるゝことを示す係數であり、客觀的要素を成すものは(イ)生産手段の存在量と(ロ)所謂技術的係數即ち生産物一定單位量に参加する各種生産手段の量、(例へば某物の單位量を造るには勞働幾時間、原料幾許量等々を要すといふ如き)である。従つて或は價格は効用に依つて定まるといひ、或は費用に依て定まるといふ主觀的又は客觀的價格論は、彼れに従へば、何れも偏頗の見たるを免れぬ。而かも價格又は價值は、一方に於ては効用、他方に於ては生産費、此兩者の相俟つて決する所であるといふのは、近年に於ては珍しからぬ通常の見解である。而して生産費といふときには、殊にミル以來、其意味は實質費 (real cost) でなくて、企業家の支出する生産出費 (costs of production) であるのを常とするから、即ち例へば勞働に就いていへば、勞働幾時間といふのでなくて、賃銀幾許 (即ち所要勞働量と賃銀率との積) の支出を要すといふことが企業家の念慮を支配するのであり、而かも賃銀率は勞働の稀少性に由て左右されるから、所謂生産費は結局カッセルの擧げてある客觀的要素と大差なきものに歸着する。又効用と稱するものも、強いて過密の詮索をしなれば、右に謂ふ主觀的要素に略ぼ同じきものなることが認められ得るであらう。即ちカッセルの理論

の如きも、實質的には從來通用の學說と甚だ異なるものではない。たゞ經濟的諸勢力の相互關係を説くに一段の精緻精確を加へ得た功勞の否認すべからざるものがあるのみである。

茲でカッセルが價格は主觀的又は客觀的要因の何れかのみに依て定まるといふは偏頗の見解たるを免れぬといふのは至極の道理であるが、然らば、果して嚴密に主觀又は客觀的要因の何れかのみによつて價值又は價格が定まると主張したものがあつたと言へば、實は無いと答へねばなるまい。リカアドオの説も其本心の底を叩いて見れば、決して効用説と相背馳するものではないし、効用説亦た決してリカアドオ等と相拒否するものと言へないことは、前述の通りである、然らばマルクスの價值論は如何といふに、是に就いては左記の如く特別に考究すべき問題がある。けれども兎に角上來述べ來つた處では、効用説費用説といふものは相調和し得べきものである。其は決して極端を忌む折衷の意味に於て之を相調和せしめんとするのではない。其の嚴密なる吟味に由て、兩者は當然兩立すべき論理的構造を持つことが言はれるのである。

價值論の發達は大體上述の如きものである。而して強ひて政策的又は論争的態度を取らぬ限り、此發達は理論的必要に促された至極當然の發達であつたと言つて好い。マルクスを批評するには面倒で

も是丈の準備を以て出發することが偏見獨斷を豫防する上に尠からざる効用があるのである。

第九節 勞働價值説の至當なる根據 (一)

次に特色あるマルクスの價值論に入る。

マルクスは先づ資本家的生産方法の行はるゝ社會の富は無數の商品集積として現れ、個々の商品は其元素形態として現れるといふ。彼れが究めんと欲する所は、此の商品の價值である。

彼れも商品の價值は商品生産に要せらるゝ人間勞働量に由て定まるといふ者であるが、彼れは單に勞働費用が商品價值を支配するといふ程度に止めずして、人間勞働の凝結としての商品が價值であると言つたり、一財は人間勞働が其に體化する故にのみ價值を持つと言つたり、或は勞働を「價值形成實質」と稱したりした。而して此から出發して餘剩價值理論を立て、利潤地代等、勞働所得以外の所得の本質が勞働の搾取、又は不拂勞働にあることを説明した。先づマルクスの所説其者を吟味する前に勞働が商品價值を定めるといふことが果して容認され得べきや否や。容認されるとすれば、如何なる

條件の下で言へるかを重ねて論究して明にして置きたい。

勞働費用が價值を定めるといふことは果して正しいか否か。それは價值の定義如何にも由ることであるが、姑らく或商品と他の商品とが一定の割合に於て相交換されるのは此兩者が相等しい價值を有つからである、即ち諸商品相互の交換比率——少くも永續的正常的交換比率——を決定するものが即ち價值であると解するならば、勞働費用が生産物の價值を定めるといふ命題は、或條件の下に於ては確かに正しい。其條件とは何かといふと、先づ(一)生産者間に完全なる自由競争の行はるゝものとする(二)生産が直接勞働以外に生産手段を要せぬものとする(三)是を説明する爲めに極めて簡單なる交換經濟を想定する。各生産者は夫々特殊の生産を專掌し、自ら生産勞働の衝に當り、さて生産物を相互に交換するものとする。既述の如く持續的本則的交換は何等かの貨幣なくしては行はれ得ぬから、此處でも貨幣が使用せらるゝものとする。今各生産者は其生産物を賣却し、其價格として收め得た貨幣を以て更に自己の要する諸財貨を購入する。一定期限内に産物と交換に收得せらるゝ貨幣額が各生産者の収益をなす。而して勞働以外の生産手段は姑らく抽象されてゐるから、此収益が直ちに彼れの所得である。而して斯る組織の下に於て各生産者は皆な合理的に

行動するもの、又行動し得るものとする。換言すれば、各人皆な一の目的を達するに最少の費用を以てせんと努力し、而して此努力に對する障害の存せぬことを想定するのである。此事は當然自由競争の想定を意味する。然るに自由競争は二の内容を持つ。

- 一は同業者間の自由競争、詳しくいへば、同一商品を生産供給する者相互間、其を購買する者相互間の自由競争である。別言すれば、最も高き買手に賣る自由、最も廉き賣手から買ふ自由である。
- 二は異産業若しくは異職業間の自由競争、即ち各人が隨意その最も有利とする職業に就くの自由、即ち就職轉職の自由である。有利不利とは、言ふ迄もなく生産物(又は給付勤勞)の價格と費用との關係から見ての有利不利を謂ふ。

斯る想定を設くれば、茲に二の命題を立てることが出来る。

第一は、同一種同一品質の財には一の價格のみが成立すること。

第二は、各生産者は等しき生産的努力に對して均等の所得を收めること、換言すれば収益と費用との比例が均一となること、即ち是である。

同種同質の財に就いて何故に單一の價格が成立するかは容易く説明出来る。若し同種同質の財に就

いて二以上の價格が成立する時は、買手は安い價格を定めた賣手の前に殺到して其價格を競り上げ、賣手も同様に敢て高い價格を支拂はふといふ買手の前に殺到して其價格を競り下げ、此の競り上げ競り下げの作用は、二以上の價格が相接近して同一に歸する迄は止まぬ筈だからである。ジェブンスは之を「無差別の法則」(Law of indifference)と命名したが、或は「一物一價の法則」と稱しても好い。此法則がなかつたならば一物の價格幾許といふ事は言はれない。例へば靴一足にしても、Aが支拂ふといふ價格とB、C、D等が支拂ふことといふ價格が一々違ふ様に、賣手買手の各人に就いて、又賣買せらるゝ財の各單位に就いて一々異なる價格があることになり、一市場に於ける一物の價格幾許といふこと、又延いて一物の價值幾許といふことが言はれなくなる。其を言ひ得るのは、同種同質の財は賣買當事者の各人に依て個別的には様々に評價せらるゝに拘らず、同業者の競争の爲め皆な單一の價格を以て賣買されるからである。

然らば此の單一の價格は何の高さに定まるか。此問題に於て上記第二の自由競争が重要な意義を發揮する。

一財の價格は第一次には所謂供給需要の關係で定まる。嚴格にいへば、其時の供給量と需要量とを相

一致せしむる點で定まる。前段ミルの紹介中に述べたやうに、例へばxといふ價格で需要されるA財の數量と同じ價格で供給される數量とが一致しないで、前者が後者を超過すれば、價格はx以上に騰貴し、斯くして需要量の制限せらるゝことに依り、兩者の相一致するに至つて騰貴は已む。需要量が供給量に及ばぬ場合には當然反對の作用が行はれる。無論一財の供給及び需要量は單に該財自身のみならず、他の諸財の價格とも相關々係を持つことは、上方カッセルの條下に説明した通りであるが、併し今の場合姑らく便宜上簡單に一財の價格と其需給との關係のみを取り扱つても差支は起らない。

兎に角一物の價格は其需給を相等しからしむる點に於て安定する。併し此安定は第一次の安定又は均衡に過ぎない。供給量の絶對的に限定されてある財貨に就いては勿論是以上の事は言へないが、生産を増減し得るものであると、其價格は生産に要する費用と均一の比例を保つことに依て一段高次の安定又は均衡に達するのである。前記の如く、生産物の價格は生産者の所得を形成する。其故諸財の價格(時の需給關係に由て定まつた價格)が夫々其の生産者に其生産上の犠牲に比例した所得を齎すものであれば問題はないが、若し此點に損得があれば、斯る價格は存続することが出来ない。即ち一旦成立した價格に依て比較的不利益の地位に置かれた者は、その合理的に行動する限り、其生産を已めて他

のより有利なる職業に移るものとしなければならぬ。假りに何人も同じ容易さを以て如何なる生産業をも自由に選擇し得るものとし、而して若し十時間を費して製作したA財が他人が同じ十時間の労働を以て生産したB財よりも其價格が低廉であつたならば、彼れは無論A財の生産を止めてB産業に移るに違ひない(此場合使用する道具や機械の事は後に譲つて姑らく無視する)。其處で斯る轉職者が現れれば、一方の(此人の舊業の)生産額は減少して他方(新業)の生産額は増加する。當然供給減少に由る價格の騰貴、供給増加に由る其下落が起る。此騰貴下落は然らば何の點で止むかといへば、生産者が其生産物に投ずる費用と生産物の價格との割合が均一となる點である。即ち十時間の労働の所産は皆な同じ價格を以て賣買せられ、十時間の所産は二十時間の所産、五十時間の所産の二分一又は五分一の價格を以て賣買される點である。

諸財が斯る價格で賣買される場合には、其自體の内からは變動は起らない。無論需要が變化したとか、或は技術的理由に由て生産の費用が増減した場合は格別であるが、價格其者の中には其自身の變動原因は含まれてゐないのである。反之、一時的需給の關係上、生産の費用と比例せぬ價格が成立した場合(費用少なきものが高く賣れ、費用多きものが安く賣れる場合)には斯る價格其自身が自動的

に或財の生産増加、他の財の生産縮小を促して價格を變動せしめ、以て價格と生産費用との比例を均等ならしめねば已まないものである。學者或は此の安定の價格を稱して靜態價格(statischer Preis)と稱する者がある。即ち生産者中の何人にも生産の縮小又は擴張を促すことなき價格の謂である。リカードオ其他其の學者が自然價格と稱し、又或は正常價格(normal price)と稱するものも亦た是れである。即ち彼等が一物の市場價格は其時其市場に於ける需給の關係で定まるが、それは常に其自然價格に歸着せんとして其周圍に旋廻するといつた理由は、市價が自然價格以上に上れば自ら生産の増加が促され、自然價格以下に下れば生産縮小が促されると見るからである。市場價格が自然價格に一致すれば、外部からの原因が作用すれば格別、其自體としては變動を起すことがない。即ち前に價格は生産の費用と比例を保つことに依て一段高次の安定に達すると謂つた所以である。

併し記憶しなければならぬ。上述の如き價格が生産の費用に依て高次の安定を得るといふことは、全く上記第二の自由競争を條件として始めて言ひ得ることである。若し此の異産業間の競争がなかつたならば、價格と生産費との關係に就いて吾々は全く何事をも言ふことが出来ぬ。假りに需給の關係上一財Aの價格が其生産の費用と比例を失した遙に高い點に定まつたとする。(一財に對する需要の増

減は其供給量を顧慮してはゐないから、一時的には生産費と無關係に如何なる高價格も如何なる低價格も成立し得るのである。當然該財の生産者は他の生産者に比較して格別の利益を收めるであらう。併し乍らAの生産者等が法規に依て保護せらるゝか、(例へば專賣特許の場合の如く)或は相互の約定規約に依て獨占を設定するか、或はA財の生産には特殊の技術、能力又は祕密がある爲め常人が其生産に参加し得ないといふ場合には、需給に由て成立した價格が生産費用との比較に於て如何に格外に高くとも、その高い價格は、需要が減退せぬ限りは何時迄も高い處に留まり、其生産者は引續き破格の高利益を收めるであらう。技藝の名人が通常の労働者に比較して莫大の報酬を收める場合の如きも是に該當する。某々歌手の聲が如何に美しくても若し何人も自由に彼又は彼女の如く美しく歌ひ得るならば、彼等は決して特に高額の報酬を以て聘せらるゝことはない。人が某々の謳歌を聽いて喜ぶのは、無論其歌聲が美しいからである。併し人が其爲めに高額の報酬を支拂ふことを辭せぬのは、單に美聲の爲めではない。美聲の人が少いからである。

生産物の價格は産業間に自由競争の行はるゝを俟つて始めて生産費用の支配を受けること前述の通りである。然らば其の生産の費用なるものは何であるか。茲で前記第二の條件が問題となる。

此處に姑らく一切の財は直接労働のみに依て生産せられ、過去の労働の成果が手段として使用せらるゝことがないものとする。斯る假定と現實の事實との間に何程の距離があるかは別に論ずる。兎に角此假定を設けると、一財の生産費は其生産に要せられた労働量のみを以て成る。生産者は労働以外何等の犠牲を生産の爲めに拂つてゐないのである。

斯る假定の下に於ては、一財の價格従つて價值は、確に其に投入せらるゝ労働量のみによつて決せられ、其労働費用を相等しくするものは皆な同じ價格で賣買されるといふことが出来る。何となれば、労働費用を同じうする諸財が違つた價格で賣買されたならば、生産者が收得する報酬は、拂はれた犠牲に對して其率を異にする譯であるから、轉職の自由の存する限り、彼等は必ず比較的不利なる財の生産から有利なる生産に移らねば已まぬであらう。一般に生産物間の交換比率が労働費用に由て定められるといふのは此理由に由て説明せられ、又此理由に由てのみ説明せられ得る。そこで生産者の労働費用と生産價格とが比例し得た状態といふのは、即ち各生産者の労働と其に對する報酬との割合が均一となつた状態である。即ち労働價值説は報酬率平均、又は生産收益率平均を俟つて始めて成立するといふ謂はなければならぬ。

斯る状態の下では、確かに労働費用が價值又は價格を決定すると言つて好い。又労働費用が時々市場價格の歸向中心を成すとも言つて好い。併し斯く言ひ得るのは必ず産業間の自由競争（同業者間の自由競争は無論の事）を前提しての事である。若し此競争に障害があれば、労働費用と價格との一致（比例の均一）は偶然の場合以外には實現せられないことは再三説明した通りである。例へば一財に對する需要増進の爲め其價格が其労働費用と比例を失する處迄騰貴しても、何等かの障害ある爲め他の方面からの生産者の流入、即ち労働の流入が起らなければ、價格は何時迄も労働費用から離れた儘で居なければならぬのである。

上述の如き假定の下に於ては、確かに上述の意味に於て労働が價值を定めると言つて好い。併し即了してはならぬ。労働が價格を定めるといふ事は、直ちに労働が價值を造り出すといふ事ではない。労働は——無論その精神的たると肉體的たると、指揮的たると執行的たるとを問はず——自然と協力して技術的に有用物を造る。故に労働が財を造る。或は生産物を造ると言ひ得るのは當然である。併し乍ら其の造り出された生産物が果して幾許の價值を有するか、即ち幾許の割合で他の生産物と交換されるかは、需給の關係に由て定まるのであつて、同一量の労働を費した生産物が常に同じ價格で賣れる

とは無論言はれない。同じ労働費用をかけた生産物でも、其財のみを益々生産すれば、労働費用の同一なるに拘らず、生産物の價值は供給増加の爲めに當然下落するであらう。たゞ労働は一方に於て財を造り出すと共に、他方に於て生産上に忍ばるゝ犠牲であるから、競争が自由で各人が合理的に行動する限り、収益と犠牲との割合が不平均なる状態は其儘では靜止せぬ。而して其平均作用に由て供給の増減が起り、労働費用以上の價格は自動的に下落し、其以下の價格は自動的に上進するのである。價格を費用に歸向せしむるものは常に供給の増減である。故に生産物は其労働費用の幾許なるを問はず、差し當りは常に需給に由て定まるだけの價值しか持ち得ない。たゞ其の供給は、自由競争の爲め、生産者の収益率を平均せしめるやうな方向に動く。之を要するに、生産物の價格は需給に由て定まるが、労働費用と比例せぬ價格を成立せしめるやうな需給關係は其自體の中に變動の原因を藏して居つて永續しないと言ふに過ぎないのである。

財の交換關係を説明するものとしての労働價值説が若し成立し得るとすれば、其は上記の如き意味に於て成立する。其以外には成立の途がない。（労働費用相等しきものが相交換されるのが至當であるといふ、理想的労働價值説の成否は別問題である）。

自由競争の條件を撤去すれば勞働價值説が成立し得ないことは明白になつたと思ふ。然らば生産上に勞働以外の生産手段が用ゐられぬといふ假定を撤去したならば何うなるか。

第十節 勞働價值説の至當なる根據(二)

生産に生産手段を用ゐると用ゐないとの差別は何處に存するか。生産手段を使用しない場合には、生産者はたゞ勞働のみを支出する。生産手段を用ゐる場合には、彼れは先づ生産手段其者を自ら生産するか、或は之を購入し、其を用ゐて其の本來の目的たる生産を營む。自ら生産手段を造る場合には、先づ生産手段の生産に勞働を投じ、次いで本來の目的たる生産に勞働を投ずる。此の間接直接に投せられた二様の勞働は、生産物の價格に由て酬ひられるのである。生産手段を購入する場合には、先づ其價格丈の金額を調達しなければならぬ。之を調達する法は、該生産者の所得の一部即ち彼れが收得した生産物價格の一部を享樂用に充てずに留保して置いて、此金額に達せしめるか、或は他人から之を借入れるのである。併し借入れる場合には、貸附ける者が豫め此丈の金額を消費から留保して

なければならぬ。さて生産手段は消耗されて生産物に轉形する。但し此消耗には遲速があり、原料の如きは速に化して生産物となるが、機械道具建物等に至つては、其消耗に數年十數年或は數十年又は其以上を要することもある。今此等生産手段に投せられた勞働は、生産手段が消耗されて全部生産物に轉形したり、而して其が賣却せらるゝを俟つて始めて其の全部の報酬を受ける。従つて此に投せられた勞働は、十數年或は數十年の後に至つて始めて完全に賠償されるのである。生産手段を自ら造らず、之を他人から購入した場合も、其道理に變りはない。即ち其購入に投せられた金額は、該生産手段が全部生産物に轉形し、而して其生産物の賣却せられた曉に、始めて完全に賠償されるのである。生産手段を用ゐてする生産といふものゝ本質に就いて、吾々は先づ是丈の事を會得して置く必要がある。

さて生産手段使用の價格形成に及ぼす影響を理解するには、生産手段を使用する産業と、從來通り全然生産手段を用ゐない産業との存する場合を假想するのが便宜である。

此場合には、生産物の價格は無論差當り需給關係に由て定まる。併し此價格は究局何の處に安定點を見出すか。無論各生産業者の收益率の平均を得るところである。然らば、如何なる價格に於て各産

業の収益率は平均し得るか。

曩に假想せられたる場合に於ては、貨物の價格が其勞働費用に比例すれば、各生産者の収益率は平均するといふのであつた。併し今度の場合に於ては左様でない。何となれば、生産手段を要する産業にあつては、生産者は勞働費用の外更に一の犠牲を負擔しなければならぬからである。是を極く簡略に説明する爲め、茲にA B二産業があつて、Aは何等の生産手段を要せず、Bは高價なる原料又は耐久的工具を要するものとする。若し生産物の價格がその勞働費用に比例するならば、何人もBを避けてAに就くのが當然であらう。蓋し原料道具を備へるには、之を購入する資力を持たねばならぬ。其資力は、消費を節して其所得から剩されなければならぬ。此の享樂の一次的放棄は、通則として人の喜ばぬ事たるのみならず、又場合に由ては、例へば家族員多數なるが爲め當面の生活に餘裕がない者等にあつては、此の「一次的放棄」は實行し得られないことがある。而して生産手段が使用久しきに耐へるものである場合には、之に投入した金額は長年月を経た後に始めて全部回收される。そこで若しも同額の利益を收めるとすれば、何人も生産手段を要せぬ産業に集まつて其生産物の供給を比較的多からしめ、生産手段を要するものにあつては、人々は成るべく之を避けて其生産物の供給を比較的缺乏

せしめるといふ結果にならざるを得ない。即ち生産手段を要する生産物は、然らざるものに比して、稀少性が高いのである。随つて生産手段を要する生産物の價格は、同じ勞働費用を要し、併し乍ら生産手段は用ゐない生産物よりも、若干高い所に留まらざるを得ぬ。さうすると勞働費用を同じうする二貨物の一方の價格が他方よりも高いといふのであるから、此差額は之を勞働費用以外の何者かに歸せねばならぬ。

右には生産手段を購入する場合を取つて説明したが、生産者自ら其生産手段を造る場合に於ても其理は正しく同一である。即ち此場合には、生産者は先づ生産手段に勞働を投じ、次に此生産手段を用ゐて生産を営み、生産手段が悉く生産物と化し、而して其生産物が賣却せられた曉に始めて其勞働に對する全部の報償を收めるのである。そこで斯く勞働を投じてから其報償を收める迄待つことを欲しないか、或は待ち得ない事情の下にある者は、斯る生産を避けて、其勞働に對してより夙く報酬の與へられる産業を選擇しなければならぬ。そこで前述の場合と同じく生産手段を必要とする生産物は、然らざるものに比して、比較的に拂底を告げなければならぬ。従つて其價格は比較的高い處に留まらねばならぬ。それが何の程度迄高い處に留まるかは、生産手段を要する生産物と然らざるものとの相

對的稀少性如何に由るものであるが、此の稀少性の如何は、勞働を投じてから其報償を收め、迄待つことをば人が何れ丈け厭避するかに由て定まる。之を厭避することが甚しければ、生産手段を要するものと然らざるもの（同じ勞働費用を要するものとして）との價格の開きは大きく、待つと待たざるとが全然意に介せられぬこと若し之ありとすれば、其場合には兩者の價格は一致すべき筈である。

此處に「待つ」といふ言葉を用ゐたが、生産手段を要する生産と要せざる生産との差異は、畢竟待つことを要すると否との差異に歸着する。生産手段を生産者自ら造る場合は直ぐ右に述べた通りであるが、生産手段を購入する場合と雖も其理は同一である。即ち此場合には、之を購入すべき資力を準備しなければならぬ。準備するといふは、畢竟消費を差控へて貯蓄をする、即ち享樂を延期するといふことに依て行はれるのである。曩に述べた生産手段を用ゐざる生産にあつては、生産物にたゞ勞働のみが投入される。生産手段を用ゐるものにあつては、勞働が投入せられ、更に其以外に「待つ」ことが要せられる。生産手段が持続的のものであつて、長年月の使用に耐へれば耐へる程待つことを要することは多くなる。そこで、若しも同じ勞働費用を要する生産物が異なる價格で賣れたならば、廉い方の貨物の供給は相對的に減少し、高い方の貨物が相對的に増加することは、再三述べた通りであ

る。今同じ勞働費用を要するも、一方は勞働費用の外更に待つことを要する生産物が同一價格を以て賣れたならば、待つことを要する方の生産物供給は、必ず相對的に減少して其價格に差異を生ぜざるを得ぬ。此差額は勞働費用の差異に由て生じたものではないから、之を「待つ」ことの有無に歸せねばならぬ。即ちこれが「待つ」ことに對する報酬を構成する。茲に資本利子、若しくは舊來の用語にいふ資本利潤の成立すべき根據がある。

唯注意すべきは、此の「待つ」ことに何等の倫理的意味を含ませてはならぬことである。「待つ」ことが道徳上嘉賞すべき行爲であると否とは、經濟理論の關知する所でない。又利子が待つことに對する報酬だといふことは、此報酬を支拂ふことが道徳上正當だといふ意味ではない。たゞ交換經濟組織の下に於ては、利子を支拂はなければ、時の市場で必要とする丈けの「待つこと」が得られない。別言すれば、其生産上勞働費用の外に更に「待つ」ことを要する生産物は、比較的に拂底するから、之を要せぬものよりも高價となるといふに過ぎないのである。高價となることが至當だとも不當だとも謂ふのでない。たゞ此の比較的高價を拂はなければ斯る貨物は得られない。若しくは斯る貨物は比較的に缺乏するから高價が支拂はれるといふに過ぎないのである。それは宛も生産手段を無視した前段

の假想に於て、例へば、勞働十時間の産物と十五時間の産物とは一・五對一の割合で交換されるといふのと同様である。此割合で交換されるのが至當だといふのではない。此場合の兩財が若し同一價格が賣買されたならば、一方の供給は必ず相對的に缺乏して其價格を右の割合まで騰貴せしめねば已まぬと謂ふのである。それと同じく、同じ勞働費用を以て生産さるゝ二貨物の一方は勞働費用の外更に「待つ」といふ附加的犠牲を拂はなければならぬ場合に、若し兩貨物共に同じ價格で賣買されたならば、附加的犠牲を要せぬ方は必ず生産額が増加して其價格を下落せしめなければ已まぬであらう。

此點に於てリカアドオ以來度々引用せられた植林若しくは葡萄酒保藏の例は、吾々の理解を進めることに役立つと思ふ。リカアドオは、單純な勞働價值説を固持するマツカロツクの反省を促す爲めに此例を引いたのである。葡萄酒が醸造後三五年若しくは十年窖中に貯藏せらるゝことに依て其價格を増して高く賣れることは、勞働費用に依ては説明せられぬ。即ち新釀の葡萄酒と幾年か貯藏せられたものとを比較すれば、醸造の勞働費用は同一であるのに、(保存に費用を要するならば其を控除する)古き葡萄酒の方が其價が高いのは何故であるか。これは醸造後直ちに飲用するか、又は賣却することをしないで、幾年かを「待つ」といふ附加的犠牲がある爲めに、古酒の方が需要との關係に於て比較的

缺乏するといふこと以外には其説明を見出すことが出来ない。

或は言ふであらう。貯藏せられた葡萄酒は新酒よりも芳醇であるから其價が高いのであると。勿論古酒の醇美なることは否定しない。併し味好きものは必しも高價ではない。假令古酒は如何に芳醇であつても、古酒も新酒と同じく豊富潤澤に供給せられたならば、よし其味ひは同じからずとも其價格は彼れよりも高い處には留まり得ない筈である。芳醇なることは、無論之に對する需要を喚起する。併し若し之に對する需要の大なるに比例して、新酒醸造以上に特別の困難なく其供給を増し得るのであつたならば、其價格は永續的には新酒以上に上り得ぬ筈である。イクラは味よき前菜である。併しそれが高價であるのは、獨り其味よきことにのみ因るものではない。イクラは正しく同じイクラであつても、若しそれが鮭の卵か或は鱈の卵の如く豊富に獲得せられたならば、決して其高價を維持することは出来ぬであらう。鮎は高價で鱈は低廉である。併し若し正しく今と同じ味ひを持つ鮎が、銚子の濱で地引網で漁獲せられることにでもなつたならば、鮎と鱈との價格の差は決して現在の如くではあり得ないであらう。古き葡萄酒の場合も亦たこれに等しい。古酒が高いのは、其供給が比較的拂底する爲めである。新酒の供給が常に古酒に比してより潤澤であるからである。而して拂底と潤澤

との此差異は酒を市場へ出す迄に「待つ」ことを要すると否と、或は多く「待つ」ことを要すると否とに由て起る。古酒により、高き價格を支拂ふことが正當であるか否かは經濟理論の間ふ所ではない。たゞ經濟理論は説明する。労働費用以外更に「待つ」といふ犠牲を要する生産は、他の條件にして變らざる限り、人が之を避ける。従つて其生産物は比較的に拂底する。比較的に拂底するものゝ價格は比較的に高い。たゞ是丈の事である。

同じことは植林に就いても言へる。耐久的な家屋や機械や道具の使用に就いても言へる。何れの場合にも「待つ」といふ要素が價格の労働費用に比例することを妨げるのである。

以上私は、生産が生産手段を用ゐて行はれる場合とそれなしで行はれる場合とを比較し、生産手段を用ゐる場合には、生産上「待つ」といふ一要素が加はる爲め、其生産物が比較的拂底し、従つて其價格が高くなることを説明した。即ち既記兩様の自由競争の行はるゝ處では、労働費用のみの要せらるゝ生産物同志は其費用に比例する價格に安定し、生産手段を用ゐる、即ち「待つ」ことを要する産業の生産物は此比例以上の價格に安定する。而して斯る價格の成立することに依て生産當事者の犠牲と収益とが平均し得るのである。

さて右に私は、生産手段を用ゐぬ生産はたゞ労働のみを要して待つことを要せぬものとして説いた。併し嚴密にいへば、假令生産手段を用ゐずとも、一生産物の完成は若干の時を要するのを常とするから、労働を投下してから生産物の價格に於て其報酬を收める迄には、多少「待つ」ことを要するであらう。労働してから其報酬を受ける迄に全く待つを要せぬと見て好いのは、労働を自ら生産に投じないで、たゞ労働の儘で之を賃銀に對して他人に賣却する場合である。此場合の労働給付の價格即ち賃銀は、純然たる労働のみに對する報酬と見るべきものである。さうすると労働の賃銀は必ず其労働に依て生産せられた貨物の價格よりも低いといふことが分る。何となれば、労働其者は必ず其生産物よりも其稀少性が低いからである。固より茲に稀少といふは、需要に對しての稀少を謂ふ。例へば、織り上げられた羅紗は、毛織物職人の労働其者よりも直ぐに役に立つ。反面毛織物職人に取つては、羅紗を織上げて市場に給するよりも、直ちに毛織物業者に對して其労働を賣却する方が容易い。兎に角労働其者を労働の儘で賣却せんとする者よりも織り上げた羅紗を供給し得るものゝ方が少ない。此意味に於て生産物は常に此生産に参加する労働其者よりも比較的に稀少である。労働其者は、市場に於て常に其生産物よりも比較的過剰である。故に姑らく地代の要素を抽象すれば、生産物

の價格から賃銀を控除した跡には若干の餘利が残る。それが即ち生産物を労働其物よりも比較的拂底せしむる所の要素、即ち「待つ」ことに對する報酬、即ち利子若しくは資本利潤である。若し敢て「待つ」者が多ければ、生産者の比較的拂底性は緩和せられ、賃銀と生産物の價格とはそれだけ相近づくのである。

此に於て結論が下される。曰く、自由競争を想定しなければ労働價值説は當初から成立しない。併し生産上に生産手段の使用せらるゝ程度に異同がある處で自由競争を想定すれば、生産物は其労働費用に比較した割合で相交換されることを妨げられなければならぬと。

第十一節 マルクスの價值價格理論大要

マルクスの價值論とは如何なるものか。其大要を記せば左の如きものである。

マルクスは資本論第一巻を「資本家的生産方法が行はるゝ社會の富は『莫大なる商品の集積』として現れ、個々の商品は其元素形態として現れる。故に我々の研究は商品の分析を以て始まる」といふ

文句を以て起してゐる。然らば商品とは何か。商品とは人間労働の生産物であるが、併し自己の欲望を充たす爲めでなく、他人に賣る爲めに生産せられたものである。當然商品なるものは互に相交換される。マルクスは相交換せらるゝ商品には、例へばA商品とB商品とが一定の割合 $\frac{a}{b}$ で互に交換されるとすれば $\frac{a}{b}$ と $\frac{b}{a}$ とは、共通なる或物の等量が含まれてゐなければならぬ筈だといふ思想に出發し、此の共通なるものが價值で、而して其價值は生産上に費された労働に依てのみ定められる。労働は「價值形成實質」であるとの論結に進んだ。但し一商品の價值を定める労働量とは實際は特定の個人が費す労働量でなくて、該商品を生産する爲め「社會的に必要なる労働時間」即ち一財を生産する爲め現在普通の生産條件と労働の熟練及び強度の社會的平均程度を以てして必要なる労働時間である。

此の價值の理論を一商品たる労働力の價值に適用すると餘剩價值論が立てられる。即ち労働力の價值は労働力を生産するに社會的に必要なる労働時間に依て定められる。と言ふ事は、労働者及び家族の生活維持に必要な物品の價值に由て定められるといふことである。然るに、資本家に雇はれた労働者が其の生活必需品の再生産に必要な程度を超えて労働させられると、茲に消費せられた衣食住用品

及び消耗せられた生産手段の補償以上に價值が造り出される。是が餘剩價值(m)であつて、資本家の放下資本に對する利潤となるものである(餘剩價值は又分れて利子地代ともなるのであるが、複雑に互るから、マルクスもしたやうに、差し當り利潤丈けを問題とする)。

然るに、此の餘剩價值は一に活きた労働のみから生ずるもので、既に生産手段に體現された労働は、たゞ其の生産上に消耗せられた丈けが其儘生産物の價值に移されるに過ぎぬといふところから、マルクスは資本中の労働力に變形せらるゝ(即ち賃銀として労働力の購買の用に充てらるゝ)部分を可變資本部分又は可變資本(v)と稱し、之に對して原料道具機械等の物的生産手段に變形せらるゝ部分を不變資本(c)と稱してゐる。而し新たに生じた餘剩價值額の可變資本に對する比例($\frac{v}{c+v}$)が所謂餘剩價值率、その資本全額に對する比例($\frac{v}{c+v}$)が利潤率である。然るにその全資本額中に於て可變資本と不變資本との占める割合は、技術上の關係から、一定量の労働に對して建物、機械、道具、原料を要する程度の一ならざる爲め、生産部門に由て一々相違がある筈である。此の技術上の理由に基づいて決定せらるゝ資本の不變部分の價值と可變部分の價值との組合せを稱して資本の有機組成といふ。

資本の有機組成が斯く均一でないとすると、茲に一の問題が起る。それは若し一切の商品が其價值通り、即ち労働費用通りに相交換されるものとする、而して餘剩價值率は均一なるものとするれば、利潤率は生産部門に由て一々異なり、可變資本が多きを占めてゐる産業で高く、然らざる處に於て低くなければならぬ筈である。然るに現實に於て吾々は決して斯る事實を認めることが出来ないのみならず、マルクス自身も利潤率の平均することを認めてゐる。これは相交換せらるゝ商品間に共通なる等量のもが價值であるとする立場に立つては解き難い難問である。然るにマルクスは其労働價值法則を放棄せずして利潤率の平均を説明するといふ。其説明は如何なるものかといふに、利潤率に異同があれば、比較的利潤率の低い生産部門からは資本が流出し、その比較的の高い部門へは資本が流入して、一方の生産額を減じて他方の生産額を増加せしめ、従つて一方の價格を騰貴、他方の價格を下落せしめて、利潤率が平均するに至つて、始めて其流動は已むといふのである。けれども此場合、生産せられた商品が最早其労働費用に従つて賣買されないことは明であつて、或者即ち平均以上の可變資本を以て生産せられた商品は其價值以下、反對に、平均以下の可變資本を以て生産せられたものは、其價值以上の價格を以て賣買されなければならぬ。此價格を生産價格といふ。

然らば此の生産價格なるものは、何れの高さに定まるか。又當然其中に含まるる平均利潤は資本に對して如何なる割合を占めるものであるか。マルクスに由れば、平均利潤率は社會全體の總資本額に對する餘剩價值總額の比率に由て定まる。斯くして定まつた比率を夫々の放下資本に乗じたものが、各産業部門の資本家が收得すべき利潤であり、一商品の費用價格に此の平均利潤を加へたものが前記の生産價格である。費用價格とは可變資本（賃銀）と生産上に消耗せられた不變資本との和である。これをマルクスは表にして説明してゐる。左記第一表は各生産部門に使用せらるる總資本額の同一なるに拘らず、其有機的組成に大小ある爲め「搾取」せらるる餘剩價值額が一々異なり、従つて利潤率の一々異なることを示し、第二表は平均利潤率が幾許であるか、各資本家に平均利潤を收得せしむるには生産物を幾許の價格を以て賣買すれば好いか。此の各商品の生産價格と其價值との間には何丈の差違があるかを示してゐる。

表一第

資本	費用價格	商品價值	消耗不變資本	利潤率	餘剩價值	餘剩價值率
I 80c + 20v	70	90	50	20%	20	100%
II 70c + 30v	81	111	51	30%	30	100%
III 60c + 40v	91	131	51	40%	40	100%
IV 85c + 15v	55	70	40	15%	15	100%
V 95c + 5v	15	20	10	5%	5	100%

表二第

資本	價值價格の差	利潤率	商品價格	費用價格	商品價值	消耗不變資本	餘剩價值
I 80c + 20v	+ 2	22%	92	70	90	50	20
II 70c + 30v	- 8	22%	103	81	111	51	30
III 60c + 40v	- 18	22%	113	91	131	51	40
IV 85c + 15v	+ 7	22%	77	55	70	40	15
V 95c + 5v	+ 17	22%	37	15	20	10	5

即ち此表に見える通り、各商品の生産價格は或者は其價值以上に上り(2+7+17)或者は其價值以下に下る(18-18)が其正負を通算すれば宛も零となつて、價值の總額と價格の總額とは一致する。

併し斯く諸商品が其の價值から離れた價格で賣れることは、決して一時的偶發的の現象でなくて、資本の有機的組成に異同があり、而して利潤率の平均する所では必然的永續的に起らなければならぬ約束の事實である。若しも商品の市場價格が其生産價格から離隔すれば、必ず反動が起つて、生産の増加又は減少が促され、生産價格と一致する市場價格を成立せしめなければ已まないものである。

マルクス價值論價格論の大要は上述の如きものである。是が果して價值論價格論として承認し得らるゝか否かと吾々の問題である。

前に繰り返して述べたやうに、労働費用が供給の調節を通じて生産物の交換比率を左右する、極めて重要な一因素であるといふ丈けならば、敢てマルクスを待つ迄もない。重なる經濟學者は殆ど誰れも之を否定してはゐないのである。マルクス價值論の特色は、商品の價值は一に労働費用に由てのみ定まる。否、人間労働の凝結即ち價值であるとなす所に存するのである。然らば此命題に對して如何なる批評を加へ得べきかといふに、労働を價值形成實質となし、或は労働の凝結即ち價值とすること、無論甚しい誇張であつて、吾々の所見に於ては、労働費用はその資本家の賃銀支出額を定める限りに於て企業家の生産出費 (expenses of production) 中の重要項目を構成し、生産出費の構成に参加

する限りに於て生産物の供給額を左右し、是を通じて商品對商品の交換比率を動かす點に於て労働は商品の價值を與かり決定すると言ふことが出来る。マルクスの價值法則は此の右述の埒内に止まる限りに於ては至當であり、其埒外に逸出する點は悉く有意無意の誇張に外ならぬ。マルクス自身が果して何故に斯る誇張に陥つたか、又マルクスを奉ずる者が何故に知りて若しくは識らずに此誇張を祖述するか。其動機を論ずることは多くは臆測の範圍を脱することが出来ない。吾々はたゞ著述の面に現れた限りに於てマルクス價值論の論理的根據を吟味することに満足しなければならぬ。

第十二節 マルクス價值法則の根據

マルクスの價值論を批評する場合に、差し當つての困難は、彼れの價值の定義が明確でないことである。

價值は人間労働に依て形成されるといふ。併しその形成せらるゝ價值なるものは果して何であるか。マルクスは此點に就いて明確に價值の本質を説いてゐないのである。併し最も尋常に解釋すれ

ば、マルクスは一定量對一定量の割合に於ける商品の交換といふ表面の現象から進入して、其奥に潜んで此の一定率に於ける交換を惹き起こさしめた或物を把握せんとして價値の概念に到達したと見るべきであらう。斯く解釋すれば、價値とは商品の交換價値又は交換關係に示さるゝ共通なる或物である。併し乍ら若しも斯く解釋して差支なきものとすれば、即ち或商品と他の商品とが一定の割合を以て相交換せらるゝ事實其者が、直ちに兩者に共通なる或物の存在を論證せしめ、又其の或物は必ず労働でなければならぬとすれば、苟も相交換せらるゝ商品は——少なくとも偶發的でなく、常則的持續的に相交換せらるゝ商品は——必ず相等しき價値を有し、等しき労働量を含むるものとしなければならぬ。併し斯く解釋せられた價値法則は、必ず後の生産價格法則と牴觸する。何となれば、上記の通り生産價格法則は、相交換せらるゝ商品は本則として相等しき價値を持たぬと教へるからである。

此理由、又其他の理由から、往々マルクスの價値概念を商品交換と引離して解釋せんとする者がある。

併し斯く解釋する其結果は何であらうか。マルクスは謂ふ。一財は労働が其に體化せらるゝ故にのみ價値を有すると。若し價値なるものを、前記の如く、交換關係に現るゝ共通物と解し、一定量の

労働と其の二倍の労働の體化せられた財とは、二對一の割合で相交換されると謂ふならば、此命題は兎に角有意義である。併し、價値を交換と無關係なるものと定義すると、其は全然無意義なる同語反覆に歸着する。例へば一財は労働が其に體化せらるゝ故にのみ價値を有すといひ、而して價値とは何ぞやといふ問に對して、價値とは人間労働の凝結であると答へるならば、其は結局、一財は其に労働が費されたる故にのみ労働の凝結を有つといふに外ならぬ。是は労働生産物には労働が費されてある。労働生産物は労働生産物であるといふに歸着する。

此點を措くとしても、價値概念を交換と結び付けずに定義すると、幸ひに生産價格説との牴觸は免れ得るとしても、商品の價格を價値に由て、即ち其労働費用に由て説明するといふ、肝腎のマルクスの目的が達せられなくなる。故に價値概念を單純な思考の擬制たるに止めないで、現實世界の交換現象を説明し得るものたらしめんが爲めには、必ず一物に云々の價値ありといふことは單に其物が云々の労働を含むといふだけでなく、此の一定の労働の所産たることが此商品をして交換上他の商品に對して或資格を持たしめることを意味するものとしなければなるまい。所詮價値概念を交換と關係なくたゞ人間労働の凝結其者を意味するに過ぎずと解することは、たゞ生産價格説との牴觸をたゞ一步延

ものであるか否か。

(イ)の疑問に對しては、共通なるものは勞働以外にもある。使用價值若しくは効用が其であると多數の者は考へる。否な事ろ効用の方が却て眞に交換關係に示さるゝ共通物だと言ひ易からう。此場合にマルクス及びマルクシストの是に對する答辯は大體一定してゐる。使用價值は商品に由て一々質的に異なるから、此に「共通」を求めることは出來ぬ。又同じ理由に由て、使用價值は相互を量的に比較することが不可能だといふのである。併し是はマルクス等が解する使用價值は相互比較することを許さないかも知れぬといふ丈けの事であつて、相交換せらるゝ商品(或は更に廣く財)に共通なものとして効用があると言ふことを少しも妨げ得るものではない。マルクスが使用價值と稱するものは、人間の欲望を充たす能性又は此能性を有する物の謂ひであるが、此場合彼れは單に人間欲望を満たす能性を考へないで、常に特定欲望を特定方法で充たす能性を考へてゐる。例へば、食物も上衣も住宅も、ダイヤモンドも書籍も皆な人間の欲望を充たす物であるとは考へないで、食物は飢餓を救ひ、上衣は寒暑を防ぎ、住宅は雨露を凌ぐ力なく、又家屋は食欲を充たすことは出來ぬから、食物と家屋とは比較する。其故に食物には雨露を凌ぐ力なく、又家屋は食欲を充たすことは出來ぬから、食物と家屋とは比較

出來ぬとか、或は書籍は寒暑を防ぐことが出來ず、衣服は知識慾を満たすことが出來ぬから其相互を比較する譯には行かぬといふ様に考へるのである。斯様に考へることは、固より誤謬とはいへない。併し其以上に進んで、此等の物の用途は一々異なつても、其の凡てが何等かの方法に於て何等かの欲望を充たすといふ共通の能性を持つことは、最も明白なる争ひ難き事實である。若しも使用價值は夫々質的に異なるものであるから相互の比較を容さないといふことが正しければ、勞働生産物たる性質も亦た諸商品に共通だとは謂はれなくなる。卓子や、家屋や、綿絲は、皆に其用途を異にするのみならず、又之を生産する勞働も、指物勞働、建築勞働、紡績勞働等々と、一々質的に相異なつてゐる。此の一々異なる種類の勞働の所産を等一なる人間勞働、抽象的人間勞働の所産と見ることが正しければ、使用價值としての商品も、亦た人間の何々の欲望を満たすといふ特定の用途から離れて、等一的な人間欲望を満たし得るものと見ることが、同じく至當であるべきである。或は人間の欲望は或は食欲或は衣欲、或は讀書欲等々であつて等一的な人間欲望といふものはあり得ないと謂ふかも知れぬ。成程現實に吾々が感ずる欲望は何れも皆な特定種類の欲望である。併し其は勞働に於ても同様である。現實に行はるゝ勞働は、必ず指物勞働であり、建築勞働であり、紡績勞働等々である。其を或

目的の爲めに或見地から質的に無差別な、支出の形式に頓着する所なく考へた、人間勞働力の支出として見るに過ぎないのである。決して支出の形式から離れた勞働力の支出といふものが現實にある譯ではない。又有つたにしても、(例へばエネルギーの支出其者が目的でエネルギーを支出するといふ如き場合)斯る勞働は價值を造り出すものでない。「……如何なる物も使用對象たることなしに價值たること能はず。若し其物が無用ならば其に含まるゝ勞働も無用であつて、勞働として數へられず、從つて何等の價值を形成しない」のである。故に抽象的人間勞働なるものは全く思考的抽象作用の產物に過ぎぬ。其の同じ抽象作用を使用價值に加へてはならぬといふ理由は何處にも見出すことが出來ぬ。若し之ありとすれば、其は交換商品に共通なるものは勞働だといふ結論を引き來る目的に適はぬといふ理由のみであらう。所詮相交換せらるゝ商品に共通なる等量のものとは勞働費用以外にないといふ推論は無理である。

此點に就いて既述「一物一價法則」を併せ考へることも不要であるまい。此法則に由れば、同種同質の財は其の個々勞働費用の幾許なるを問はず、皆な同一の價格を以て賣買される。さうすると同一の使用價值を有する商品單位量は、其の一々に費された勞働量、即ち其の個別的價值は異なるに拘

らず、其價值は同一だといふ事になる。例へば一定量の小麦(一定品質の)は、其の優良地に産するものには勞働の費さるゝこと少なく、瘠地に産するものには多量の勞働が投せられてゐる。而かも斯く勞働費用の個々に異なるに拘らず、同じ小麦は皆な同一の價格を以て賣買されるのである。今此の價格同一なる幾多クオタアの小麦を取つて、此等の各クオタアに如何なる共通のものがあるかと言へば、其は當然其効用だと答へなくてはならぬ。然らば其の個別的勞働費用を異にするに拘らず同じ効用を有するものは何故に同一價格を以て賣買されるかと言へば、賣手買手の競争が之を然らしめると答へるより外はない。今同質の小麦に對して、瘠地の耕作者が沃地の耕作者よりも高い價格を要求したならば何うかと言ふに、買手としては他で安く買へると全然同一品質のものにより高く支拂ふ理由がないから、彼等は皆な去つて沃地耕作者の前に集まるであらう。而して若しも沃地の產物のみを以て充分其必要を満たすことが出來るならば、瘠地の耕作者は遂に其穀物を賣り得ずに終るであらうが、若しも其丈で買手等の需要を満たすに足らぬ場合には、彼等は互に競争して其價格を競り上げ、終に瘠地耕作者を賣買に参加せしめる迄に及ぶこともあらう。其場合には勞働を多く費したる者も少く費したる者も、等しく同一價格を以て其小麦を賣るのである。此場合に斯る單一の價格が成

立するのは何故であるか。其効用（無論曩に述べた限界効用）の等しきものに對して買手が高低異なる價格を支拂ふことを肯んじないといふ一事の外には其理由は求められないのである。

既に個々の勞働費用を異にしても其効用を等しくする物は同價格であるとすれば、次に異なる種類の財にして互に相交換されるもの（即ち其價格を同じくするもの）に就いて同様に、價格相等しきものは相等しき効用を有するとなすは許し難きことであらうか。是を不可なりとすべき理由は想像出來ぬ。

此處で當然豫期されるのは、小麥と小麥とは同じ使用價值物だから、相互に其効用を比較し得るけれども、異種類財の効用は比較することが出來ぬといふ前出の反對論である。此論の失當なることは既に前述の通りである。異種財の効用の大小強弱は實は容易に比較し得るし、又現に吾々は日常比較しつゝある。マルクスはブランデエと聖書とを引いて其使用價值の到底相比較すべからざることを説いてゐるが、事實は反對である。此點は既に多くの學者に依て指摘されてゐるが、姑らく先唱權を尊重する意味に於てキックスチイドの説を引用する。

「例へば聖書とブランデエといふ如き異なる物品（マルクスに依て言ひ出された例證を取れば）から

得らるゝ満足をや元し得べき共通の尺度がないといふことは言はれない。何となれば、吾々は誰れも皆な日々斯る約元を行ひつゝあるから。若しも私が一冊の家庭用聖書と一ダアスのブランデエとに對して同じ金額を支拂ふことを辭せぬとすれば、それは私が此等のものゝ占有が私に與へる夫々の満足を一の共通尺度に約元してその等價なるを見たからである。經濟用語に於て二物は私に取つて相等しき抽象的効用を有する。通俗の（而して極めて有意味の）用語に於ては、二物の一方は、私に取つて他方と同じ丈の價值があるのである。

故にマルクスが、吾々が交換し得べき商品が其點で異なるもの（使用價值）から其點で同一なるもの（交換價值）に移る時、僅に抽象的勞働の凝結のみを残して、其効用を度外しなければならぬと言ふのは謬つてゐる。吾々が眞實爲さねばならぬことは、商品が其點で異なる、具體的なる特殊の質的効用を度外して、其點で同一なる抽象的且つ一般的効用を残すことである。」（Philip H. Wicksteed, *Das Kapital*, (1884), Bernard Shaw and Karl Marx, 193), pp. 35—36)

次は「共通物」は勞働であるといふ推理の當否如何である。

或物の一定量と他の物の一定量とが相交換されるといふ事實は、果して直ちに此兩者に等量の勞働

が存在しなければならぬと論結せしむるか。吾々は一切の相交換せらるゝものを前記の如き方程式に現して、さて此兩者には等量の労働が含まれてなければならぬと推究して差支ないものであらうか。無論差支がある。相交換せらるゝ物は必しも労働の生産物ではないのである。土地は其の最も著しき例である。マルクスは無論其を認めてゐる。又労働の所産であつても、明かに相等しき労働量を含むぬものがある。美術品珍書古錢等の如きは其である。此事もマルクスは認めてゐる。又新たに生産することは出来ても、其生産に或制限又は拘束の加へらるゝものがある。例へば三鞭酒の如きは是である。此等の財も交換買賣せられるが、併し相交換せらるゝものに等しき労働が含まれてゐると言へないことは明である。さうするとマルクスの試みた推究は、一切の交換に適用し得るものでなくて、交換關係の中から少なくとも上記の諸物は除外しなければならぬ。然らば其選擇の標準は何であるか。マルクスは其現象形態たる交換から進んで其奥に潜める社會的實質即ち價值を捉まんとしたのであるが、相交換されるといふ事實の表面には之を區別すべき標準が與へられてゐない。等量の労働を含む、これが「共通物」であるといふことは、相交換される凡ての物に等しく適用されなければならぬ筈である。若しも選擇を加へて、土地、骨董品、三鞭酒等をば、其が労働生産物でないか、或は任意に生産

し得られぬものであるといふ理由に由り豫め除外するとすれば、其は結局、價值概念に到達する前に價值概念を以て出發することになる。別言すれば、相交換せらるゝ財貨に等しき労働量が含まれてゐる場合には此兩者に等しき労働量が含まれてゐると論結することに歸着する。

以上の如く吟味し來れば、資本論に於けるマルクスの價值法則は、其確立の道程が非論理的不自然的である。茲に於て吾々は、當然の順序として、マルクスは資本論（又は「經濟學批評」）卷頭の推究をなすに先だつて、別の方法に由て既に商品の價值は労働費用に依て定まるとの理論を所有し、其の既有的結論へ引き着ける爲めに彼の方程式以下の推究を試みたのではなからうかとの疑念を起さざるを得ぬ。資本論以前の著作に就いて事實は果して如何であるかを考證すると、可なり此疑念の證據となし得べきものを摘示することが出来る。

資本論の最初の素描と見るべき「賃銀労働と資本」（一八四九年）には、既に労働價值學説が唱へられてゐる。而してマルクスは一商品を生産する労働費用は其市場價格の旋廻中心をなし、労働費用以上上つた價格は謂はゞ自動的に下降し、以下に下つた價格は同じく自動的に上昇するとした。其文言を引用すると、「……需要と供給との動搖は、一商品の價值を常に再び生産費に歸着せしめる。……

成程一商品の現實價值、(小泉註リカアドオ等の市場價格に相當)は、常に生産費以上若しくは生産費以下に在る。併し乍ら騰貴と下落とは互に相補ふ結果、一定の期間内に於て産業の潮の干満を通算すれば、商品は其生産費に應じて相交換される。即ち其價格は其生産費に依て定められるのである。然るに此に謂ふ生産費は結局労働費用に約元される。何となれば、「生産費は第一に原料及び用具、即ち其製作に一定量の労働日の費されたる、従つて労働時間の一定量を示すところの工業生産物から、第二に時間を尺度とする直接労働から成立つからである」(Lohnarbeit und Kapital hrsg. von K. Kautsky, 1906 S. 22, 28)。

マルクスが若し此見解に據るならば、相交換せらるる商品には、少なくとも持続的に或は平均的に見て、互に相交換せらるる商品は等しき労働量の産物であるべきものであるから、逆に商品が相交換されるといふ事實から遡つて、此兩者には共通物として等しき労働が含まれてはならぬと推究しても事實とは抵觸しない。是は此推究法が正しいからではない。此推究法の價值の疑ふべきは前述の通りであるが、たゞ既に別の方法で、等量の労働の所産同志が相互に交換されることが明かにされてゐるから、結果の上で推究の結論が現實の事實と背離しないと言ふのである。

其後に出た「價值價格及び利潤」(一八六五年)でも、商品の市場價格は其眞價值即ち労働費用を中心にして旋廻するものと説かれてゐる。「需要と供給とが互に相平均し、従つて其作用が停止する瞬間に於て、一商品の市場價格は其の眞價值即ち其市場價格の動搖の中心たる標準價格と一致する」。而して一商品の價值は「其に投下せられ、體現せられ、固定せられた労働の相對量若しくは相對額に依て決せられる」といふ。又商品の生産に要せらるる相對的労働量を「社會的物質」とも呼んで居る。若し事實が此通りであると認めるならば、矢張り「共通物」云々の推究の結果が事實と相違する懸念はない。

是に由て觀ると、マルクスは前記の推究法に依て人間労働が價值形成實質であるといふ結論に到達する前に、既に別の方法に依て労働價值説を得てゐたのである。彼の資本論卷頭の推究法は恐らく實際にマルクス自身を導いて彼の結論に到達せしめた方法ではなかつたであらう、と想像される。推究の結果として到達すべき結論は、出發前既に別の方法で證明せられてゐたものであらう。是は一個の學說史的推斷であるが、若し此推斷が當つてゐるとすれば、吾々は更に資本論以前に於けるマルクス労働價值説の論據を吟味しなければならぬ。

「賃銀勞働及び資本」に於けるマルクスの價值價格論は、極めてリカードの其に近く、時々現實の商品價格は一定の旋廻中心點を持つて居る、而して此中心點を定めるものが勞働費用であるといふ。然らば勞働費用が何故市場價格の旋廻中心になるかといふと、商品の市場價格が其價值、即ち勞働費用と離隔する場合には、必ず利潤率の不平均を生じ、資本は必ず低い方から高い産業へ移動して、一方に於ける商品供給の減少、他方に於ける其増加を來たして、諸商品の價格を其勞働費用に比例せしめなければ已まないと謂ふのである。念の爲め原文を引けば左の通りである。

「一商品の價格騰貴の結果は何であらうか。多額の資本が繁榮なる産業部門に投せられるであらう。而して此の特に有利なる産業區域への資本の流入は、それが普通利潤 (die gewöhnlichen Gewinne) を生ずるに至るまで、或は寧ろ過剰生産の爲め生産物の價格が生産費以下に下降するまでは繼續するであらう。反對に一商品の價格が其生産費以下に下降すれば、資本は此商品の生産から引き去られるであらう。一産業が最早時勢に適應せぬ場合、即ちその滅亡せねばならぬ場合を除けば、此の資本の逃亡に依て斯る一商品の生産即ち其供給は需要に適應し、従つて其價格が再び生産費の高さに引上げらるゝまで、或は寧ろ供給が需要以下に降るまで、即ち其價格が再び其生産以上に上るまでは

減退するであらう。蓋し一商品の時價 (der courante Preis) は常に其生産以上若しくは以下に在るものであるから」(a. a. O. S. 21)。

是はリカードやアダム・スミスが自然價格を市場價格の重心としたのと全然同軌に出で居る。現に「價值價格及び利潤」中の説明では、マルクスは明にスミスの次の文言を援引して居る。「自然價格は諸商品の價格が絶えず歸着せんとする中心價格である。様々の出來事が、時としては價格を可なり此以上の高さに支えることもあらうし、又時としては之を此以下にも降らしめることがあるであらう。然し價格が此の安定持續の中心に落ち着くことを妨げる故障は何であつても、其は絶えず此に向つて傾きつゝある。」今詳細の説明は省略するが、スミスの自然價格が市場價格動搖の中心であるとした理由が矢張り利潤率平均に向つての資本の移動出入、其に因て起る商品供給の増減であることは國富論讀者の既に承知する通りであらう(スミスは利潤率の平均と共に賃銀率並びに地代率の平均を市場、自然、兩價格一致の條件としてゐる。但し地代に關する其所説は曖昧であり、又リカードは極力此點に於てスミスの謬れることを切論した)。

右のマルクスの説明ならば承認出来る。但しリカード等の價格論を承認し得るのと同じ意味に於

て承認出来るのであるから、是れでは決して労働が價值を形成するとか、或は凝結せる労働其者が即ち價值だといふ説明にはならぬ。假りに其處で謂ふ生産費が完全に労働に約元し得るとしても、決して労働が價值を造り出すのではない。生産費は生産者にとつての犠牲であるから、例へば等しき犠牲を拂つて生産した物が違つた價格で賣買されるか、或は異なる犠牲を以て生産された物が等しい價格で賣買されれば、必ず比較的不利な生産は縮小せられ、有利な生産は擴張されて、供給増減によつて生産費と一致するやうに價格の調節が行はれると言ふに過ぎぬ。従つて問題は、何處迄も需要供給の域内に留まるのであつて、需給以外吾々の覺知出來ぬ力が價格と生産費と一致せしめる譯ではない。

右の場合に於けるマルクスは、彼の自然價格市場價格論に於けるリカアドオと同じ立場に在るものであるから、斯様にして労働價值説を確立せんとするには、リカアドオの條下で述べたやうに、何處までも諸生産部門間の自由競争に依る利潤率の平均、及び資本の有機的組成の均一（生産上に費さる活きた労働は必ず放下資本の總額に比例すること）を條件としなければならぬ。

生産部門間の自由競争（即ち資本が利潤率の高い産業を求め、労働が賃銀率の高い産業を求めて流

動すること）がなければ、一商品の價格が生産費以上に上るに拘らず其生産額が増加せぬこと、又反對の場合に生産額の減少せぬことが起り得る。然らば當然、價格は生産費即ち労働費用を中心としては旋廻せぬであらう。

前に再三論じた様に、資本の有機的組成を均一と假定せぬ以上、利潤率の平均に由て實現せらるゝ安定の状態は決して商品價格と労働費用との一致を保障するものではない。併し若しマルクスが資本有機的組成の均一を條件として労働價值説を確立せんとするならば、其は労働費用以外に資本の放下其事が一の犠牲として生産物稀少の原因たり得ることを承認することになるから、結局リカアドオと同様に生産費説に退却して、彼れと同様に、商品が其價值通り、即ち労働費用通りに賣買されるのは（一）生産上労働を投じて機械を使用せず、且つ生産物の市場に搬出せらるゝ迄に經過する時間の同一なる場合、（二）生産上に使用せらるゝ固定資本が價值及び耐久性を等しくする場合に限る、と言ふに類する結論に到達しなければならぬ。

然るにマルクスは此結論に陥ることを避けんが爲めか、資本組成の方を問題にしないで、利潤率平均を問題にした。即ち資本の有機的組成に異同のある處で利潤率が平均すると、商品價格と價值とは

相離隔するのであるから、此の「平均」さへなくば商品の價值通りの交換は行はれる。本則的の交換に於ては、等價の商品が相互に交換された(或は相交換される)。此の本則的交換を妨げるものは利潤率の平均である、と言はんとした。然るに利潤率の平均は自由競争の爲めに起る。其處でマルクスに取つては、自由競争が等價交換を妨げる妨害原因となつた。併し再三論じたる如く、自由競争の前提を離れては一般に費用價值説は成立せず、マルクス自身も或場合には明に其事を承認してゐる。そこで彼れは自由競争をば等價交換の條件にもしなければならぬ。資本論全篇を通じて屢々逢着する、商品相互の價值通りの交換は、自由競争を俟つて始めて行はれる。否な自由競争なき處に始めて行はれると同じマルクスが主張する、收拾し難き混亂は是が爲めに生じたのである。

此に至ると自然の順序としてマルクスの生産價格説は其基礎を成すと謂ふ價值法則と能く相容れるか否かを論じなければならぬ。

第十三節 價值法則、生産價格説の不兩立

資本主義社會に於ては、諸商品は其價值通りに賣買されないで、其とは違つた生産價格で賣買される。リカード等の自然價格に於けると同様に、時々市場價格は此の生産價格を中心とし常に之に歸着せんとして動搖する。此生産價格と價值との關係をいへば、其は其生産に平均以上に多くの賃銀資本を要する商品にあつては其價值以下、又其反對の商品にあつては其價值以上に在る。而して斯く諸商品が其價值とは離れた生産價格で賣買されるといふことは一時的變態的現象でなくて、資本主義社會に於ける永續的的事實であるとマルクスはいふのである。そこで今日の社會で一定の割合で商品の相交換せらるゝことを $am = bn$ といふ方程式で現して、さて此等の相交換せらるゝ商品には等量の共通物が存在しなくてはならぬとして其共通物が何物であるかを推究したならば、苟も資本論巻頭の推究が正當である以上、此處でも同様に、該共通物は勞働だと謂はなければならぬ。併し斯く此推究を承認し、又一方生産價格説を承認することは、畢竟一商品の一定量に含有せらるゝ勞働量は同じ商品の別の數量に含有せらるゝ勞働量と等しいといふ明白な不合理に陥らなければならぬ。然し此不合理を回避せんとして、或種のマルクシストが試みるやうに、彼の推究法は價值通りに行はるゝ交換比率にのみ適用するのだと言へば、其は推究の結果として得らるべきものを推究の出發に先だつ

て豫め確定して置く、別の不合理に陥らなければならぬ。

然らば彼の「賃銀労働と資本」等に於て説かれた意味に於て價值を價格の旋廻中心とすることは何うであるか。

此處でも労働價值法則と生産價格説とは正面から衝突する。何となれば、彼處では、價格は利潤率平均作用に依て價值に惹き着けられ、此處では利潤率平均に依て價值から價格が引離されると説かれてゐるからである。マルクスは其生産價格説を説明する場合に屢々、利潤率の平均が價值通りの商品交換を妨げるのであるから、利潤率の平均なき場合、若しくは歴史上利潤率の平均に先立つ段階に於ては價值通りの交換が行はるべき筈であるし、又現に行はれたと説いた。是は彼れの労働價值説の最初の着想と相容れないが、姑らく此撞着を無視して、果して利潤率の平均なき場合には價值通りの交換が行はるべきものであるか否かを明にしたい。

前にも述べた通り、利潤率の平均を無視するといふことは、労働價值説確立の爲めに何の助けにもなるものでない。抑も商品相互間の交換比率が其労働費用に由て支配されるといふことは、或條件の下では、確かに何人も否認し難き明白なる公理とも稱し得べきものである。唯々其の缺く可からざる條

件として、生産者の完全なる轉職の自由、即ち産業間の自由競争を前提しなければならぬ。生産物が賣却される其の時々々の價格は、供給と需要との關係に由て定まるが、斯くして定まつた價格が費用と比例しないで、餘り費用を要せぬ商品が高く賣れて、費用の掛かる商品が廉いといふ如きことがあれば、必ずその費用を要せぬ物の生産が増加し、費用が掛かる物の生産は縮小されて、費用に比例した價格を成立せしめるやうな需給の状態を現出しなければ已まない筈である。併し是は生産當事者が任意に其の有利とする生産に参加し得る自由があつて始めて言ひ得ることである。若しも費用に比して價格の高い生産部門が何かの障壁に依て外來者の参加を遮斷或は妨害するならば、價格は何時迄も費用と比例を失した儘の状態に留まらねばならぬ。生産の費用が果して労働のみに約元し得るや否やは更に第二の問題であるが、約元し得るにせよ得ざるにせよ、産業間の自由競争が行はれなければ、商品の價格と其費用との間には何等の連繫を求めることが出来ぬ。價格が費用と無關係になれば、當然労働費用とも無關係にならざるを得ない。獨占財或は準獨占財の價格は、正に是に該當する。獨占財の價格は購買者の需要如何に由ては無定限に騰貴し得る。従つて其生産者は破格に高率の利潤を收めることが出来る。而かも外界からの競争に依て其價格の引下げられることがないから其利潤率は何時迄も

普通率まで下降せぬであらう。併し利潤率平均の斯る妨害が何等價值通りの交換を保障するものでないことは勿論である。

其故にマルクスも利潤率の平均に依る生産價格の成立を説明した其の同じ章で、商品が略ぼ其の價值と一致する價格で交換される爲めの條件三條を擧げてゐる。

「一）相異つた諸商品間の交換は、もはや純粹に偶然的なもの、又は單に時折り行はれるといふだけのものではなくるといふこと。

「二）直接の商品交換（物々交換）について言ふ限り、双方の側から相互の欲望を充たすに略々適當した比例量で商品が生産されるといふこと。

「三）販賣について言ふ限り、契約當事者の一方をして價值以上に販賣することを得せしめたり、又は價值以下に賣り飛ばすことを餘儀なくせしめたりする何等偶然的、又は人爲的の獨占も存在しないといふこと」

是である（「資本論」高島素之譯改造社版④一四六頁）。

此の第三の條件即ち獨占の存在せぬことは、言ふ迄もなく自由競争の行はるゝことに外ならぬ。第

二の、商品の生産が其に對する欲望に比例した數量に於て行はるゝことといふのは、費用の掛からぬ商品の生産が缺乏し、多大の費用を要する商品の生産が、過剰を告げるといふやうな事が有つてはならぬと謂ふ意味である。然らば、此條件は如何にして備はるかといふに、マルクスは「販路に關する相互の經驗に伴ふものであつて、連續して行はれる交換それ自身の結果として生じ來る」と言つて居る。それは畢竟當事者が、連續的交換の經驗によつて、賣れないものゝ生産を止めて、より多く需要せらるゝものゝ生産に移ることに歸着するであらう。然りとすれば、其は上記の轉職の自由、即ち産業間の自由競争に依て始めて行はれる。

即ち此處でマルクスは價值通りの交換は自由競争を俟つて行はれるとしたのである。併し、自由競争の行はれる處では利潤率が平均しなければならぬ。利潤率が平均すれば價值と離れた生産價格が成立しなければならぬ。

此撞着を救ふ爲め、或るマルクシスト等は、マルクスの謂ふ自由競争には二つの意義がある。一は同一産業内の競争、今一は産業部門間の競争であつて、價值通りの商品交換の條件たる自由競争は第一のもの、利潤率を平均せしめるのは第二のものであると解釋したことがある。

併し此の解釋は、僅に一步此困難を回避するに止まる。其は同一産業内の自由競争は僅に一物一價法則を保障するに過ぎないからである。即ち例へば綿絲紡績業者相互間に競争が行はれるとすれば、同品質綿絲の一定量は、個別的生産費が如何に違つても、又需要者の之に對する欲求には如何に強弱の差があつても、同じ市場では必ず同一の價格を以て賣買される。若しも同一物に二つの異なる價格があれば、賣手は必ずより高き買手の前に集まつて其價格を競り下げ、買手は必ずより廉き賣手の前に集まつて其價格を競り上げ、遂に兩價格が合一するに及んで始めて已むであらうことは前に説明した通りである。

併し乍ら、同業者間の競争は、此以上に、斯くして成立した單一の商品價格と其生産費との間に如何なる關係が保たれるかに就いては何事をも言はぬ。元來一商品の價格が其生産の費用に支配されるといふことは、價格が一定の基準以上に上り、又以下に下つた場合に之を拘制して、其本原に復せしむる作用を俟つて始めて言ひ得るのである。而して其作用は價格の高低に依て促される供給の増減より外にない。(價格が或基準以上に騰貴した場合に需要が反落し、價格下落の場合に其反對の結果が起ることは言ふ迄もないが、是は價格が騰落が或基準を離れぬといふ保障にはならぬ。若しも價格の

騰貴が價格を舊位に復せしむる丈の需要減退を喚び起すならば獨占價格といふやうなものは成立し得ない筈である)。然るに生産の増減は産業間の自由競争、従つて資本勞働の流出入に俟たなければならぬ。一産業が他の方面からの資本勞働の流出入を遮断すれば、其は即ち獨占の状態となる。獨占が費用價值論を不可能ならしめることは繰り返して言ふ迄もないことである。

前記の引用文言の附近に於て、マルクスは「競争が先づ一の生産部面に於てなし遂げること、諸商品の種々なる個別的價值を均衡化して等一なる市場價值及び市場價格を成立せしめるといふことである。然るに、相異つた生産諸部面に資本の競争が行はれるため、茲に初めて相異つた諸部面の利潤率を均等ならしめるところの生産價格を喚び起すことになる」といつて居る(前出高島譯本④一四九頁)。同じくマルクスの「餘剩價值學說論」中にも同じ意味を説く章句がある。

茲に謂ふ商品の市場價值なるものは、個別價值に對するもので、簡單に云へば、一生産部門に於て生産せらるゝ商品の平均價值であり、彼の「社會的に必要な勞働量」に依て定まる商品價值なるものが是に當ると解せられる。右の場合マルクスが謂ふ所は、一産業部門内に於ける競争の爲め個別的價值を異にするに拘らず同じ商品の單位量は皆な同じ價值を有し、又同じ價格を以て賣れると言ふ丈の事で

あるか。其れならば、是は畢竟「一物一價法則」に外ならぬものであつて、吾々に毫も異存はない。併し商品が生産價格の成立以前に於ては斯る市場價值通りに賣買されると言ふことは何うして説明されるか。其説明は無いのである。

マルクスも商品の現實市場價格は其需要供給に由て決定されるものとして居る。其處で、斯くして定まる市場價格が前記の市場價值に一致する爲めには、丁度需要が斯る價格を成立せしめる程度のものでなくてはならぬ。マルクスの言を引けば、價值通りの賣買の行はれるのは「…需要の大きさが斯様に確立された價值で商品量を吸収するに丁度相當した場合に限る」のである。併し需要の増減は、市場價值に頓着なく起るから、商品の市場價格が市場價值以上にも以下にも自由に離れ得ることは、マルクスの明に承認する所である。然らば離れた市場價格は如何にして市場價值に牽き着けられるか。其は價格が價值に騰貴した場合に生産が増加し、價值以下に下落した場合に生産が減少すること以外に依ては行はれない。然るに一生産部門が生産額を増加するには、使用労働者の數を増さねばならぬ。原料は無論増さねばならぬ。機械や道具も亦た増さねばならぬと解するのが至當であらう。而して此事は當然資本の流入なくしては行はれない。然るに素より資本は果して價格が價值以上に出るか否か

を問題とせず、たゞより、高き利潤率を求めて流動する。而して其流動の結果は利潤率の平均である。利潤率の平均、即ち資本が最も有利なる生産に投入される自由の存せぬ處で、如何にして「需要の大きさが…價值で商品量を吸収するに丁度相當」したものであり得るか。利潤率の平均がなければ、たゞ生産價格が成立せぬといふ丈けの事である。生産價格が成立せぬといふことは、毫も價值通りの交換が行はれるといふ證明にはならぬ。生産價格が成立せぬ處では、需要供給が宛も價值通りの賣買を可能又は必然ならしめる大きさに相當するといふ事は、たゞ偶然の外何者も保障し得ないことである。私は嘗て此點を指摘して、産業間の競争は生産價格を成立せしめるが、若しも産業間の競争がなければ、如何にして價值通りの交換が行はれると言へるか、(如何にして價值通りの交換を行はれしむる需給關係が成立すると言へるか)を問ふて見たが、一マルクシストは之に答へて、價值通りの交換を妨げるものは産業間の競争であるから、此競争がなければ價值通りの交換が行はれるのは當然の事だといふ意味の答へをした。一部のマルクス主義者及びマルクス自身の言説の或部分には、確に此の豫斷が窺れる。彼等は説明に依て到達すべき結論を推究の始めに承認してかゝつてゐる。

商品が若し價值通りに交換されるとすれば、其は初期のマルクスが明言した通り、資本が費用に比

較して價格の低い産業を逃れて其の高い産業に流入するといふ作用を俟つて行はれる。若し此作用を遮断すれば、當該商品はマルクスが其價值法則の領分から除外した獨占財、若しくは準獨占財とならねばなるまい。

たゞマルクスは利潤率平均以前に於て價值通りの交換が行はれたことを、著者の記憶する限りでは唯一個處、理由を擧げて説明してゐる。

其は資本主義以前の獨立手工業者又は自作農民間の交換である。彼れの記述の大略を言へば、労働者は其労働力を他人に賣却せず、自ら生産手段を所有し、労働の結果たる生産物を互に交換するものとする。労働の技術的性質が異なるに従つて商品一單位の生産に要せらるゝ原料道具の價值は種々様々なるものとする。併し各生産者の一日に消費する生活資料並に一日の労働時間は均一なるものとする。然かすれば、生産者等は其生産物を労働費用に應じて、即ち各人一日の生産物は一日の労働時間と一日の消耗生産手段に含まれた労働時間とを加へたものに應じて相交換されるといふ。此場合生産物の價值から消耗生産手段の價值を控除すれば、其殘額は一日の労働に依て新たに生産せられた價值である。併し労働者は他面に於て生活資料を消費するから更に之を控除すれば、其處に餘剩價值とも稱す

べきものが残る。是に對して各人の生活費が資本主義流にいへば其可變資本、其の準備する道具原料其他の價值が其不變資本に相當する。今上述の如く生産物が夫々其労働費用に應じて相交換されれば、各人は其生産に對して同額の餘剩價值を收得する。然るに、各人の道具や原料に對する支出は一々異なることが承認されてゐるから、利潤率は不均一にならねばならぬ。而かも斯る事情の下に於ては、生産物は、利潤率の不均一を顧みず、其労働費用に應じて交換せられ、各生産者に同額の餘剩價值を收得せしめ、生産者が不利な生産から有利の生産に移動することは起らぬといふ。何故であるか。斯る假定の下に於て利潤率の差異なるものは何うでも宜い事であつて、それは丁度貸銀労働者から強控した餘剩價值量が如何なる利潤率に依つて表章されるかといふ問題が、今日彼れに取つて何うでも宜い事である……のと同じである」からだとマルクスは言ふ。(高島譯本④一四五頁)

即ち一定額の餘剩價值、換言すれば、一定額の純益を收得する爲めに幾許の資本を放下しなければならぬか、——多額の高價なる原料を要するか否か、多額の高價なる而かも耐久なる道具を設備しなければならぬか否かは、たゞ同額の純益さへ得られれば生産者に取つて何うでも好い事であると謂ふのである。

此のマルクスの説明は不可解である。問題は次の一問に對する答に由て決する。「斯る社會に於て自由競争が行はれて、各生産者は合理的に行動したものと想像するか否か」。若し合理的に行動したるもの、即ち一定の目的を達するに及ぶ限り僅少の犠牲を以てせんと努力したるものと想像すれば、利潤率の差異は無論「何うでも宜い事」ではない。一定額の純収益を得るに各人は無論資本放下を要すること最も少なきものを選択するであらう。加之多くの者には多額の資本を放下することが困難又は不可能であらう。従つて資本放下を要すること多き生産物は、然らざるものに對し比較的缺乏するであらう。缺乏すれば、其價格は當然勞働費用の割合よりも高くなるであらう。即ち利潤率が平均して價值通りの交換は行はれないのである。

是は各人が合理的に行動したものととしての事である。然らば、彼等が合理的に行動しなかつたならば何うなるか。合理的に行動せぬといふことは、一定の収益を得んが爲め大小幾許の犠牲を拂ふかに無頓着だといふ事である。斯る無頓着の人物は如何なる行動を取るであらうか。需要供給の關係上一商品の價格が其費用に對して如何に騰貴しても、之を顧慮せず、又反對に價格下落の爲めに如何に其生産が不利益となつても彼れは同じく是を意に介せぬであらう。斯る場合に利潤率の平均が起らぬと

いふことは、それは容認して好い。併し乍ら、其と同時に、勞働費用が交換關係を拘制するといふ作用も、斯る場合には行はれない。吾々はたゞ斯る場合には生産價格が成立せぬといふ否定的判断のみを下し得るのである。或は此點に就きマルクスを辯護し、獨立小生産者の交換には利潤率平均の行はれざりしことを力説せんとするの餘り、當時に於ては通則として獨占價格が行はれたと言つたものがある。(拙著「價值論と社會主義」第二追補參看)。獨占價格が行はれたといふことは、無論價值通りの交換が行はれたといふ證明にはならぬ。併し斯る辯護論の試みられることは偶々マルクスの理論的弱點を示すものとしては有意味である。

即ち利潤率の平均に由て始めて價值通りの商品交換が妨げられるといふマルクスの固定觀念は、左の如く評すべきである。利潤率の平均を度外すれば、一般に費用價值説は成り立たぬ。利潤率が平均すれば、勞働費用説は成り立たぬ。故に價值と生産價格とを説明せんとする前記第一第二兩表は、ただ消極的の用を成すに過ぎぬ。即ち如何なる割合で商品交換が行はれるかでなくて、如何なる割合で交換が行はれ得ないかを説明するに過ぎないのである。即ち彼の表は、利潤率の平均以前には商品が價值通りに相交換せられたものと假定し、さて價值通りの交換が行はれると資本の流動が起らなければ

ならず、従つて商品交換比率が變化すると謂ふのであるが、實は彼の表の示し得ることは、資本が彼の如くI—Vの生産部門に各々百宛放下せられ、而して其生産物が其勞働費用に應じて交換されるといふことは有り得ないといふに盡きる。若し斯の如き交換が行はれたならば、必ず資本はIVやVの部門から流出してIIやIIIに流入するから、表の如き資本の配分は存續し得ない。又従つて生産物も其價值と離れた價格で賣買されざるを得ない。併し此の資本の流動に先だつて價值通りに商品が交換されたといふことは一の假定に止まるのであつて、斯様な交換が行はれたといふ假定の價值は、斯様な交換が行はれなかつたといふ假定の價值と相等しい。商品が其生産上の費用に應じて交換される必然性はたゞ産業部門間の競争に依て與へられる。それを除外すれば、凡ての交換比率はたゞ需給に由て定まるといふの外はない。而かも需給は價值通りの價格も、價值と外れた價格も同じ蓋然率を以て之を成立せしめるのである。

第十四節 價值概念と社會的必要勞働時間

——マルクス説の根本的難點——

マルクスは決して、價格に及ばず需要供給の作用を無視するものではない。資本論第三卷の敘述は、極めて亂雜不統一で、著者の思想の不整理を示してゐるが、併し此の亂雜な敘述の中にも、彼れが價格に對する需給の影響を如何に周到綿密に考察したかは充分に窺ふことが出来る。

前述の如く商品價值から離れた生産價格が成立するのは、資本の流動に因る供給の増減が之を然らしめる。然るに、需給關係が價值と異なる價格を成立せしめるものならば、價值通りの交換を行はしめるものも當然需給關係であるべきである。即ちマルクス自身の言によれば(前掲書④一六〇頁)

「一の商品を市場價值通りに、換言すればその中に含まれてゐる社會的に必要な勞働に比例して、販賣せしめるためには、この商品種類の總量に支出される社會的勞働の總量が、同一の商品種類に對する社會的欲望(支拂能力ある社會的欲望)の量と一致することを要する」のである。(此言は同じマルクスの「需要供給は……市場價值と市場價格との不一致を説明するに過ぎぬ」〔一五八頁其他〕との主張と相容れぬ。「支拂能力ある社會的欲望」は即ち需要其者ではないか。)従つて社會全體の勞働力が或特殊の生産に集中せられて他の者は閑却せられ、或特殊の生産物は非常な多量に於て生産されるが、他の諸商品は缺乏を告げるといふ如き有様であつたならば、價值通りの生産物交換の行はれ得ないこ

とは論を俟たぬ。マルクスは生産物が價值通りに賣買されるには、勞働全體が諸生産部門に比例的に配分されなければならぬと謂つてゐる。若し此の勞働配分が平均を得てゐれば、相異つた諸職業群の生産物は價值(更らに進んだ發達の下に於いては、生産價格)を以て、又はこの價值乃至生産價格の、一般的法則に依つて決定されるところの變形たる價格を以つて販賣される。これは實際のところ、個々の商品又は物品についてではなく、分業に依つて獨立化した特殊な社會的生產諸部面のその時々總生産物について、自己を貫徹する價值法則なのである。それ故、この價值法則に於ては、單に各個の商品について必要な勞働時間が充用されるといふのみでなく、尙また社會的總勞働時間からの必要な比例量のみが色々な職業群に於て充用されるといふことが問題となる。蓋し條件は依然として使用價值であるから。けれども個別的商品の使用價值は、各商品がそれ自身に於て一の欲望を充足せしめるといふ事實に懸るのであるが、社會的生產物大量に於ける使用價值は、此等の生産物が各特別種類の生産物に對する量的に限定された社會的欲望を充たすに適してゐるといふ事實、隨つてまた、量的に限定されたこの社會的欲望に應じて勞働が相異つた生産諸部面に比例的に配分されるといふ事實に懸る。(⑤一七六頁。前後の聯絡上恣に二三の譯語を改めた。)

即ち商品が其價值通りに賣買されるとすれば、それは全く需給の關係に依つて然るものであり、勞働の配分が「比例的」でない場合には如何に多量の勞働を費した生産物も廉い價格、或は皆無の價格を以て賣買されなければならないのである。其處で興味ある問題は、斯く勞働の配分が比例を得た場合も比例を失した場合も、一定量の勞働は常に同額の價值を造り出すか否かと言ふことである。換言すれば、例へば一の社會に衣服が過剰を告げて食物は缺乏してゐる場合に、一定量の勞働ならば、其を既に過剰なる衣服の生産に投じて、或は人を饑餓から救ひ出す食物の生産に投じて、一定量の勞働は常に一定の價值を造り出すと見て好いか否かである。

多くの場合にマルクスは此問を肯定するやうである。價值は生産行程上に費された勞働に由て造られる。其の生産せられた商品に需要があれば高く賣れ、なければ安く賣れるであらう。併し此の賣買價格の高低に由て生産物の價值其者は變動するものではない。需要のある時は商品の價值は實現され、需要がなければ實現しない(或は一部分しか實現しない)。併し實現すると否とを問はず、價值の有ることには變りはない。

今一々引用しないが、マルクスの意見は多くの場合に於て斯の如きものであつて、需要は價值實現

の條件ではあるが、價值産出の條件ではない。價值の産出は何處までも勞働に依り、而かも其時の状態に於て技術上普通とせらるゝ必要勞働に依て定まるとしたのである。

此立場を貫徹せしむれば、苟も人間勞働力の支出は、(マルクスの所謂「人間の腦髓や、筋肉や、神経や、手などの……支出は)その何れの用途に投せらるゝを問はず、常に一定の價值を生ずると謂はねばならぬ。果して左様言つて差支ないか否か。例へば或家屋を生産するに、其時の普通の技術を以て一〇〇(百人とするも十萬人とするも差支なし)の勞働を要するものとし、更にその生産せられたものを完全に破壊するに平均一〇〇の勞働を要するものとする。今一〇〇〇の勞働を投じて建築した家屋は住居の用を爲す。一〇〇〇の勞働を以て建築し、更に一〇〇の勞働を以て之を破壊すれば其は全く何の役にも立たぬものとなる。併し單に勞働を費すといふ點から見れば、建築された家屋よりも、一旦建築して更に破壊せられた家屋により多くの勞働が含有されてゐる。此場合に破壊せられたる家屋は住居に堪へる家屋よりも多くの價值を有するものとマルクスは主張するのであるか。

是は素より極端の例證であるが、道理上之と同一の場合は無數に列記することが出来る。全く船舶の發着なき地點に築造せられた壯大なる埠頭、山間全く交通なき處に開鑿せられた大隧道等の如き、

何れも多大の勞働の生産物であつて、而かも何等人間の欲望を充足せざるものである。是等の生産物は、其の有用無用を問はず、一々其の費用勞働量に應じて價值を有すると解して差支ないか。

若し差支なければ、價值は生産行程上に生産せられ、たゞ其實現に需要を待つといふ立場が首尾一貫する。併し此立場は一貫する代りに、斯様の價值論は餘剩價值論利潤論の根據とする譯には行かぬ。斯る賣れない生産物を造ることに依ては何人も利潤を收得することを得ず、従つて此等の物の生産に勞働者を使用し、勞働者が消費する生活資料の補充に必要な程度以上に彼等を勞働せしめても、斯くして「搾取」せられた餘剩價值は終に何人の利潤をも構成しない。即ち資本家全體に依て搾取せられた餘剩價值總額と、彼等全部が收得する利潤總額とは當然一致を缺くであらう。

併しマルクスは無論斯る見解を取るものでない。彼れは最初から、商品價值存在の爲めに使用價值なる前提の缺くべからざることを力説してゐる。従つて抽象的人間勞働といふ資格に於ては如何なる勞働も商品價值を産出するが、併し他面に於て、其勞働は有用勞働でなければならぬといふ。人間勞働力の支出は、具體的な有用な勞働といふ資格に於て價值存在の要件たる使用價值を生産するのである。マルクスは資本論の巻首に明記した。「……如何なる物も使用對象たることなくしては價值たることを

得ない。物が無用であるとすれば、その内に含まれてゐる労働も亦無用であつて、斯かる労働は労働とは認められず、随つて何等の價值をも形成するものではない(①一一頁)。是に由れば前記の如く無用の物の生産に投せられた労働は價值を産出するものでない。同じ趣旨は到處に、就中市場價格、市場價值を論じた、資本論第三卷第十章に具さに説かれてゐる。

斯く同じく人間労働力の支出であつても、其生産物の有用なると無用なるとに由て價值が形成されたり、されなかつたりするとすれば、同一の理に由て、同一量の労働の所産であつても、其或物は甚だ緊切なる欲望を満たし、他の者は何うでも好いと言ふ位の欲望を満たすといふ場合、形成せらるゝ價值額には大小の差があると見るのが至當である。物が無用であるとすればその内に含まれてゐる労働も亦無用であつて斯る労働は……價值を形成するものでない」といふのが正しければ、大に有用なる労働は然らざるものよりも多くの價值を形成すると謂ふべきであらう。(度々繰り返したやうに、職業の撰擇が自由で、而して一切の物が直接労働のみに依て生産されるとすれば、同一量の労働に依て満たされる欲望に強弱があれば、労働は必ずより強く欲望せらるゝ商品の生産に移るから、靜止の状態を取つて見れば、等しき労働は必ず等しき強さの欲望を満たすと言ふことが出来る。斯る場合に價值は

労働に依て定まるといふことは、又欲望の強弱に依て定まると謂ふことである)。

マルクスは生産物使用價值の有無、労働の有用無用を主として生産物又は労働の種類に由て定め、一物の性質上欲望を満たすか否かに由て有用無用が岐れるものとして論じてゐる。勿論其性質上如何にしても人間の欲望を充たし得ぬ物も有り得る。併し多くの場合に、一物の有用無用は其物と他の物との數量的比例の關係に由て定まる。有用物も獨り其物の數量のみを増し行けば、其は無用若しくは無用に近づくのである。空氣や水の事は姑らく措くとしても、例へば食物と衣服とが缺乏してゐるのに靴と帽子許りが際限なく生産せられたなら何うであらうか。食物と衣服とを缺く者に靴と帽子とは殆ど無用か或は全く無用であらう。其は靴と帽子とが其物の性質上人間の欲望を充たす力を持たないからではない。其は其自身としては有用、否な極めて有用の物であるが、他の諸財との關係に於て比例以上に生産せられた場合には無用となるのである。其の最も顯著なものは所謂補充財の場合である。例へばインクが生産されて始めてペンが必要となる。假りにペンの生産に多大の労働が投入されても、インクの生産に従事する者が皆無ならば、ペン生産の労働も無用とならざるを得ぬ。其はペンが其物自體として人間欲望を充たし得ぬからではない。労働投入の比例を失し、比例以上の労働がペンの生

産に投入せられた爲めである。若しペン生産の労働の一部分を割いて之をインクの生産に投じたらば、
 管に此の労働が價值を形成するのみならず、ペン生産に残された労働も價值を生ずるであらう。此場
 合にペンとインキとの生産に投入せられた労働の總量は變らない。たゞ労働の一部分が其用途を變更
 することに依り、労働配分が比例を得ることに依て新たに價值が造られたのである。

更に一例を按ずれば、或地方に於て鐵礦の採掘が行はれ、他の地方に於て石炭の採掘が行はれる。
 而かも此兩地方の間に交通機關がなくて、採掘せられた鐵石は之を溶解精鍊することが出來ず、又石
 炭は石炭で同じく利用の途が盡きて、何れも之を空しく坑口の附近に堆積させてあるものとする。此
 の如き場合には、採鑛と採炭とに労働を費すことが愈々多くして愈々多くの労働が空しく費される。
 此場合若し鐵山又は炭山労働者の一部分を割いて之を兩地間及び市場間の鐵道敷設及び列車運轉に従
 事せしめたならば、管に此の鐵道労働が有用なる、價值を形成する労働となるのみならず、鑛山労働も
 亦た新たに價值を形成し、若しくは、若しくは、より多くの價值を形成する労働となるであらう。此場合に此價值
 の形成は、言ふ迄もなく費用労働の増加に由るものではなくて、労働配分の比例性恢復に由るもので
 ある。其の比例性とは畢竟労働をば需要なき物の生産から需要のより多き物の生産に移轉すること

ある。否な、商品生産者は互に自己の生産物を以て他人の生産物を購入するのであるから、斯く労働
 の用途を改めるといふことは、管に需要ある物を生産するのみでなく、實は需要其者を造り出すと謂
 ふべきである。而かも斯く需要を造り出すことに依て價值が形成せられ、或は増加することは正に上
 述の如くである。

斯様に論究して來ると、商品價值は生産行程上に形成せられ、たゞ需要を待つて實現されるといふ
 見方が維持し難くなり、強き需要の對象たるものは價值大なり、弱き需要の對象たるものは價值小な
 りと謂はざるを得なくなる。此事はマルクス自身に取つては望ましくなかつたかも知れぬが、論理の
 必然は彼れに此事を承認せしめねば已まなかつた。即ち彼れも處々で需要が商品價值を造り、若しく
 は需要の缺乏が商品價值を削ることを認めて居るのである。而かも彼れは社會的必要労働時間が價值
 を形成するといふ最高の命題は決して譲歩するを肯んじないから、此に別様の解釋を下し、技術的必
 要の意味でなく、供給と需要とを比例せしむる爲めの必要な労働量を「社會的必要労働時間」とし
 て、これが價值を定めると言はうとした。即ち一商品の生産行程上に於て一定量(例へばm)の労働
 が費されても、其商品に對する需要量が供給量に比して乏しければ、其商品はm丈の労働を含有せ

ぬものと見るのである。其の著しき一二の場合を擧げると左の如くである。

(一) 一定の勞働費用に依て生産せられた商品が需要に對して過剰を告げ得る場合の事を述べた後で斯ういふ。「最後に、市場に在る如何なる一反のリンネルも、社會的に必要な勞働時間のみを含むものと假定しよう。斯く假定しても、これら各反の總和は、過剰に支出された勞働時間を含み得るのである。若し市場の胃腑が、一ヤール當り二志の平準價格ではリンネルの全部を吸収し得るものでないとすれば、これは取りも直さず、社會的勞働時間中の餘りに大きな部分がリンネル機織業の形で支出されたことになり、その結果は、個々のリンネル機織工がその各の生産物に對して、社會的に必要な勞働時間以上を支出した場合と異なるところは、ないであらう。」(①七七頁)。

(二) 「……社會が諸欲望を充たさうとして、この目的のために或る物品を生産せしめようとする限り、社會はこれについて支拂をなすことを要する。實際、商品生産には分業が前提されるのであるから、社會はその利用し得べき勞働時間の一部を斯かる物品の生産に利用することに依つて、これを購買する。即ち、社會はその利用し得べき勞働時間の或る一定量を以つてこれを購買する譯である。分業に依つてこの一定の物品の生産上に勞働を支出する位置に立つた社會部分は、その諸欲望を充たす

他の諸物品に表現された社會的勞働の形で一の等價を受けねばならぬ。けれども、社會的一物品に支出される社會的勞働の總量、換言すれば社會的總勞働力の中からこの物品の生産に利用される可除部分、即ちこの物品の生産が總生産の上に占める範圍といふ一方の事實と、社會がこの一定の物品に依つて充たされる欲望の充足を要求する範圍といふ他方の事實との間には、何等の必然的關聯も存在せず、たゞ偶然的の關聯が存在するだけである。各個の物品又は或る商品種類の各定量は、その生産に必要な社會的勞働のみを含むに過ぎないかも知れぬ。而してこの方面から觀察すれば、この商品種類總體の市場價值は、單に必要勞働を代表するだけのものである。とはいへ、一定の商品が當時の社會的欲望以上の或る數量で生産されるとすれば、社會的勞働時間の一部は浪費されることになる。で、この場合には、斯る商品の總量は現實に於いてその内に含まれてゐるところよりも遙かに少量な社會的勞働を市場で代表する。……そこで、この商品は市場價值以下に賣り飛ばされねばならぬなり、その一部は全く賣れないといふことにもなり得る」(④一五五頁)

(三) 「一例として、社會的欲望に比し餘りに多大の綿織物が生産されたと假定し、而もこの綿織物總生産中には、與へられたる諸條件の下に必要な勞働時間のみが實現されると假定せよ。それでも

尙、この特殊の部門に於いては、餘りに多くの社會的勞働が支出されたことになる。換言すれば、その生産物の一部は不用となるのである。全生産物は、必要な割合で生産されたかの如くに販賣されるほかはない。相異つた特殊の生産諸部門に充用し得べき社會的勞働時間部分に對する、この量的制限は、價值法則一般を更らに展開して言ひ現したものに過ぎぬ。尤もこの場合、必要勞働時間は別個の意義を含むものであつて、社會的勞働時間中のこれ／＼の分量だけが、社會的の欲望を充たすに必要だといふことになつて來る。これについての制限は、使用價值に依つて與へられる(⑤一七六頁、以上何れも旁點小泉)。

即ち此等の文言に於て、マルクスは他の諸生産部門との關係に於て一定の比例を超過する時は、一商品の生産に投入された勞働は不用の勞働、若しくは浪費された勞働となることを認めてゐる。然るに、不用の勞働は價值を形成しないといふ約束である。乃ち彼れが一商品の生産が技術上に於て幾許の勞働を要しても、其生産物は需要が許す丈の價值しか持たぬことを認め、これが此物を生産する爲め社會的に必要な勞働量だとする所以である。

併し乍ら、商品價值は生産上社會的に必要な勞働時間に依て形成されるといひ、而して、此の

「必要」は需要に對しての必要だといふことになる。マルクス理論體系に於ける商品價值と商品價格との關係は全然顛倒せざるを得ない。即ち價值が價格を定めるのでなくて、反對に需要供給に由て定まる價格が價值を定めることになるのである。例へば前記(一)の引用文に就いて言へば、含有勞働量から見てリンネルはその生産行程上に費された勞働からいへば、一ヤアル二志の價值を有すべきであるのに、需要に對して其供給が過大なる爲め一ヤアル二志の價值は含まぬと言ふ事になれば、一商品は其生産上に費さるゝ勞働量の如何に拘らず、需要供給關係に由つて定まつた價格丈の價值を有すると謂はなければならぬことになる。

これはマルクスが一方に於て人間勞働力の支出が價值を形成すると謂ひながら、他方に於て無用の物には價值があり得ないとした所から必然的に導かれねばならぬ結論である。若し彼れが飽く迄も勞働を價值形成實質とする立場を以て終始一貫せんとするならば、彼れは其結果が人間欲望を満たすと否とを問ふことなく、一定量の人間脳髓、筋肉、神經、手等の支出は必ず一定額の價值を造ると謂はなければならぬ。若しさう謂へば、其は其なりで一の徹底した見解となる。けれども、其代り此立場から現實世界の交換分配を説明することは斷念しなければならぬ。其はたゞ勞働生産物は其に費さ

れた丈の勞働を含むといふ主張に過ぎないものになつて仕舞ふのである。反之、若しも商品相互及び商品對生産手段の交換を説明せんとすれば、結局需要供給の作用する世界まで退却して來なければならぬ。「社會的必要勞働時間」を技術的必要の意味から需要に對する必要の意味に解釋し直すことは蓋し已み難き必要に促されたものである。(技術的の意味に解しても、「社會的」を平均的と解する以上、矢張り需要を顧慮しなければならぬ。平均的といふのは、現在生産に従事する者の平均的勞働費用の意味であらう。併し乍ら平均的費用が幾許となるかは、幾許の者が生産に従事するかに由て同一でない。一物に對する需要が増加すれば、從來參加してゐなかつた比較的劣等なる生産者も生産を繼續することが出来る。斯る劣等者が參加するか否かに由て「平均」費用が増減すべきは當然である。生産參加者の増減に由て平均費用の増減することなきは、畢竟個別的費用の均等なる場合、即ち「平均」を不要とする場合のみである)。

上記の如くに「社會的必要」を異つた意味に用ゐる結果は、マルクスに取つては極めて重大である。此に由ると價值と價格との主従先後の關係が顛倒されることは今記した通りであるが、此の變改せられた法則を勞働力の價值に適用すると、茲に勞働者の生活費如何に拘らず勞働力は勞働者が收得する賃

丈の價值を持つといふことになる(リンネルは其に費された勞働量の如何に拘らず、需給に由て定まる價格だけの價值を持つといふ意味の前段の説明と同一論法に由て)。

然るに、資本家が實際に勞働者から購入するものはマルクスの謂ふ如く勞働力ではなくて、勞働の給付である。若し勞働力といふ言葉を用れば勞働力の使用といふべきである。勞働者から資本家に賣らるゝものが勞働ではなくて勞働力であるといふに至つたのは、マルクス苦心の結果であり、従つて又其の特に力説する所である。それは一切商品の價值を定めるものは其生産の爲めの必要勞働時間であるといふ命題を勞働者に適用すると、直ぐ、例へば一日十二時間の勞働の價值如何といふ難問に逢着するからである。此處で若し十二時間の勞働は十二時間の勞働だけの價值を持つといへば、それは愚かなタウトロギイに響くのみならず、マルクス流に餘剩價值の發生を説明することが不可能となり、若し又十二時間の勞働の價值が十二時間以下の勞働に依て定まるといへば、これ亦た等價交換の原則に牴觸する。其處でマルクスは、賣買されるものは勞働力であり、勞働力の消費即ち勞働は、勞働力其者よりも多くの價值を生じ得るとして此難關を通過せんとした。

マルクスの定義によれば「勞働力、即ち勞働能力とは、人の現身の中に、生きた人格の中に存在す

る身心能力の總括であつて、人は何等かの種類の使用價值を生産する度び毎にこれを運轉する」のである。併し資本家が購入するものは勞働力ではない。曩にはヘルマン、近くはオツペンハイマアの力説するやうに、斯の如き意味の勞働力は人格の自由の認めらるゝ社會では賣買の對象となり得ない。賣買し得るものは、たゞ奴隸の勞働力のみである。今の社會で勞働者若しくは資本家が爲し得ることは、此の一定の對價に對して勞働能力を使用せしむる（或は使用する）ことである。此能力を運轉せしむることである。カウツキイはマルクスを祖述して「資本家は三鞭酒を買ふのであつて、三鞭酒から生ずるホロ酔ひ機嫌を買ふのではない。それと同様に彼れは勞働力を買ふのであつて、勞働を買ふのではない」と書いてゐる（高島譯、資本論解説）。併し此比喻は適切でない。三鞭酒は飲んで酔へば無くなつて仕舞ふ。勞働者は勞働しても依然として其勞働力を持つてゐることは、宛も地主が其所有地を他人に賃貸しても期限到來後には依然として始めの地力ある土地の返還を受けるのと同様である。故に比喻を用ゐるならば、賣買よりも賃貸借に喩ふべきものである。（Fr. Oppenheimer, Die soziale Frage und der Sozialismus, 1913）。古典的定義によれば、地代は土地の本原的不可滅的なる力の使用に對して支拂はるゝものであるといふ。勞働力の場合も同様であつて、商品としての支拂は勞働力其者

でなく、此力の使用に對してなされる。即ち其處で行はれるのは勞働力の賃貸借である。資本が購入し、勞働者が賣却するものが勞働力其者でなくて其使用、即ち勞働給付であることは、更に勞働力は同じでも其の勞働力を使用する程度が異がへば當然之に對する賃銀も異なることに由て證明される。資本家が同じ勞働力を有する勞働者を雇傭するが、其或者は之を一日十二時間に互つて使用し、他の者は僅に六時間使用するものとすれば、（勞働強度は同一として）勞働者は當然より長き勞働時間に對してより多くの賃銀を要求するであらう。反對に資本家も亦た、僅に六時間以上の勞働を肯んせぬ者と、十二時間の勞働に服する者とに對して決して甘んじて同額の賃銀は支拂はぬであらう。何故であるか。言ふ迄もなく、受け若しくは與へる勞働給付の量が異なるからである。個數賃銀の場合には此事は一層明瞭である。マルクスは個數賃銀論の章に於て頻りに此支拂方法が賃銀削減の手段に利用されることを説いてゐる。其當否は此處では問題でない。たゞ與へられたる個數賃銀率の下に、一日三十個の仕上げに對して二十個に對するよりも多くが支拂はれるとすれば、其處で賣り若しくは買はれるものは、勞働者の持つ勞働力でなくて、勞働力の支出たる勞働給付であることが最も明白でなくてはならぬ。

さうするとマルクスに取つて極めて重大な結論が引かれる。不拂労働、又は搾取の概念は、少くも經濟理論の領域内では成立しないといふことが是である。

抑も搾取の概念は、労働者がその提供した労働に對して其より少ない價值を以て酬ひらるゝ處に成立する。然るに右段に於て、吾々は労働者と資本家との間に賣買せらるゝものは労働力でなくて労働給付であることを論究した。然るに其の前段の論究は、提供せらるゝ労働は、需要供給關係に由て定まる賃銀だけの價值を持つといふことを吾々に教へた。即ちこれに由れば、労働者は必ず其の提供したものと正に等しい丈けの價值を取得することになる。取得する筈である。労働者が提供するもの、價值其者が、之に對する支拂に由て定まるといふのであるから。

マルクスの價值理論は、搾取を説明する爲めに存在する。然るに今推究し得た所によれば、マルクスの立場から出發しても搾取は有り得ぬこととなる。若し此推究が正しければ、マルクスの理論は全然無意義のものたらざるを得ないのである。根本的困難は抽象的人間労働が商品價值を形成するといふ立場に於ても使用價值の存在を前提しなければならぬ所に存する。一種の需給説への退却は其の必然の歸結である。

マルクスの價值論はリカード説の展開である。而かも彼れの理論はリカードオミルを離れた限りに於て失敗に終つてゐる。而して其失敗は労働を商品の供給を左右する重要な一要素と見るに止めず、進んで或は労働を價值形成實質となし、或は凝結労働即ち價值となす所に起因する。彼れは此立場を以て一貫することが出来なかつたのである。重ねて言ふが、價值は労働の所産ではない。労働は商品の供給を左右する重要原因であり、任意に生産し得べきものに在つては、——需要を豫定すれば、——其の長時に互る相互交換比率は、其供給事情に由て左右されるといふ丈けの事に過ぎないのである。さうすると結局價值價格の問題は、其の欲望に對する稀少性 (Seltenheit, Knappheit, rareté) に依て決せらると謂はなければならぬ。生産物の價值は労働費用が稀少性を左右する限りに於て是に由て左右されるのである。

そこで價值は生産行程上に造り出され、此の價值の總額が餘剩價值總額を定め、餘剩價值が利潤を定め、利潤が生産價格を定め、生産價格が商品交換を支配するといふシエマは、結局其根據を失ふことになる。彼の前に掲げた第一第二の兩表には次章に指摘する通り幾多の無理が含まれてゐるが、交換經濟に於ける交換、分配の總過程は、大略次の如くに見るべきものである。

假りに外に對して鎖封された交換經濟に於て行はるゝ交換全體を總括的に見ると、其の最も重要なものは、年々の生産物と年々の生産的勤務との交換である。其の生産的勤務は如何なるものかといふに、(一) 勞働を給付すること、(二) 生産に必要な物的要件を提供すること、(三) 勞働を購入し、需要ある生産物を生産して市場に提供する任務に當ることである。(一) には廣義の勞働者、(二) には地主資本家、(三) には企業家が當るのであるが、マルクスは大體企業家即ち資本家として取扱つてゐるから其に従ふと、生産的勤務の提供者は (イ) 勞働者と (ロ) 資本家となり、夫々其の提供するものに對して賃銀と利潤といふ形で生産物を收得する(地主はリカアドオの理論に従つて姑らく度外する)。

重要な問題は、勞働者及び資本家の提供する生産的勤務が夫々如何なる割合を以て生産物と交換されるかといふことである。生産物と生産的勤務とが交換されるのであるから、双方の價格は當然相一致しなければならぬ。生産物の價格總額が生産的勤務の價格總額、即ち賃銀及び利潤の總額以上に上り、又は以下に下るといふことはあり得ない。

そこで勞働給付の價格であるが、勞働は必ず其勞働の參加に依て生産せられた商品よりも稀少性の程度が劣らなければならぬ。其理由は外でもない。將來に於て生産物となるべき勞働其者は、既に出來上つた生産物ほどに人間の欲望を充たし得ないからである。これは享樂財生産財の凡てに就いて言ひ得ることである。裁縫工の勞働は衣服を作る。併し衣服ならば着られるが、裁縫工の勞働其者は直ちに衣服を欲する人の欲望を充たすことが出來ぬ。絲は織つて布にすることが出来る。併し紡績の勞働其儘では直ちに之を織物業の原料として使ふ譯には行かぬ。紡績機械は紡績の役に立つ。併し機械を造るべき勞働は勞働の儘では今直ぐ紡績の役には立たぬ。即ち完成品でも、原料でも、勞働用具でも、苟も既に生産せられた生産物は、之を生産すべき勞働よりも必ず強く欲望される。(生産物は不要であるが、之を生産すべき勞働は需要されると言ひ得る如く見える場合は、特定の生産物は需要されないが、之を生産すべき勞働は需要ある別の財貨を生産する爲めには需要されるといふ場合である。予が主張する處は、特定生産物の一定量に對する欲望は常に之を造るべき特定勞働の一定量に對する欲望よりも強く、従つて、生産物全體に對する欲望は、之を生産すべき勞働の全體に對する欲望よりも強いといふに在る)。故に若しも完成生産物(享樂財たると生産財たるとを問はず)の一定量と、此丈けの生産物を造るに要せらるゝ勞働量とが同一の價格を以て提供せられたならば、何人も勞働を取らずして、

生産物を擇ぶに相違ない。従つて生産物の價格は労働の價格よりも騰貴し、其間に或差額を置いて始めて均衡が得らるゝであらう。此間に處して、一方市場に於て労働給付を買ひ、他方市場に對して生産物を提供する者が資本家であるから、右の差額は利潤として資本家の收得に歸する。而して労働を買はんとする資本家が多ければ生産物で量つた労働一定量の價格は高く、反對ならば低かるべき筈である。而かも資本家が労働給付を買ふには其丈けの手段を持たねばならぬ。これが資本である。資本の用は、斯く資本家をして、生産物が完成して賣却されるに先だつて労働を買ふこと、即ち生活資料を労働者に給することを得しむるにある。(資本家が直接購入するものには労働の外猶ほ労働用具や原料がある。けれども是等のものは、或る資本家に依て買はれると共に他の資本家に依て賣られるのであるから、結局總括的に見れば、資本家は労働を買つて生産物を提供することを任とすると言つて好い。)

要するに、労働に依て價值が生産せられ、生産せられた價值から労働力の價值を差引いた殘餘が餘剩價值で、これが利潤として配分されると見るのは失當である。利潤の存し得るのは生産物に對して之を造るべき労働が比較的過剩(需要との關係上)なるに因る。労働の價值は畢竟労働の稀少性に由て

定まるとするの外なく、生産物の價值も同じく其稀少性に由て定まるとするの外ないから、利潤は生産物も労働も(労働力でなく)共に其の全價值だけの支拂を受けて猶ほ且つ存在し得る。それは生産物の稀少性の方が高いからである。其處に支拂はれざる労働はないのである。

但し是は經濟理論上労働に依て形成せらるゝ價值といふものが有り得ないことを説明する迄であつて、労働者階級が現在收得しつゝある賃銀が或標準から見ても果して充分であるか否かは、更に別の問題である。たゞ或標準から見ても不十分なる賃銀が支拂はれてゐるのは、労働の價值以下の賃銀が支拂はれてゐるのではなくて、労働の價值が——經濟上——乏しいからである。價值の乏しい労働に對して其儘少ない賃銀を支拂ふことが差支ないか、或は労働の稀少性を低からしめ、従つて價值を乏しからしめる状態を其儘放置して差支ないか否かは、別に議すべき問題である。

第十五節 生産價格理論の構造に對する若干の批評

マルクス價值理論の根本的誤謬は前記の通りであるが、更に其生産價格説の構造に就いては特に指